

鳥取県米子市

よな ご じょうあと だい 5 4 じ ちょうさ  
**米子城跡第54次調査**

2020. 3

一般財団法人 米子市文化財団

鳥取県米子市

よな ご じょうあとだい 5 4 じ ちょう さ  
**米子城跡第54次調査**

2020. 3

一般財団法人 米子市文化財団

## 例　　言

1. 本報告書は、鳥取県米子市西町地内で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国立大学法人鳥取大学の委託を受けて、一般財團法人米子市文化財団が実施した。
3. 本報告書における方位は真北を示し、表記した座標値は世界測地系第V系の座標値である。またレベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書第2図の地図は、米子境港都市計画計画図（米子市）（平成6年修正）を加筆・修正して使用した。
5. 調査の実施に当たって、基準点測量を㈱エースプランに、木製品の保存処理を㈱吉田生物研究所にそれぞれ委託した。
6. 出土石材の同定及び出土銭貨の鑑定は、高橋章司氏に依頼した。
7. 本報告書は、佐伯純也が執筆、編集した。
8. 発掘調査によって出土した遺物と、作成された図面、写真類は米子市埋蔵文化財センターに保管されている。
9. 現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）  
小山泰正、坂田邦彦、坂本嘉和、高橋章司、西尾克己、山陰歴史館

## 凡　　例

1. 発掘調査時に使用した遺構名及び遺構番号は、報告書作成時に変更している。
2. 遺跡の略称は「YJ54」と記載した。
3. 本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。  
Po：土器・土製品・陶磁器　R：瓦類　S：石製品　W：木製品　M：金属製品  
G：ガラス製品　B：骨製品
4. 本文中、挿図中及び写真図版中の遺構・遺物番号は一致する。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。
6. 遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器が1分の1、3分の1。瓦類は4分の1。石製品が1分の1、3分の1。金属製品が1分の1、4分の1。ガラス製品が3分の1。骨角製品が1分の1である。

米子城跡第54次調査 新旧遺構名対照表

	新遺構名	旧遺構名
第1 遺構面	基礎遺構 1	南擾乱
	基礎遺構 2	北擾乱
	土坑 1	SK4
	井戸 1	SE25
	埋甕遺構 1	SX7
	溝 3	T5・SD135
第2 遺構面	礎石建物 1	SB6
	溝 1	SD17
第3 遺構面	掘立柱建物 1	SK35
		SP97
	塹 1	SA60
	溝 2	SD1
	大石 1	SK26
	掘立柱建物 3	T1・SP176
		T1・SP177
		T1・SP178
	掘立柱建物 4	T2・SD162
第4 遺構面	掘立柱建物 2	SK120
		SP121
	土器集中 1	T5・SX154・155

# 目 次

例言、凡例、新旧遺構名対照表

目次

## 第1章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	2
第4節 調査体制	3

## 第2章 調査の成果

第1節 調査区の層位と堆積状況	4
第2節 第1遺構面の調査	4
第3節 第2遺構面の調査	16
第4節 第3遺構面の調査	18
第5節 第4遺構面の調査	29
第6節 T1の調査	38
第7節 T2の調査	45
第8節 T3の調査	48
第9節 T4の調査	48
第10節 T5の調査	52

## 第3章 自然科学分析

第1節 米子城跡第54次調査出土木製品の樹種調査結果（株吉田生物研究所）	58
--------------------------------------	----

## 第4章 総 括

第1節 弥生時代終末期から古墳時代前期の成果	61
第2節 近世の成果	61
第3節 近代の成果	62

遺物一覧表

写真図版

報告書抄録・要約・奥付

# 第1章 調査の経緯と経過

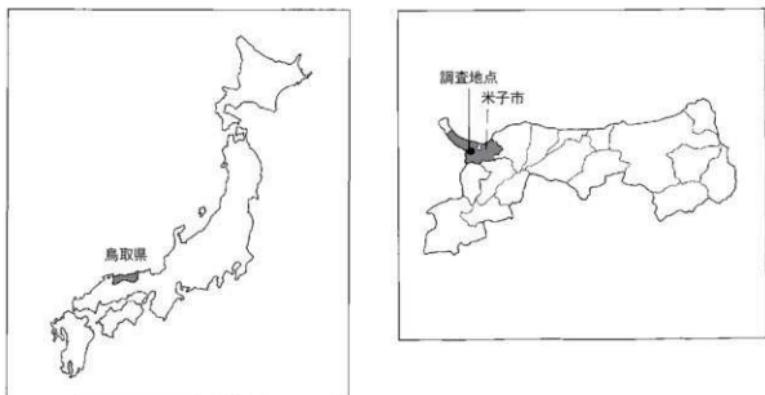
## 第1節 発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市西町80番地において計画された、鳥取大学医学部附属病院第2立体駐車場建設に伴い、工事予定地内に所在する埋蔵文化財について実施したものである。

この地点は、近世後期の米子城下町絵図では、荒尾氏の家臣である早瀬氏の屋敷地に相当しており、明治時代には学制司（明治3年に廃止）が設置され、昭和23年に鳥取大学の事務本館が建てられたあと、昭和50年代にこの建物が撤去され、現在まで鳥取大学医学部附属病院の第2駐車場として利用されていた。この周辺における発掘調査は、平成5年に隣接するガソリンスタンドの建設に伴い米子城跡第2次調査が行われ、庄内式土器が多数出土したことから、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺跡の存在が明らかになっていた。平成6年には、南側の道路拡幅工事に伴う米子城跡第6次調査が行われ、弥生時代から江戸時代までの幅広い時期の遺物と遺構が確認されている。

平成30年度に鳥取大学より敷地内における立体駐車場の建設に伴う文化財照会があり、平成31年3月10日に米子市經濟部文化観光局文化振興課による試掘調査が実施され、江戸時代と弥生時代終末期の遺物が確認された。これにより、事業主体者である鳥取大学と米子市との間で協議が重ねられた結果、一般財團法人米子市文化財団埋蔵文化財調査室が平成31年3月から6月末までの期間に本調査を実施することとなった。

発掘調査については、平成31年1月31日付で鳥取県教育委員会に文化財保護法第92条第1項の埋蔵文化財発掘調査届を提出し、同年2月21日付で許可された。平成31年2月18日付で鳥取大学と発掘調査業務委託契約を締結し、平成31年3月4日から現地調査に着手、令和1年6月18日に現地調査を完了した。



第1図 遺跡位置図

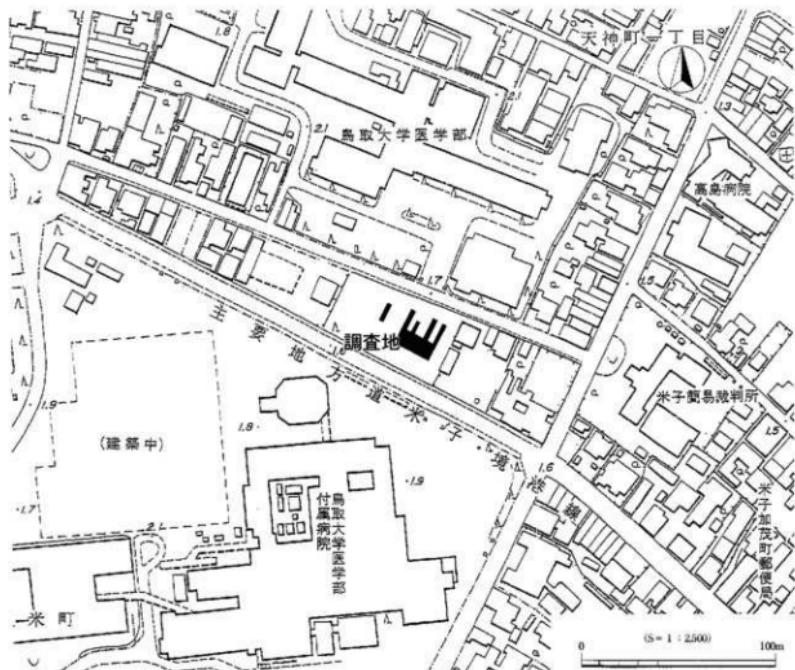
## 第2節 発掘調査の経過

現地での発掘調査は、立体駐車場の建設予定地のうち、建物の地中梁が埋め込まれる部分のみを対象として行い、特に地中梁が密集する中央部分を1区として、18m×9mのトレンチを設定し調査を行った。また、1区の西側と南側の部分は地下深くまで事務本館の建物解体時の搅乱が著しく及んでいたことから、調査区の西側と南側については、既に遺構が消滅していると推測された。1区の北側については、地中梁が入る部分に5本のトレンチを設定して調査を行った。

現地調査では、表土剥ぎと排土の移動に重機を使用した。それ以外の作業は全て人力により、表土掘削、遺構検出作業を行った。業務委託に関しては、測量基準点の設置と木製品の保存処理を専門業者に委託した。

## 第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、令和2年1月から2月までの期間に出土遺物の洗浄と乾燥、注記、接合作業、遺物の実測図作成、トレース、写真撮影、版下作成等を実施し、令和2年3月末日までに報告書を刊行した。



第2図 調査位置図

## 第4節 調査体制

調査主体 一般財団法人 米子市文化財団

理事長 杉原弘一郎

常務理事 先澤達也

埋蔵文化財調査室

室長兼調査員 小原貴樹

主査兼統括調査員 平木裕子（平成31年3月31日まで）

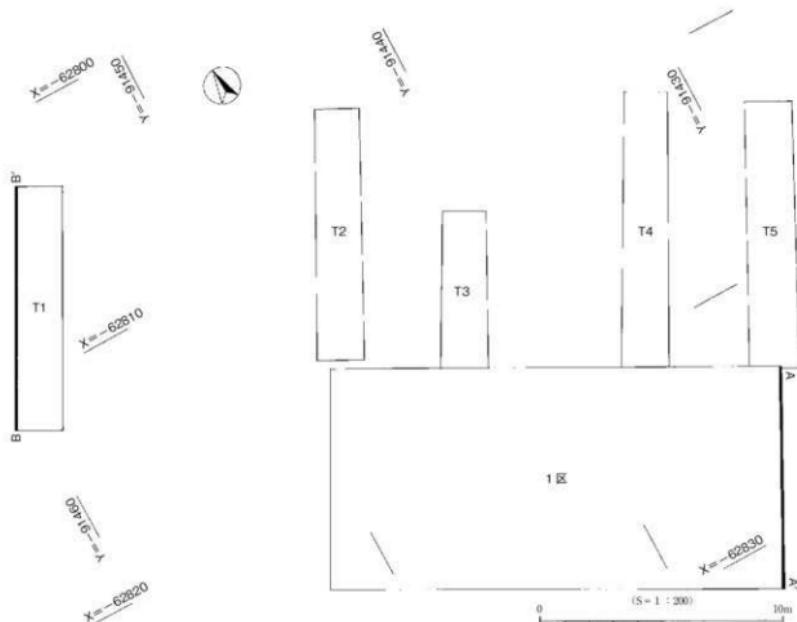
主事 田中昌子

調査担当 次長兼統括調査員 佐伯純也（令和1年7月31日まで）

主任調査員 高橋浩樹

調査補助員 秦 美香

調査協力・管理・指導・助言 米子市経済部文化観光局文化振興課・とっとり弥生の王国推進課



第3図 調査区配置図

## 第2章 調査の成果

### 第1節 調査区の層位と堆積状況

調査区内の層位と堆積状況は、地表面が駐車場として利用されていたため全面がアスファルト舗装されており、その下層にはバラスが厚く敷き詰められていた。更にその下層には鳥取大学の事務本館の建物を解体した際の残土が残っており、かなり攪乱された状況である。

標高1m付近には、暗オリーブ色の砂質土が水平堆積しており、出土した遺物から、この層から下が近世の堆積層と判断された。更に暗オリーブ色土の下層には、黒色系の砂質土が厚く堆積している。この土は、砂粒が多く含んでおり、湿度を含む状態では軟らかいが、乾燥すると固くなる性質がある。また、1区の西側では面的にアカガイの貝殻を敷き詰めた状況が確認されことや、黒色土中に小型の管状土錐が大量に含まれていたことから、加茂川や中海から浚渫した泥土を混和しているのではないかと推測された。黒色土の下層は、明茶褐色や白色の粗砂の堆積層であり、これは弥生時代頃までに堆積した加茂川と法勝寺川の河川堆積層と推測される。米子城下町遺跡では、この粗砂層の上面に弥生時代以降の集落が展開しており、近世の米子城下町も、この粗砂層を埋め立てて造成されたものと考えられる。

### 第2節 第1遺構面の調査

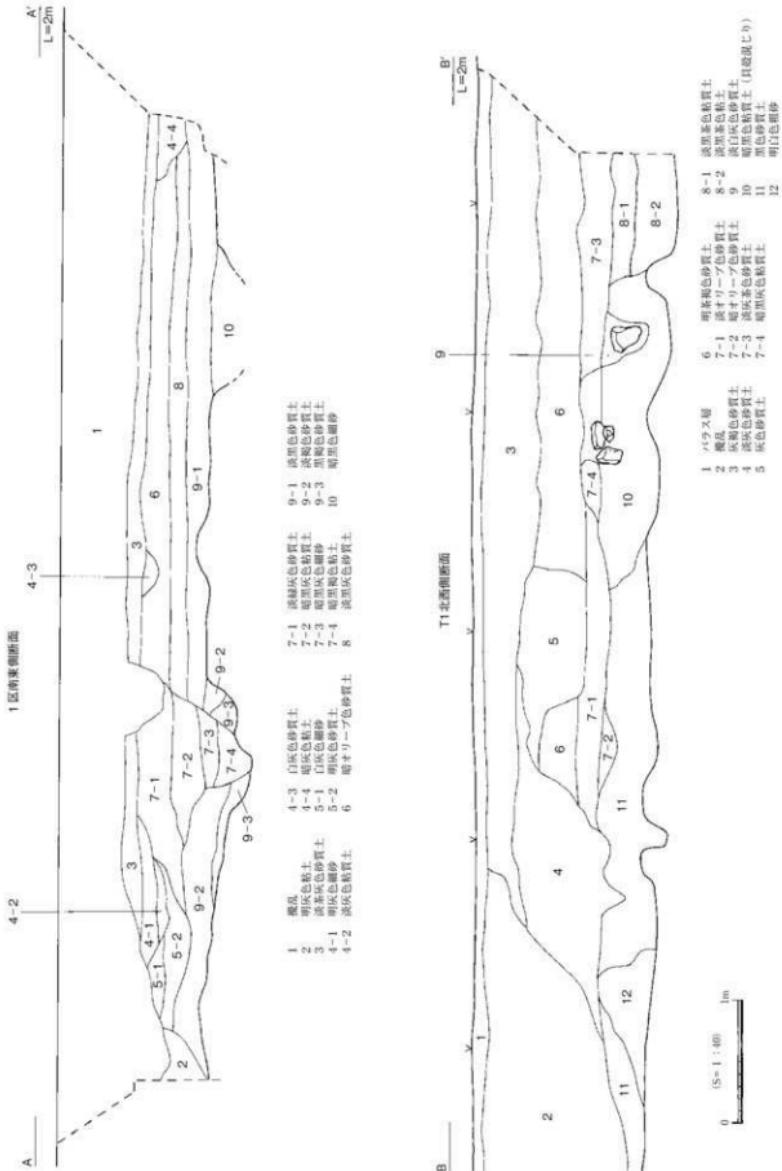
第1遺構面は、調査区の全面に固く締まった暗オリーブ色の砂質土が水平堆積していることから、この面を第1遺構面とした。遺構はこの面から掘り込まれているが、大半の掘り込みは基礎遺構をはじめとする、昭和23年に建設された鳥取大学の事務本館の建物に伴うものと考えられる。鳥取大学の事務本館は、美保基地の中にあった建物を解体してこの場所に再建築したものであり、木造二階建て瓦葺きの建物であった。

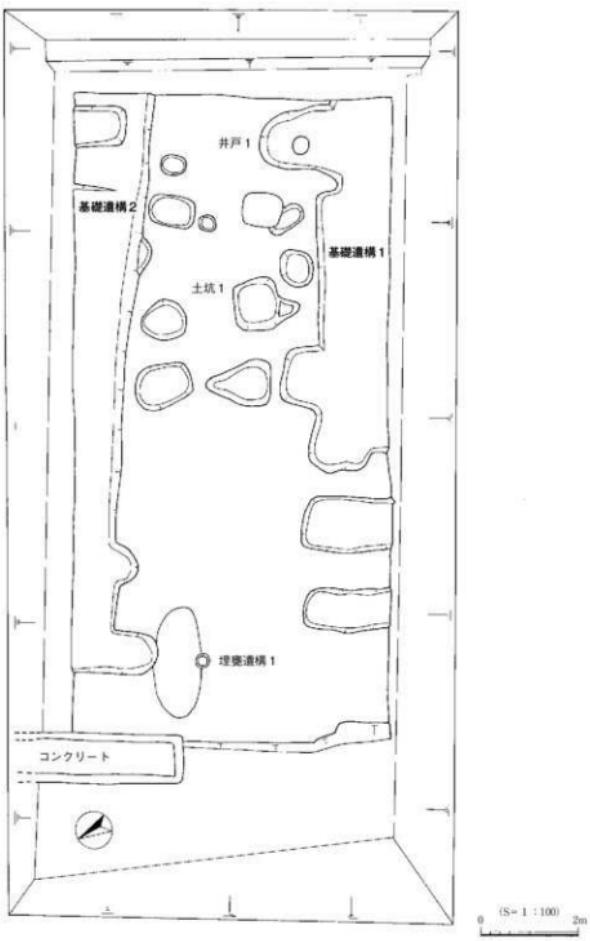
この第1遺構面の年代は、基礎遺構の下から結桶を井戸枠に転用した井戸1が見つかったことや、周辺から明治時代から昭和20年代までのものと見られる遺物が大量に出土したことから、明治時代後半から昭和23年までの期間の遺構面と考えられる。

#### 基礎遺構1・2（第5～7図）

基礎遺構は、元は幅1m、深さ50cmの楕円形の土坑を等間隔に並べた遺構であったと推測されるが、建物の解体時に土坑が攪乱されたため、検出時には溝状の遺構となっていた。建物の建設時には、この土坑の底に人頭大の礫を敷き、その上に直径10cm程の丸太を10本ほど敷き並べ基礎にしたものであり、この上に鉄筋コンクリート製の基礎ブロックを置いていた。米子城下町遺跡では、近代の建物の下には、長い松材を地中深くに打ち込む、捨て杭状の基礎地業を施すのが一般的であり、コンクリートの基礎を使用しているとは言え、このような大型建物の基礎としては貧弱な印象を受ける。

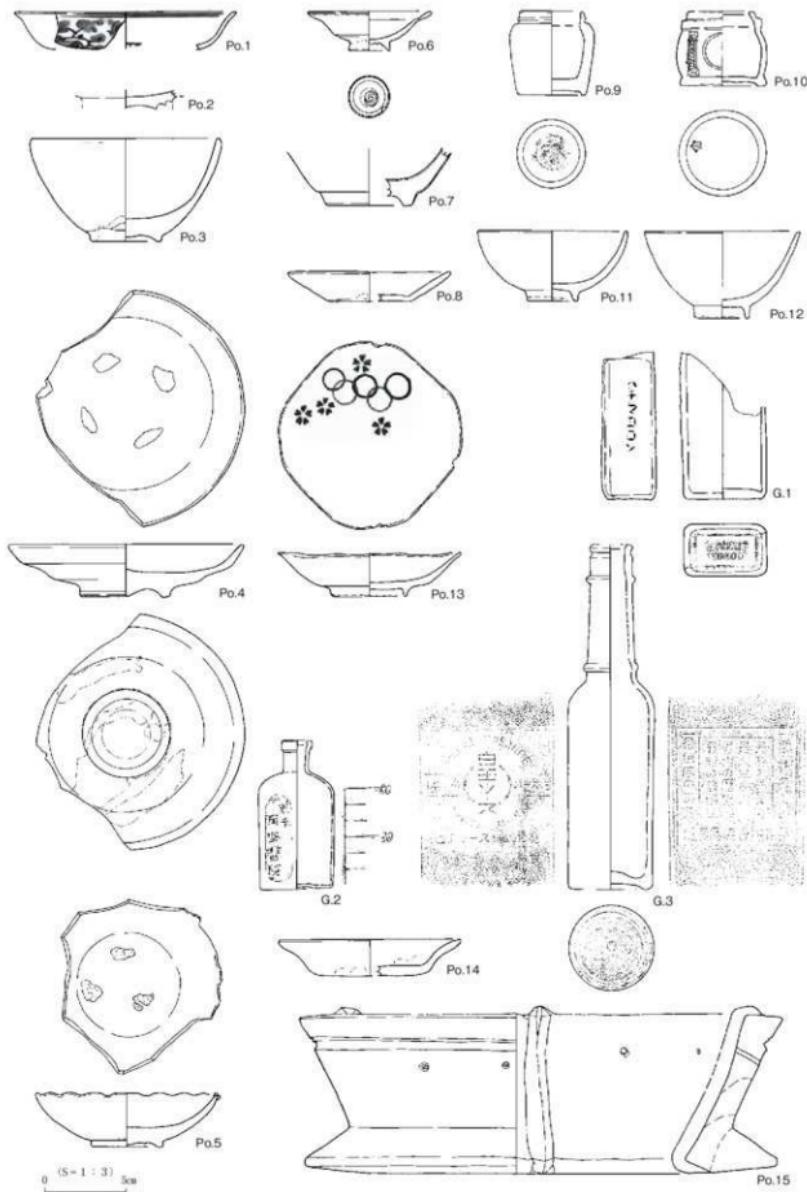
基礎遺構1から出土した遺物は、陶器類とガラス容器、瓦類がある。これらは、後述する井戸1を破壊した際に混入したものと考えられる。Po.1は青花の皿。Po.2は陶器の碗の底部片で、内面の釉は銀化して金属光沢を放っている。軟質施釉陶器か。Po.3は唐津焼の碗で、Po.4と5は唐津焼の皿





第5図 1区第1造構面 造構図

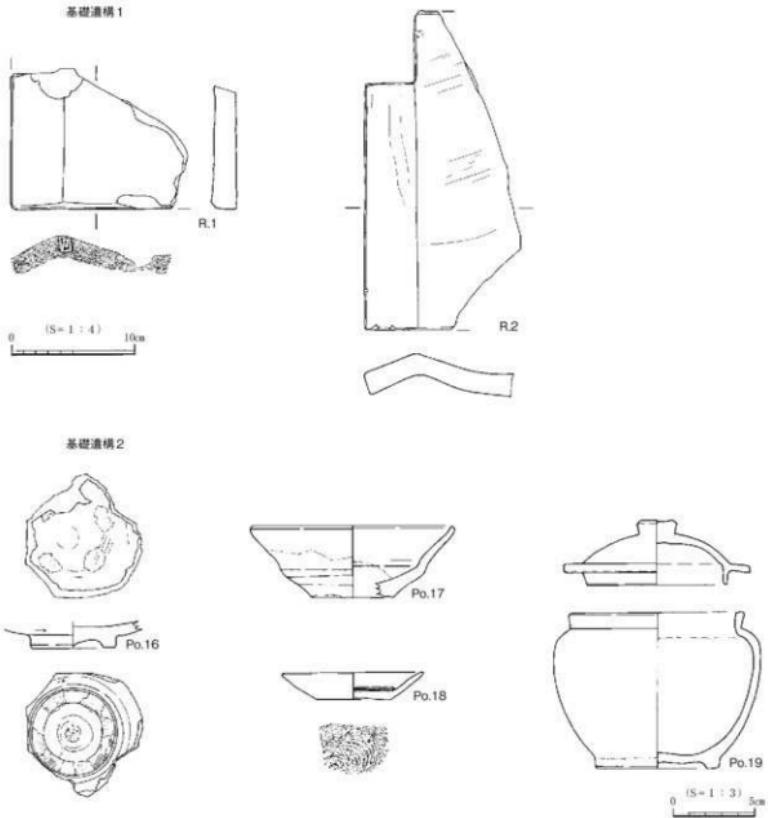
である。Po. 6は、口縁部が大きく外反する小杯で、高台内には螺旋状のケズリ痕が残る。萩焼系の製品と考えられる。Po. 7は、唐津焼の碗。Po. 8は京都系の皿。Po. 9・10は、磁器製のクリーム瓶で、レッテルが剥落しているので製品名は不明だが、Po. 9は底部に花王のマークが印刻されている。戦時中に生産された代用陶器か。Po. 11は、旭日旗と兵隊の絵が描かれた磁器の碗で、底部に統制番号らしき記号がプリントされている。Po. 12も同様の製品で、日の丸の国旗に戦車の絵が描かれている。底部には、「岐147」の統制番号がプリントされている。Po. 13は、磁器の角皿で、花紋と五輪のマークがプリントされている。Po. 15は、瓦質土器の五徳である。利用法は定かではないが、針金を



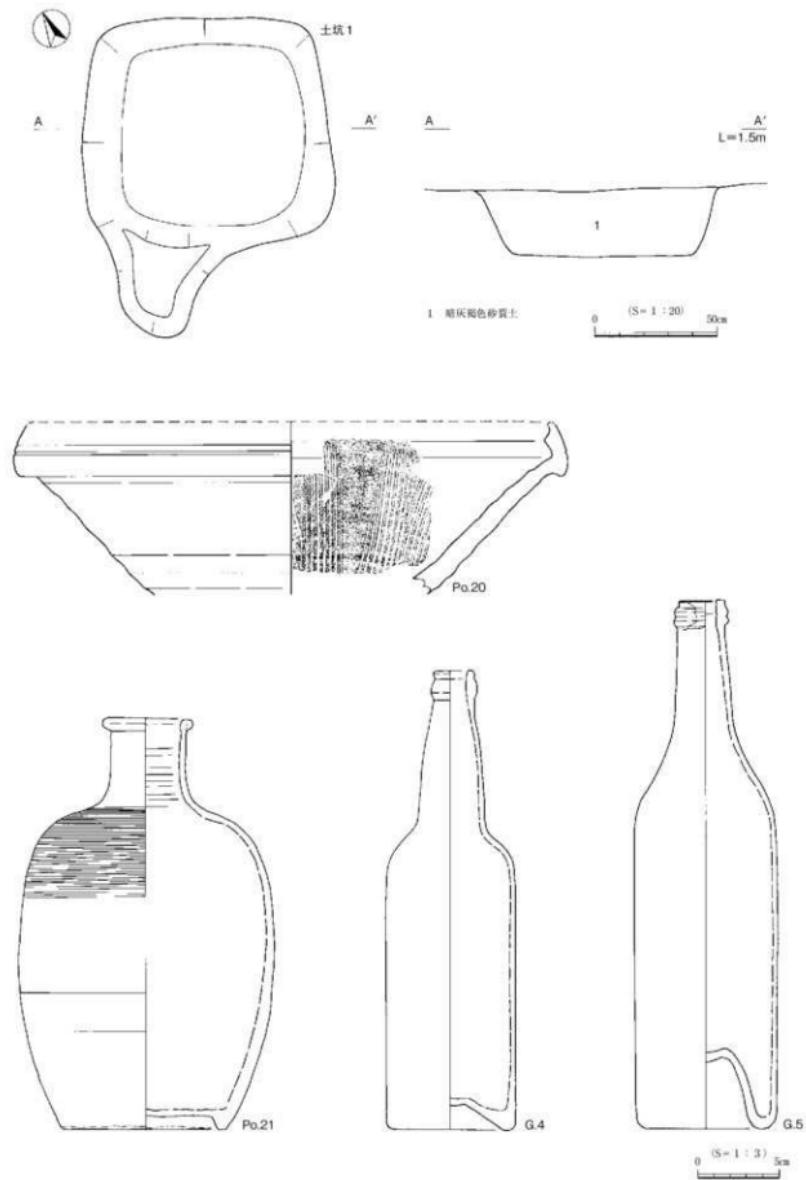
第6図 基礎構造1 遺物図①

通す穴が開けられている。口径が大きいことから、甕に伴うものか。G. 1は、側面に「ヘチマコロン」の文字が陽刻された角型のガラス瓶で、底部に「登録商標180300」と陽刻されている。G. 2は、「米子岡空病院」の薬瓶である。岡空病院は、古くから米子市浜町で開業していた病院である。G. 3は、外面にエンボス加工を施す「白玉ソース」の瓶である。R. 1は煙草瓦の破片で、「カ」のマークが刻印されている。

基礎遺構 2 から出土した遺物は、基礎遺構 1 よりも遺物の数が大幅に少ないが、基礎遺構 1 が後述する井戸 1 の大半を破壊しているためと考えられる。Po. 16は、見込みと高台の接地面に目跡を多く残す白磁の皿で、朝鮮産か。Po. 17は、唐津焼の皿。Po. 19は、蓋付きの陶器瓶で、石見焼と見られる。



第7図 基礎遺構 1・2 遺物図②



第8図 土坑1 遺構・遺物図

## 土坑1（第8図）

土坑1は、一辺1m、深さ25cm程の正方形の土坑である。土坑の内部からは、割れたガラス瓶の破片がたくさん出土したが、2点のみ完形品であった。また、備前焼の擂鉢の破片と在地産の陶器壺が共伴している。

Po. 20は、備前焼の擂鉢。Po. 21は、在地産と見られる赤褐色の釉薬を掛けた陶器の瓶。G. 4は、暗緑色を呈する王冠式のガラス瓶。G. 5は、薄緑色のキックの深いシャンバーニュ型のワインボトルである。

遺構の検出状況から、この土坑は昭和23年の事務本館の建設以前に埋められた廃棄土坑と推測される。

## 井戸1（第9・10図）

井戸1は、基礎土坑1によって上面が破壊された状態で検出された結桶である。桶の大きさは、上部が55cm、底部が45cm、高さは60cmで、天地逆の状態で設置されていた。桶の底面には直径3cm程の礫が敷き詰められ、更に上面には松葉が堆積していた。井戸内には、陶磁器、ガラス瓶、瓦などが大量に詰め込まれており、昭和23年の鳥取大学の事務本館の建設以前に井戸の中にゴミを投げ捨てたものと推測される。

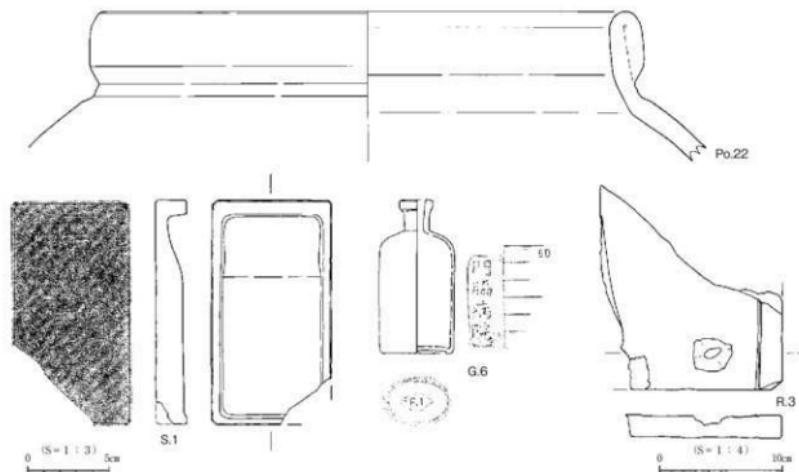
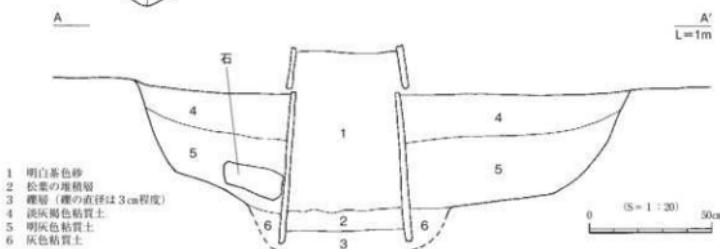
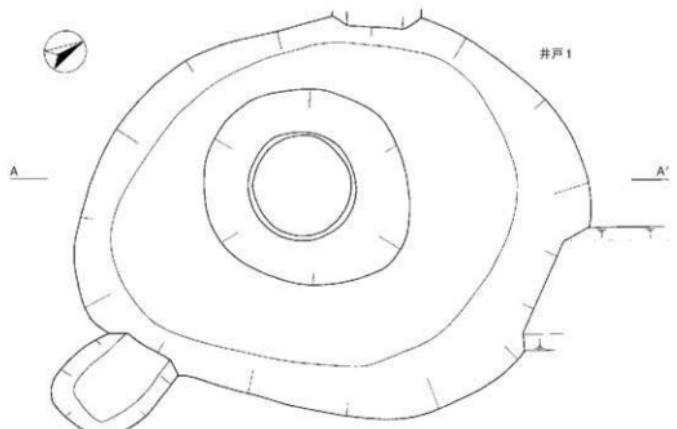
井戸1の掘形は、長さ2m、幅1.6mの楕円形の土坑で、掘形の埋土内から、「門脇病院」銘のガラス製薬瓶や人名の彫られた硯が出土している。

Po. 22は、備前焼大甕の口縁部破片。G. 6は、「門脇病院」銘の薬瓶で、明治時代に現在の鳥取大学附属病院の敷地内にあった病院である。R. 3は、板状を呈する燻し瓦で、海鼠壁などに用いられたものか。R. 4は、井戸1の掘形から出土したもので、茶褐色に施釉された石州系の棟瓦である。米子城下町において、石州瓦が普及し始めた時期は分かっておらず、この資料は石州瓦の導入初期の資料と言える。S. 1の硯は、暗褐色の頁岩製で、裏面に「一年大谷シノ」と釘状の工具で線彫りされている。この人物は、戦前まで鳥取大学の敷地内にあった義方小学校の明治33年3月の卒業生名簿に名前が掲載されていることから、この井戸は明治30年代以降に掘削され、昭和23年までに埋められたものと考えられる。

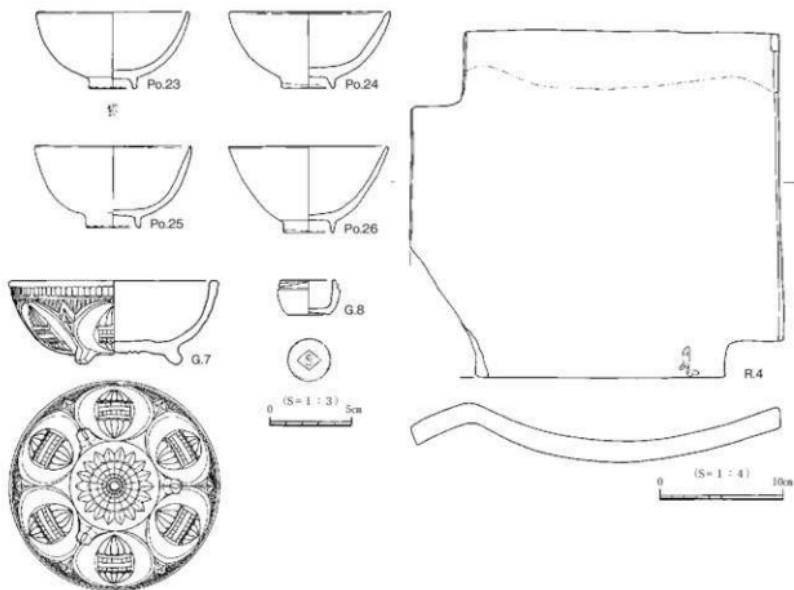
井戸1の井筒内からは、陶磁器類、ガラス製品、瓦片などがぎっしりと詰まった状態で出土した。恐らく、鳥取大学の事務本館の建設に伴い撤去された民家の家財道具ではないかと推測される。

Po. 23~26は、表面に戦時色の濃い絵柄を描いた磁器の茶碗である。Po. 23は、銃を構える兵士と戦闘機、玩具の馬に跨った兵士の絵が描かれている。高台には、不鮮明な統制記号が陽刻されている。Po. 24は、漫画「のらくろ」と勲章が描かれている。Po. 25は、戦闘機と戦車の絵が描かれている。底部には、呉須で書かれた記号の上に緑色の記号がプリントされているが、文字は不鮮明である。Po. 26は、日の丸の旗と戦車の絵が描かれている。高台には「岐14□」の統制番号がプリントされている。

G. 7は、三足の付く透明のガラス製の鉢で、本来は蓋が付属していたと考えられる。外面には切子細工風の彫刻が施されているが、研磨した痕跡は見られず、プレスガラスの製作法で作られたものか。G. 8は小型の白色ガラス製クリーム瓶で、軟膏などを入れる容器か。



第9図 井戸1 遺構・遺物図①



第10図 井戸1 遺物図②

### 埋甕遺構1（第11図）

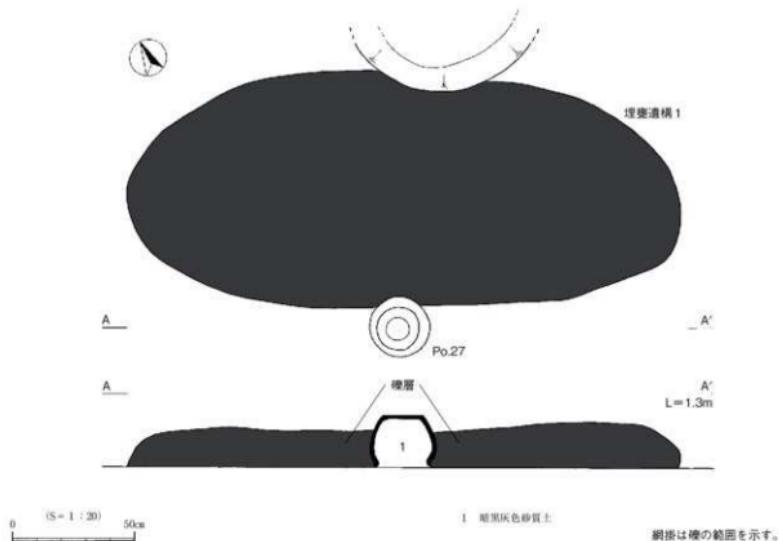
調査区の中央部で検出した、長さ2.4m、幅1mの範囲に梢円形に広がる角礫の集石遺構である。その集石に接して、陶器の壺を天地逆の状態で設置している。重機による表土掘削中に検出したため、壺の底部は半分以上が欠損しており、集石遺構の掘形も分からなかったが、集石の下層には遺構は見られなかった。検出面から見て、昭和20年代以前の遺構と推測される。

Po.27は、暗茶褐色の釉薬を施釉する陶器の壺である。产地は不明だが、島根県東部地方で生産されたものか。

### 第1遺構面出土遺物（第12・13図）

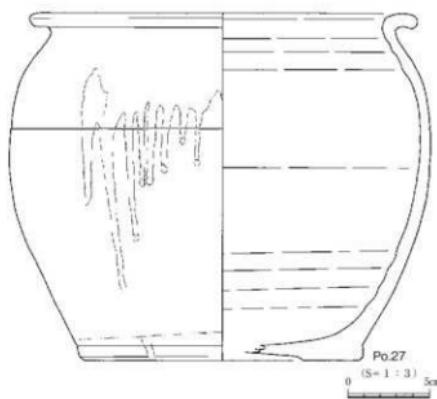
第1遺構面の検出中に出土した遺物は、陶磁器やガラス製品、瓦類などがある。

Po.28は、青花の皿。Po.29・30は伊万里焼の碗。Po.31は、胎土が淡灰色を呈する焼締陶器の建水である。Po.32は、暗茶褐色の釉を掛ける壺で、表面に象嵌風の白土が施されている。備前焼か。Po.33・34は、土師器の皿。Po.36は、土製の角型焜爐である。表面は丁寧にヘラミガキがなされており、正面には開閉式の扉が付けられている。扉の右側には製造者名と見られる印刻が押されているが、不鮮明なため文字を読み取ることが出来ない。内部は空気孔の空いたラッパ状の燃焼部が付けられ、円形の炭受けが装着されている。Po.35は、この焜爐に付属する五徳である。米子城下町遺跡では角型焜爐の出土例は珍しいが、これによく似た製品は、東京大学構内遺跡でも出土していることから、遠隔地から搬入品されたものか。また、井戸1の内部から出土した破片も接合関係にあることか



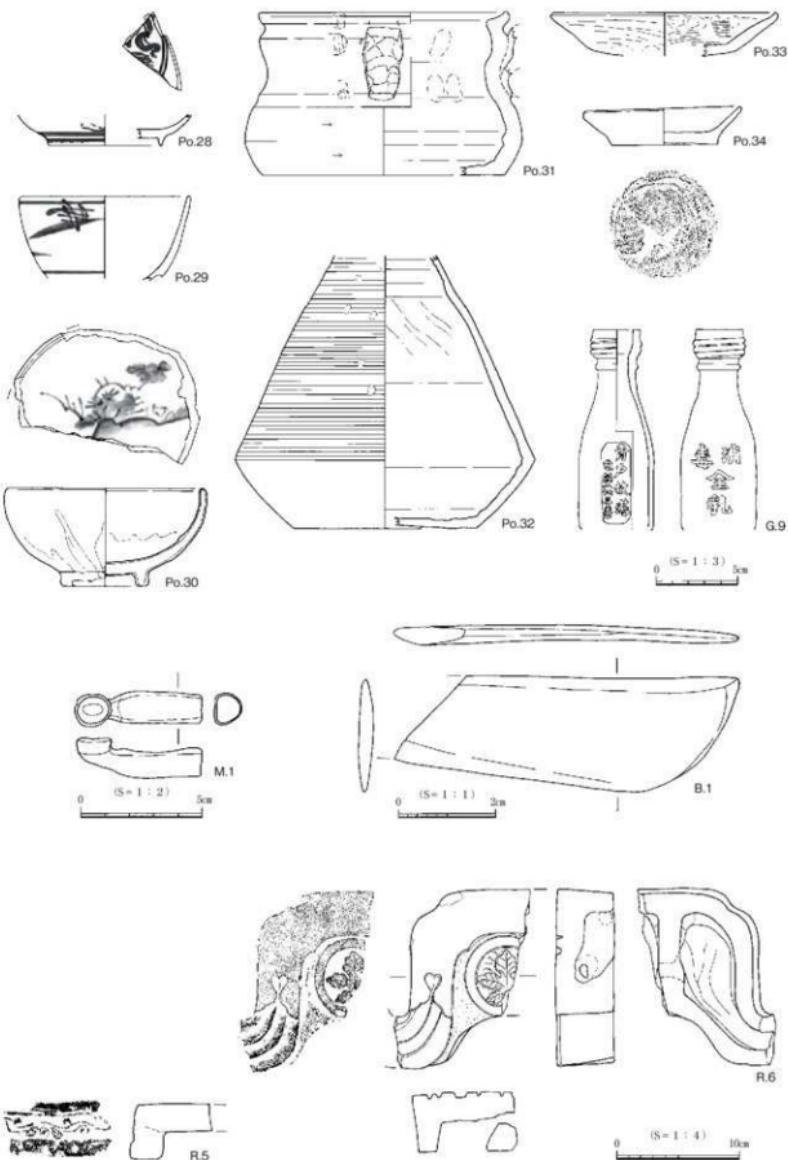
I. 暗黒灰色砂質土

網掛けは煙管の範囲を示す。

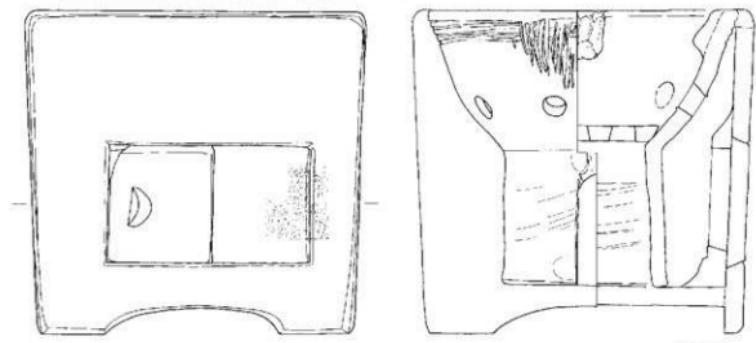
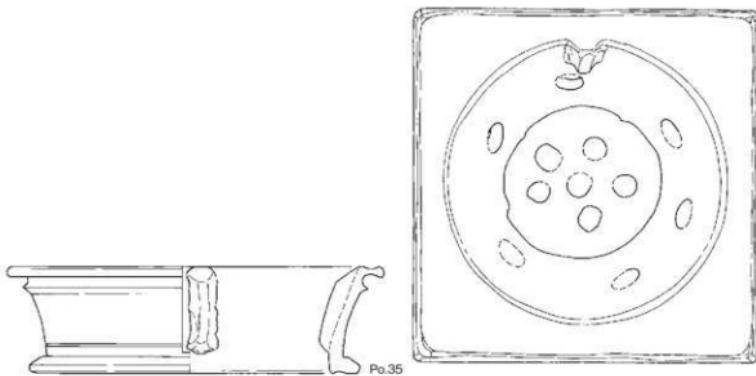


第11図 埋藏遺構 1 遺構・遺物図

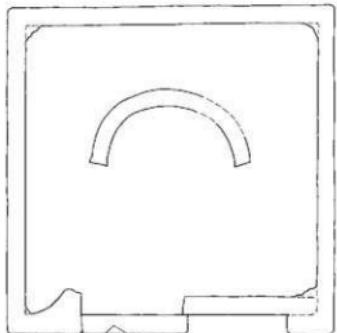
ら、本来は井戸 1 に伴う遺物であったと考えられる。G. 9 は「青戸牧場」銘の牛乳瓶である。外面にネジ山が切られるタイプの牛乳瓶で、「消毒」、「全乳」の文字が陽刻されている。青戸牧場は、大正15年の電話帳に記載があり、米子市角盤町に会社があったと見られる。M. 1 は、煙管の雁首。B. 1 は、ヘラ状の骨角製品である。R. 5 は、中心飾りが下向きの三葉紋で、左右に線状の唐草紋が配置される軒平瓦である。R. 6 は、五葉の家紋を施す箱造りの鬼瓦である。小型品であることから、門などに用いられたものか。



第12図 1区第1遺構面 遺物図①



0 (S=1:3) 5cm

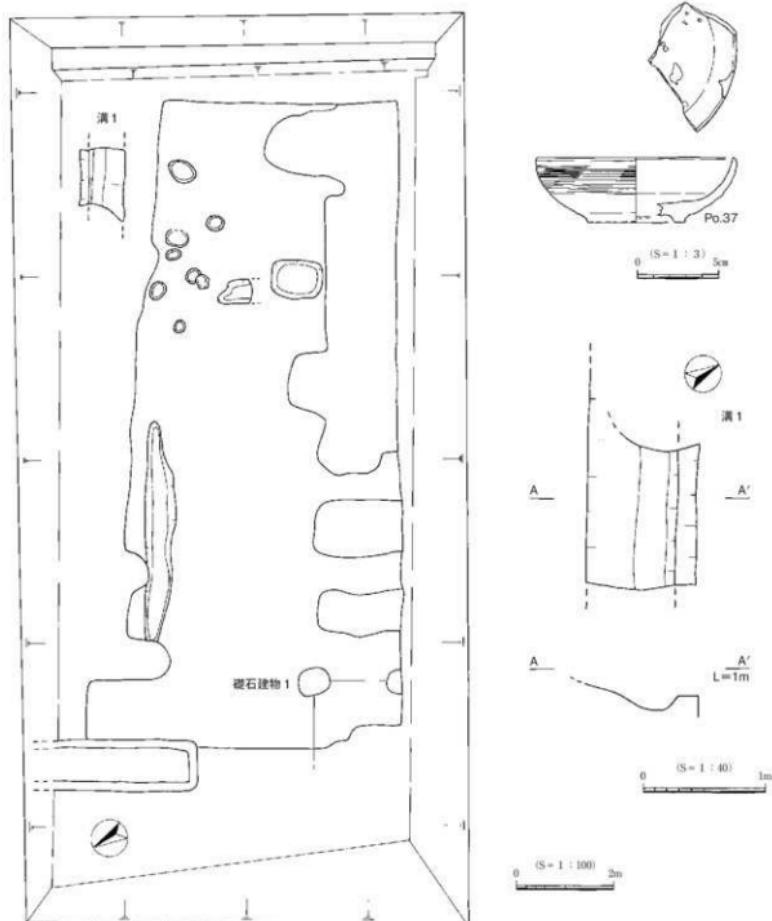


第13図 1区第1遺構面 遺物図②

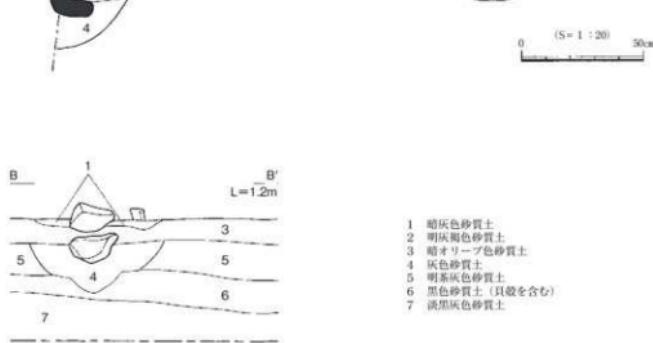
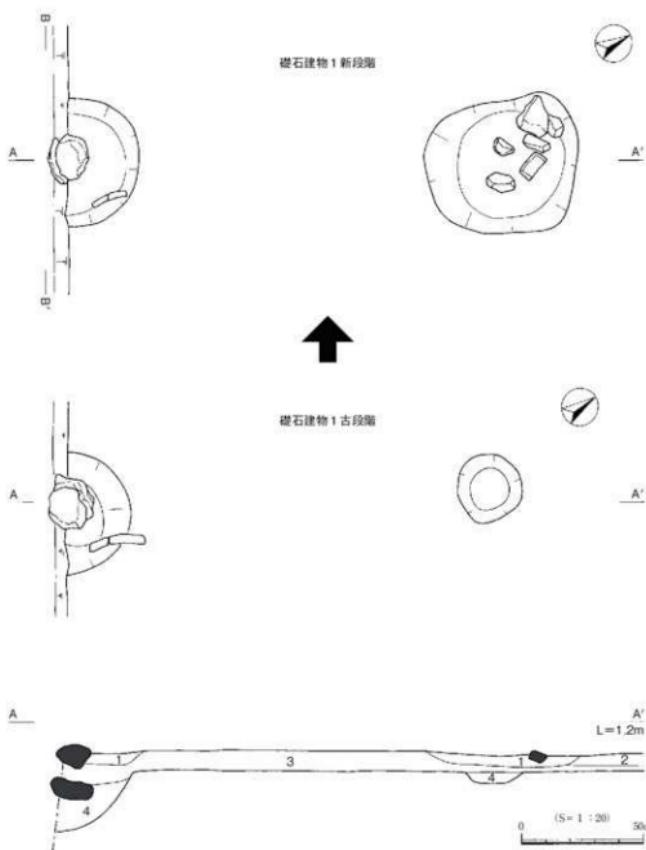
### 第3節 第2遺構面の調査

第2遺構面は、第1遺構面から10cmほど掘り下げた地点で見つかった水平な堆積層である。断面観察では明瞭な線は引けなかったが、遺構掘削中に水路状の遺構やピットの輪郭が明瞭に確認された。しかし、この遺構面では掘り込みが浅いため、建物に伴う柱穴とは断定できなかった。出土遺物は、遺構面の精査中に唐津焼の皿(Po. 37)が出土している。

第2遺構面の年代は、江戸時代後期から幕末頃のものと考えられる。



第14図 1区第2遺構面 遺構・遺物図



第15図 墓石建物1 遺構図

### 溝1（第14図）

事務本館の基礎遺構2によって、上面が削平された溝状の遺構である。5トレンチでも同様の遺構を検出したことから、溝状の長細い土坑と推測される。

### 礎石建物1（第15図）

1区の南西部で検出した、礎石建物跡と見られる遺構である。第1遺構面の暗オリーブ色土中に長さ20cm、幅15cm程の楕円形の碟が置かれており、それに対応する位置に礎石を抜き取ったような跡が見られたため、礎石建物と判断した。西側の列は擾乱により遺構が失われているため規模は明確ではないが、1.8mの間隔で建てられたものと推測される。更に下層の第2遺構面で同様の規模の礎石があり、同じ場所で建替が行われたものと考えられる。

## 第4節 第3遺構面の調査

第3遺構面は、黒色砂質土の面で検出した。この面は、西側ではアカガイを大量に含む黒色粘質土が水平堆積しており、アカガイには殻が閉じたままのものがあることから、浚渫した中海の泥を整地土として敷かれた可能性も考えられる。この黒色砂質土は、乾燥すると固くなり、土中には大小さまざまな土錐が含まれている。こうしたことから、この砂も加茂川などの川砂を浚渫したものと推測される。また、礎石と見られる大石1を検出した。

### 掘立柱建物1（第17図）

1区の東端部で検出した、角柱を用いた掘立柱建物である。柱の間隔は2mあり、W.1は根石の上に乗っていたが、W.2は根石を用いておらず、粗砂の上にそのまま置かれていた。W.1は、端部を真っ直ぐ切り落とし、側面に膾穴を開け、更に栓を差し込む穴がある。W.2も同様に端部を切り落とし、四角く加工されている。

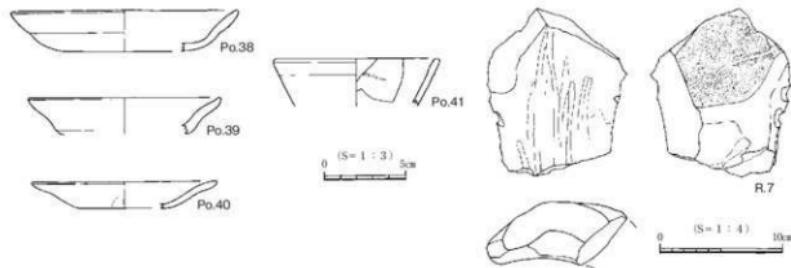
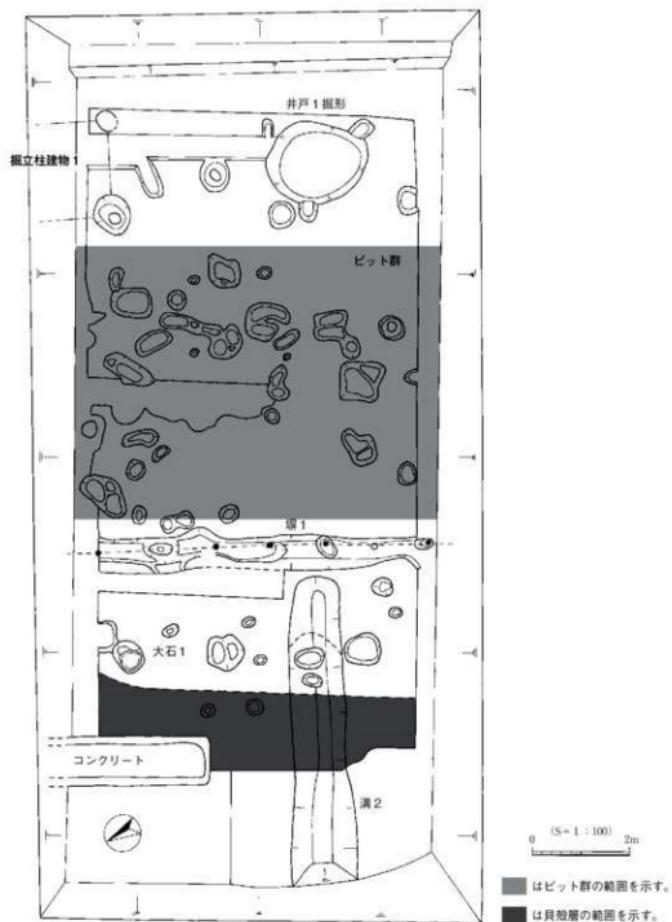
### ピット群（第18図）

塙1の東側に分布する、ピットと柱痕の群集である。柱の間隔はある程度の規則性があるようであり、複数回の建物の建て替えか累積した結果このような群集となったと考えられる。また、下層の第4遺構面でも、同じ場所で柱痕や根石と見られる瓦などが密集していることから、検出できなかったピットも相当数あると考えられる。

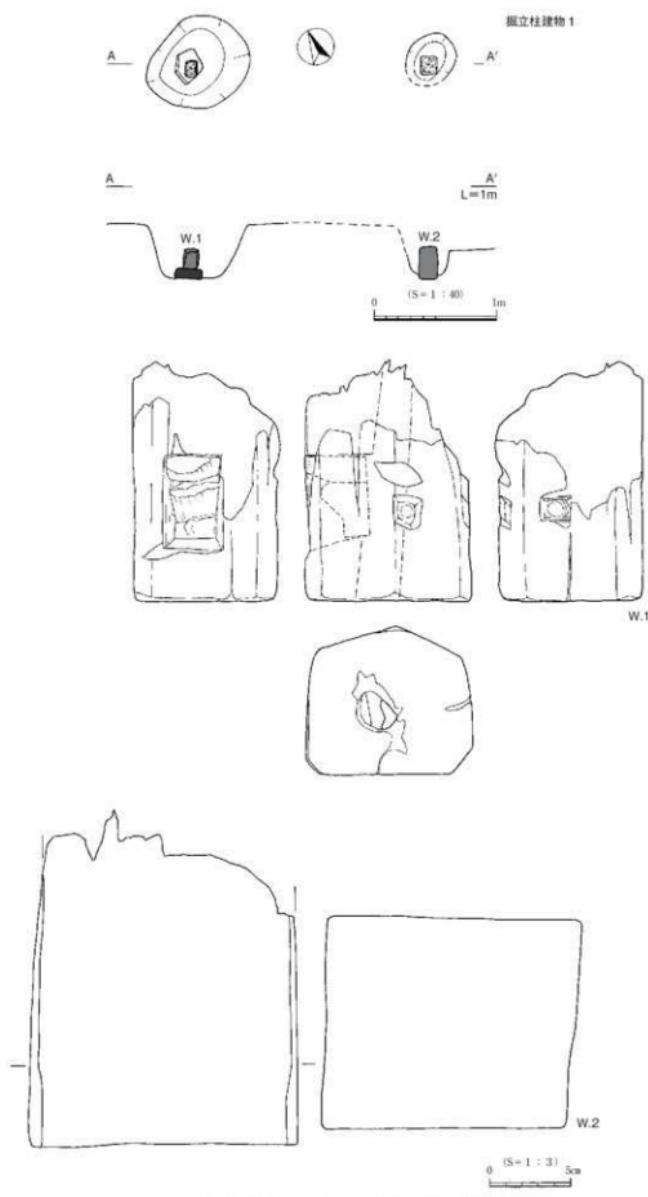
このピット群に伴う遺物は、京都系の皿（Po. 38～40）や陶器碗の破片（Po. 41）、鳥衾瓦（R.7）などが見られるが、年代的に見て江戸後期まで下らないものと考えられる。

### 塙1（第19～22図）

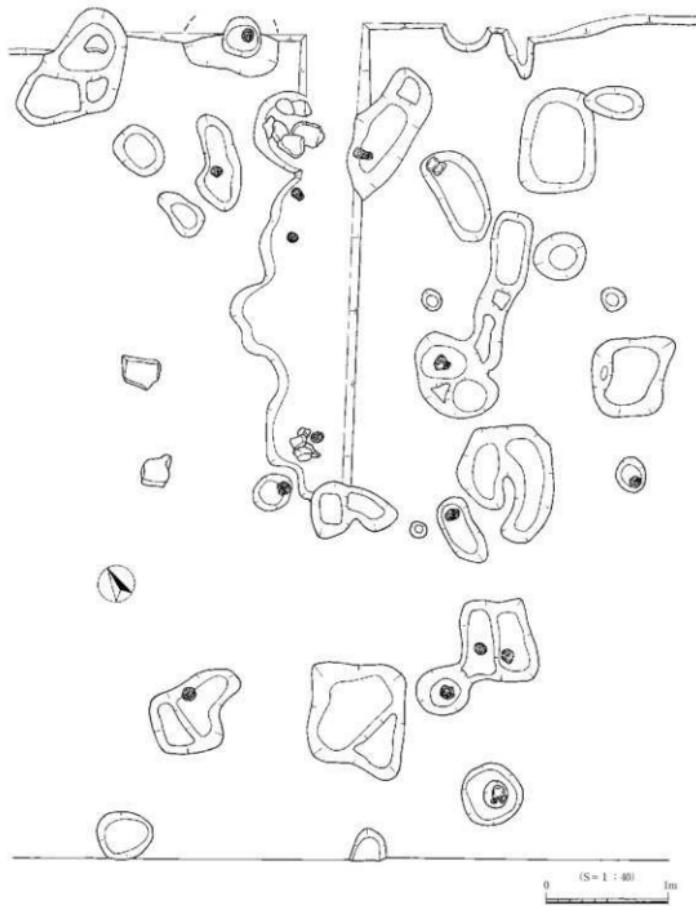
調査区の南北方向に伸びる、検出長7m、幅50～80cm、深さ50cmの溝状の遺構である。一部の柱は抜き取られているが、溝の底面に1m程の間に柱材が設置されていることから、板塙か柵の基礎と推測される。また、この遺構の西側は遺構が疎らであるのに対して、東側では掘立柱建物の痕跡と見られるピット群が密集していることから、この遺構を境に屋敷内の建物配置が異なっていると考えら



第16図 1区第3造構面 造構・遺物図



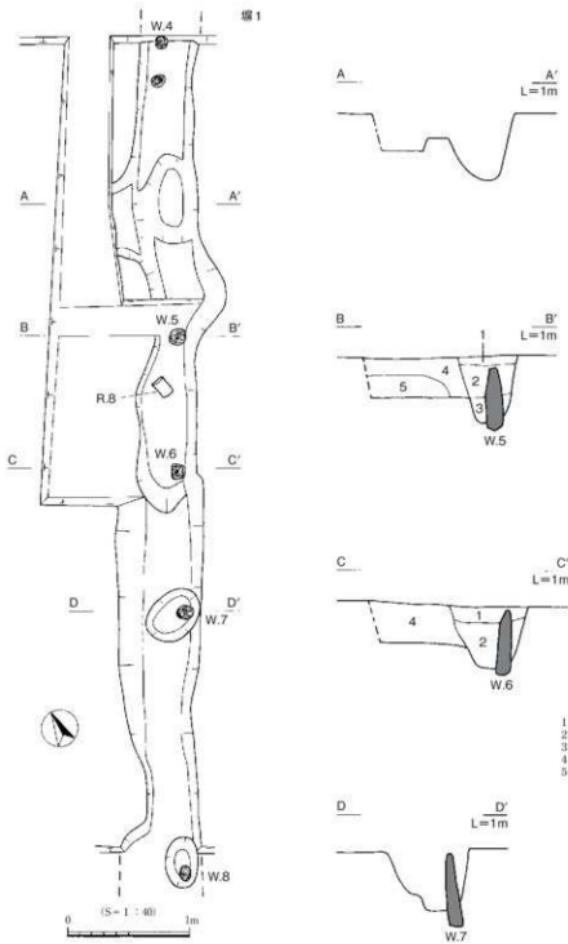
第17図 掘立柱建物 1 遺構・遺物図



第18図 ピット群 遺構図

れる。この遺構内からは、柱材の他にも陶磁器や丸瓦が出土している。Po. 42・43は、伊万里焼の碗。Po. 44・45は、萩焼系の製品か。Po. 46は、京都系の土師皿。Po. 47・48は、底部を糸切する土師皿。Po. 49は、口縁が大きく外反する伊万里焼の皿。Po. 50は、越前焼の擂鉢。Po. 51は、焼締陶器の擂鉢で堺産か。Po. 52は、瓦質の製品で、火鉢か。R. 8は、長さ26.5cmの丸瓦で、コビキBの痕跡が残る。W. 3は、モクレン科モクレン属の木材を使用した下駄の歯である。W. 4~8は扉の柱材で、樹種は全てクリを用いている。

この遺構の年代は、出土した遺物から17世紀後半頃のものと考えられる。

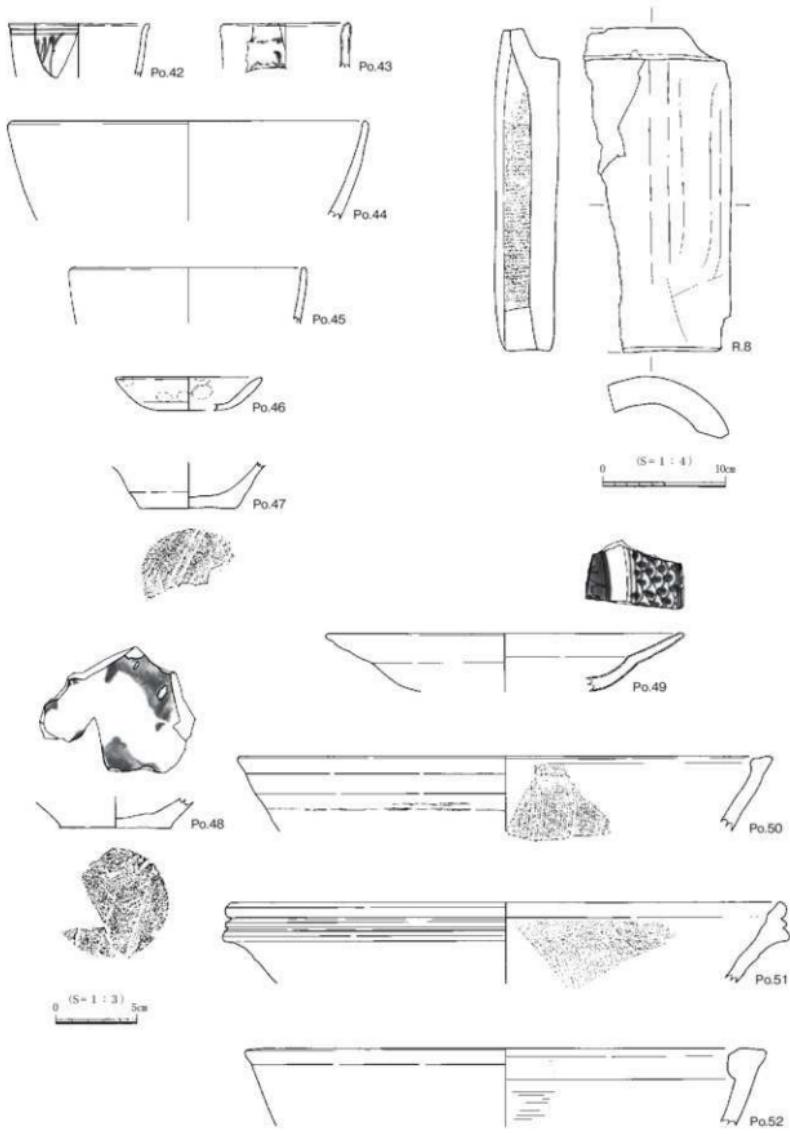


第19図 墓1 遺構図

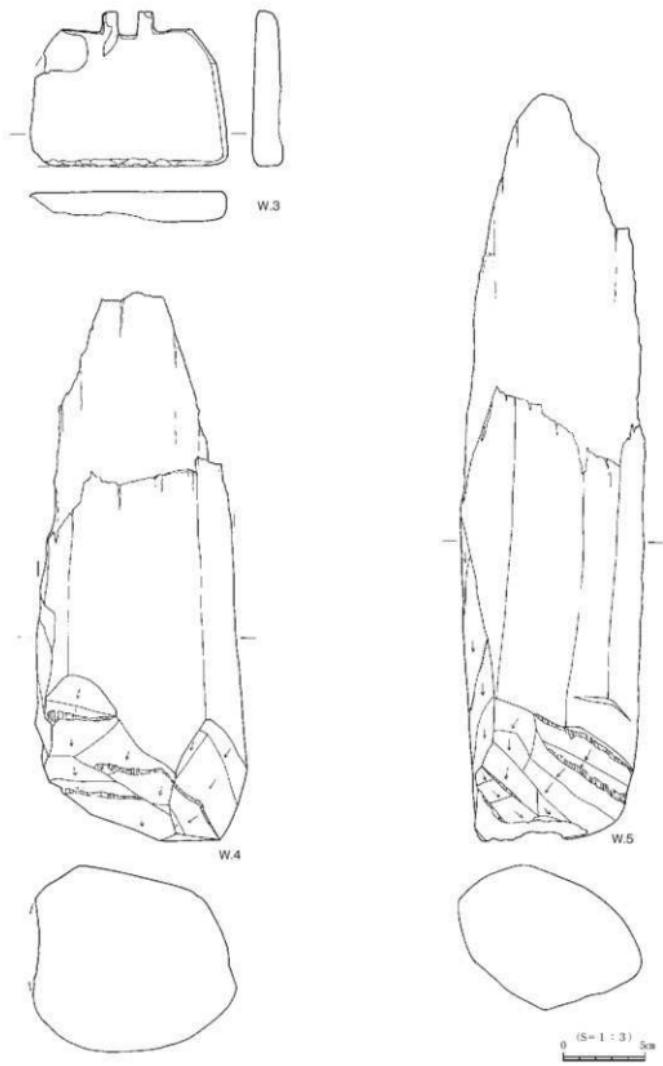
## 溝2（第23・24図）

1区の南側で検出した、溝状の遺構である。検出時には、長さ5m、幅1.2m、深さ60cmであったが、第4遺構面の調査で、更に東側へ1m伸びていたことが判明したため、多少の時期差があったと考えられるが、出土遺物を見る限り、それほど長期に亘って使用された溝ではないと考えられる。この溝の性格については、城下町の街路区画と平行することから、武家屋敷の内部を区画する溝と考えられる。

出土遺物は、溝の下層から多く出土しているが、唐津焼が主体である。

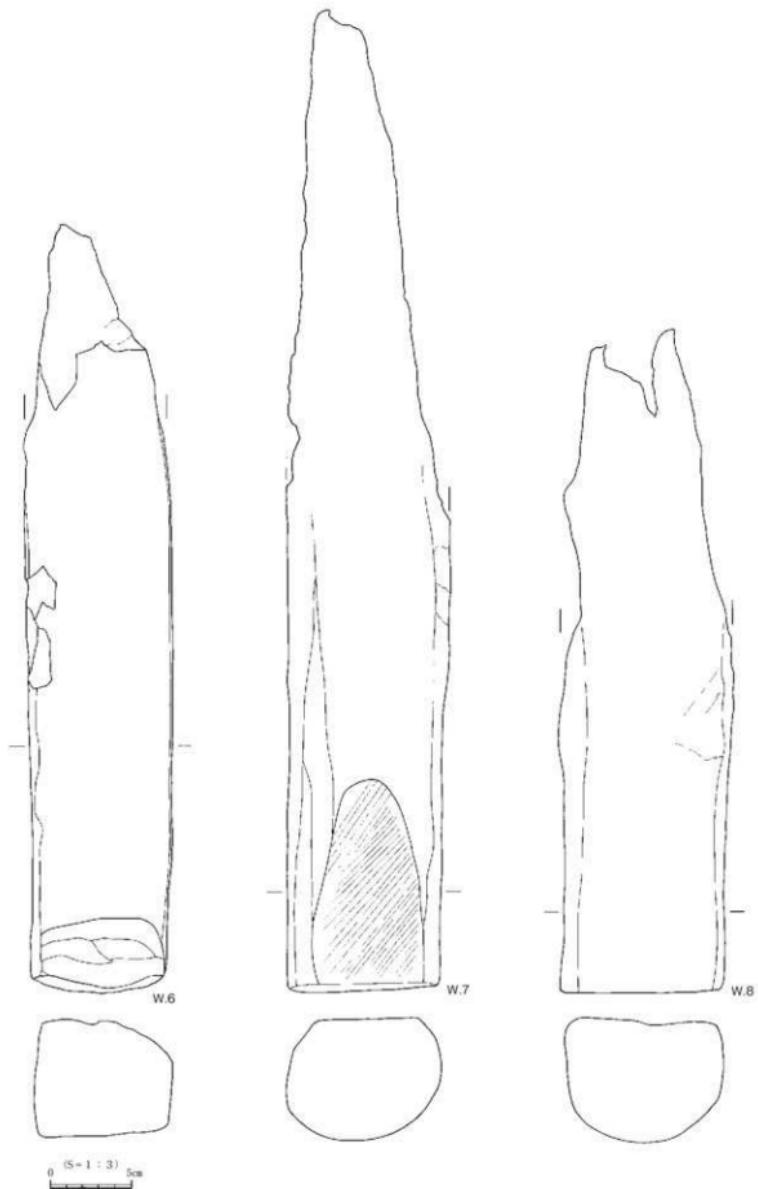


第20図 墳1 遺物図①

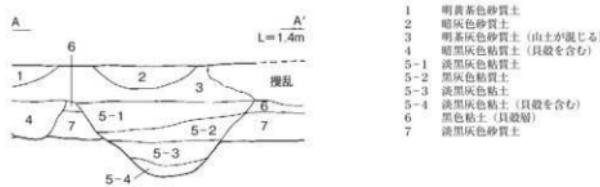
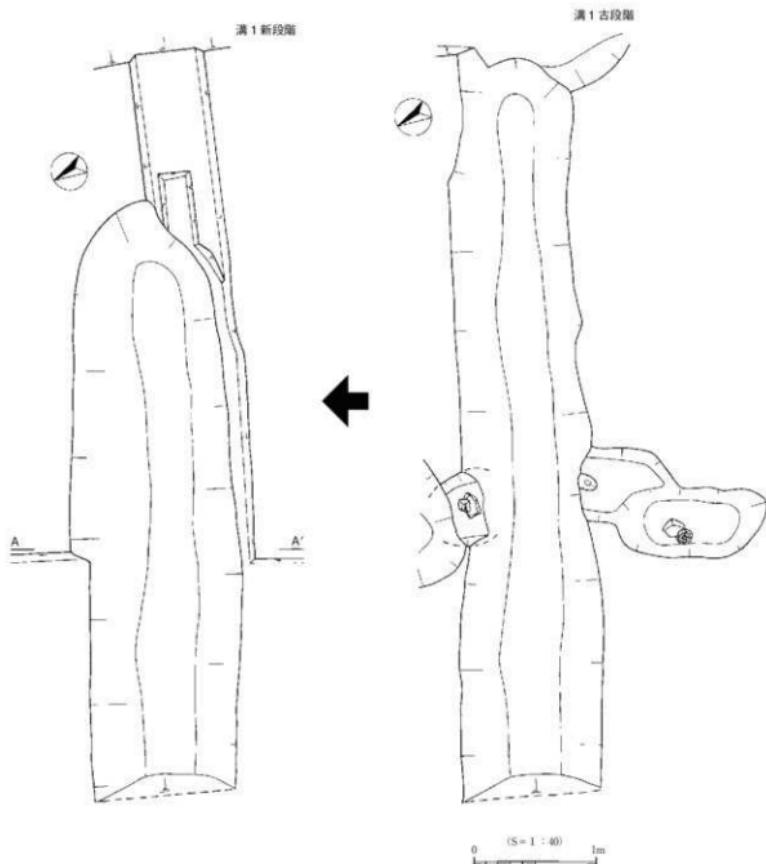


第21図 墳1 遺物図②

Po. 53は逆「へ」字状の鉄絵を施す唐津焼の碗。Po. 54は、口縁部に口紅状の鉄絵を施す唐津焼の碗。Po. 55は高台を削り込まない唐津焼の碗の底部。Po. 56～59は、唐津焼の皿。Po. 60～62は、唐津焼の大皿で、Po. 62は、後円部が垂直に立ち上がり、内外面に鉄軸を掛ける。Po. 63は、志野焼の丸皿。Po. 64は朝鮮系の陶器瓶。Po. 65は、京都系の皿。W. 9は、赤漆塗りの椀である。この遺構から

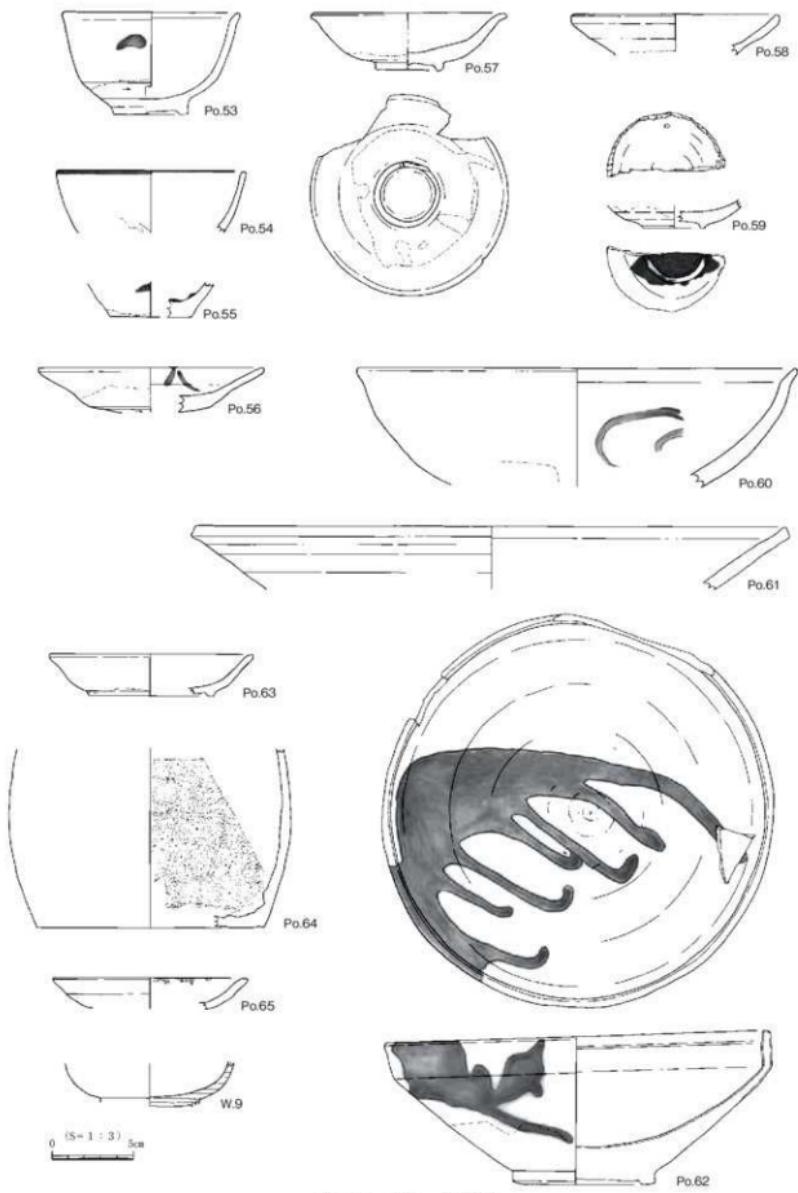


第22図 墳1 遺物図③

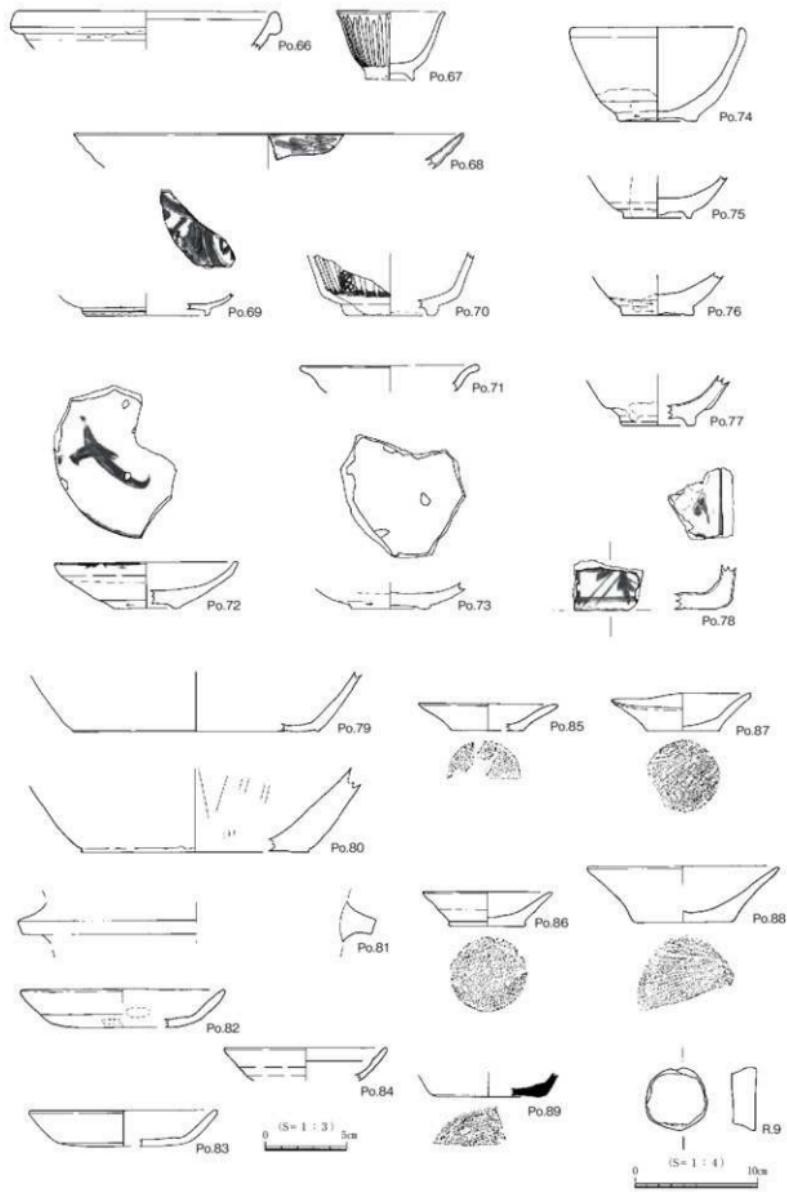


第23図 溝2 遺構図

出土した遺物は、砂目積の唐津焼を含まないことから、1595年以降に掘削され、1610年頃までに埋め戻されたと考えられる。



第24図 溝2 遺物図



第25図 1区第3遺構面 遺物図

### 第3遺構面から出土した遺物（第25図）

第3遺構面の検出作業中に出土した遺物は、白磁などの陶器類と円筒埴輪の破片、須恵器などである。

Po. 66は、口縁が玉縁状を呈する白磁碗の口縁部片。Po. 67は、ヘラ彫りされた白磁の坏で、高台内は露胎である。Po. 68は、粗製の青花皿。Po. 69は、青花皿の底部。Po. 70は、側面をヘラ彫りする伊万里焼の碗。Po. 71は、瀬戸・美濃系の陶器皿。Po. 72・73は、胎土目積の痕跡を残す唐津焼の皿。Po. 74～76は、唐津焼の碗。Po. 77は、上野・高取焼の陶器碗。Po. 78は、志野焼の向付。Po. 79は、薄手の陶器瓶の一部と見られる破片で、中国南方系の製品か。Po. 80は産地不明の焼締陶器の擂鉢で、内面はかなり摩耗している。

Po. 81は、剥離した円筒埴輪のタガ部である。米子城下では、久米第一遺跡や第22次調査でも円筒埴輪の出土例がある。Po. 82～88は、てづくね整形による土師器の皿である。Po. 85～88は口縁部が大きく外反する土師器の皿・坏で、底部に糸切の痕跡を残す。このタイプの製品は、米子平野では16世紀代のものが散見される。Po. 89は、底部に糸切の痕跡を残す須恵器の坏身。R. 9は、平瓦を丸く加工した円盤状の製品で、おはじきや石蹴りのような遊びに使用したものか。

### 第5節 第4遺構面の調査

粗砂層の上面で検出した遺構面である。ベースとなる粗砂は、加茂川と法勝寺川水系の砂が混在していることから、長期間に亘って堆積した川砂と考えられる。弥生時代後期の遺物が最も古いものであることから、それ以前の洪水堆積層と推測される。

この面で検出した遺構は、性格不明の土坑を中心であり、遺構に伴う遺物も少ない。土坑内から出土した遺物は、Po. 107のような、弥生時代終末期から古墳時代前期のものが中心であるが、検出に失敗した近世のものも含まれる。

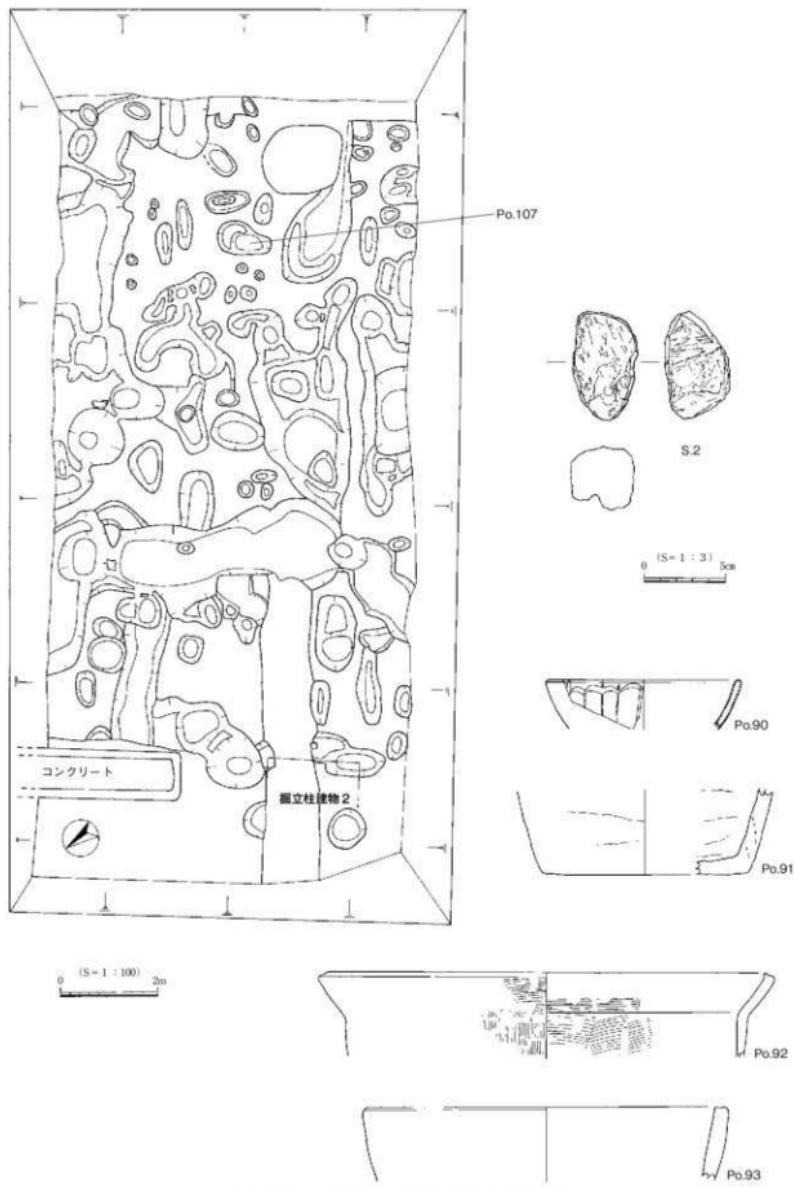
Po. 90は、外面にヘラ彫の運弁紋を施す青磁碗。Po. 91は、須恵器の壺の底部で、平安時代頃のものか。Po. 92は、口縁部が「く」字形を呈する土師器の土鍋で、内面をハケ調整する。Po. 93は、瓦質土器の鉢で、内面が磨滅している。S. 2は、梢円形の軽石である。

### 掘立柱建物2（第27図）

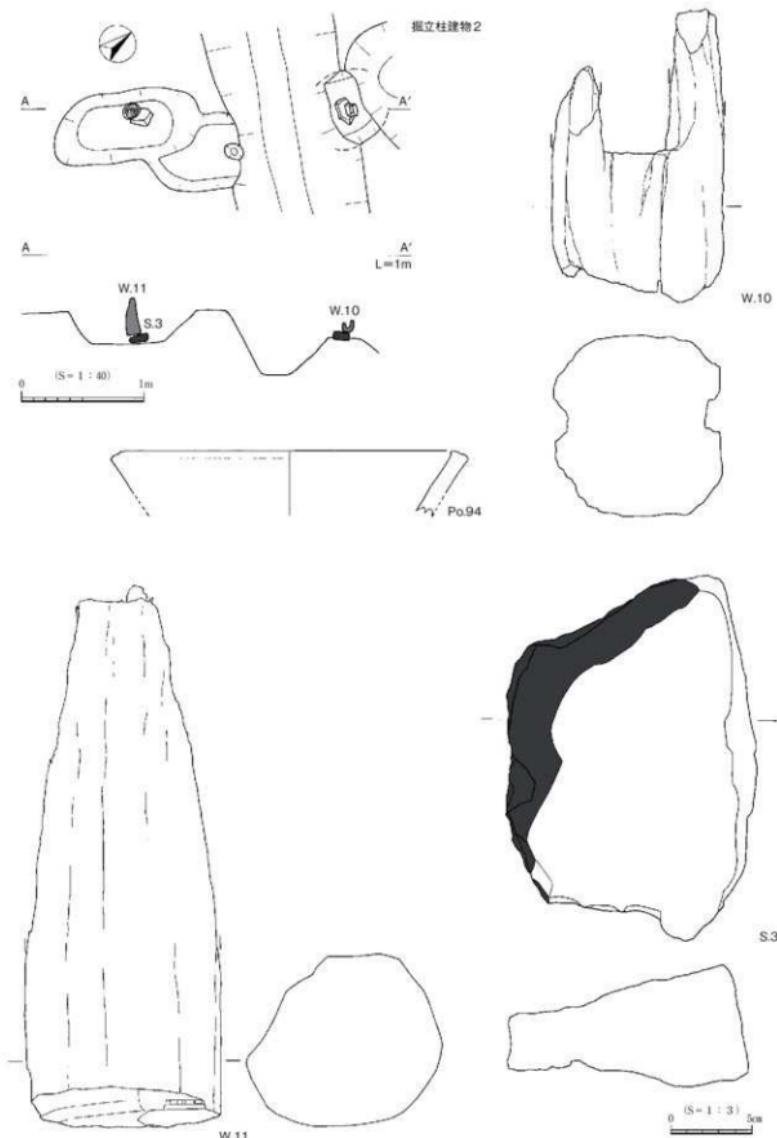
粗砂層の上面で検出した溝2をまたがる掘立柱建物で、西側に続く建物と考えられる。建物の柱間は1.8mで、両方の柱穴には根石が置かれている。根石の上には柱材が残っており、W. 10は四角い隣穴を開ける丸木で、W. 11は接地面を真っ直ぐ切り落とした丸木である。溝2との切り合い関係は分からなかったが、溝2に先行する中世の遺構の可能性がある。

この遺構に伴う遺物は、瓦質土器の鉢と柱材、根石がある。

Po. 94は、瓦質土器の擂鉢で、内面は使用により磨滅している。W. 10はブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節の木材で、W. 11はブナ科クリ属クリを使用している。S. 3は、W. 11を支える根石である。珪岩を板状に割ったもので、側面には煤が厚く付着している。恐らく、窯などの火を使用する場所で使用されていたものが根石に転用されたと考えられる。

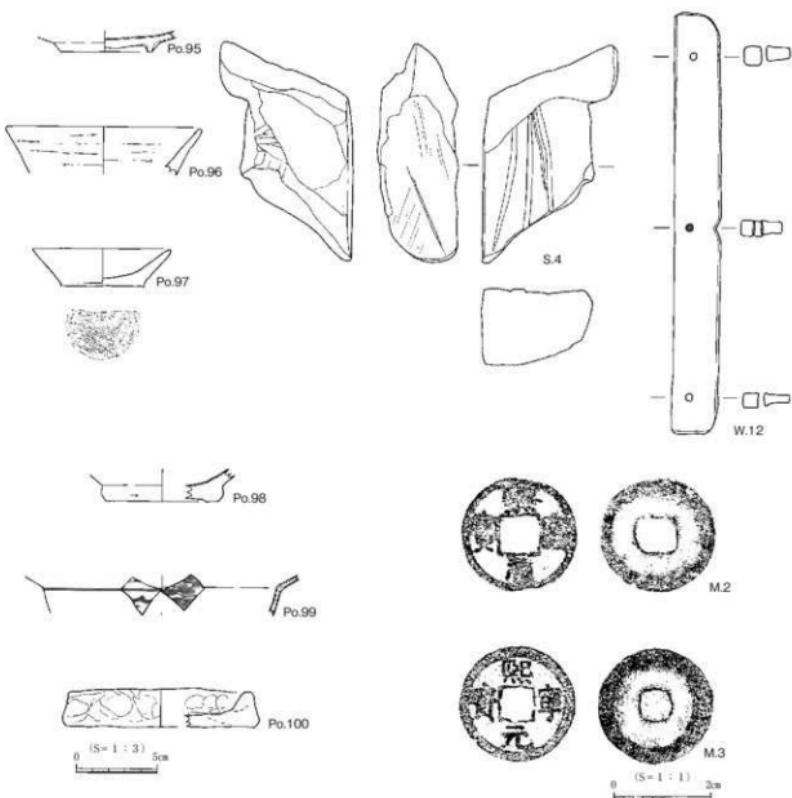


第26図 1区第4構造面 遺構・遺物図



網掛けは煤の範囲を示す。

第27図 捜立柱建物2 遺構・遺物図

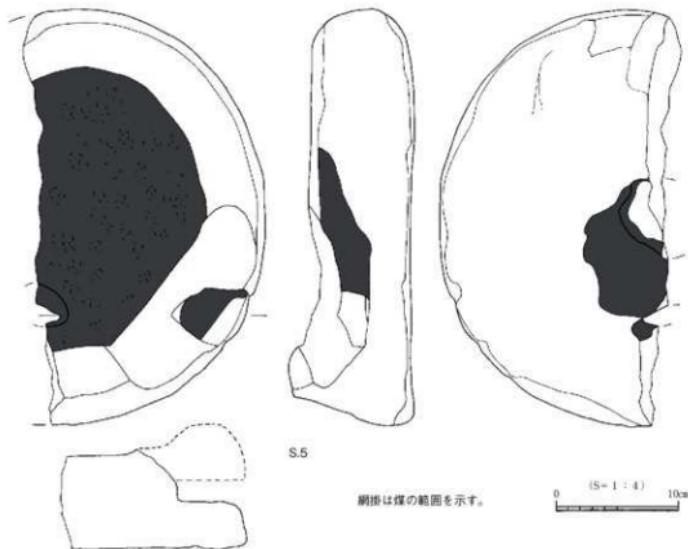
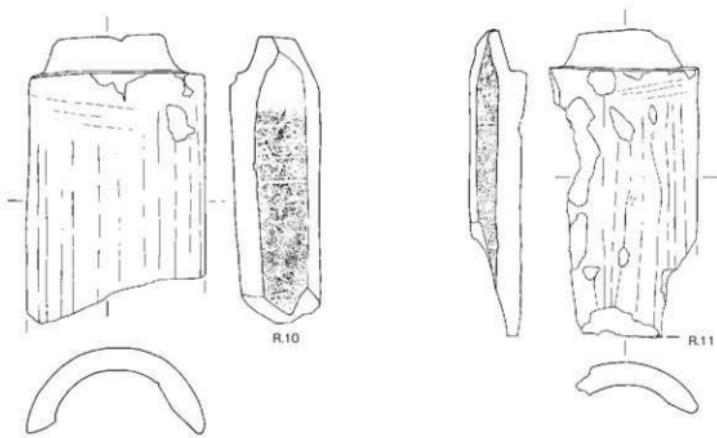


第28図 1区第4遺構面 遺物図①

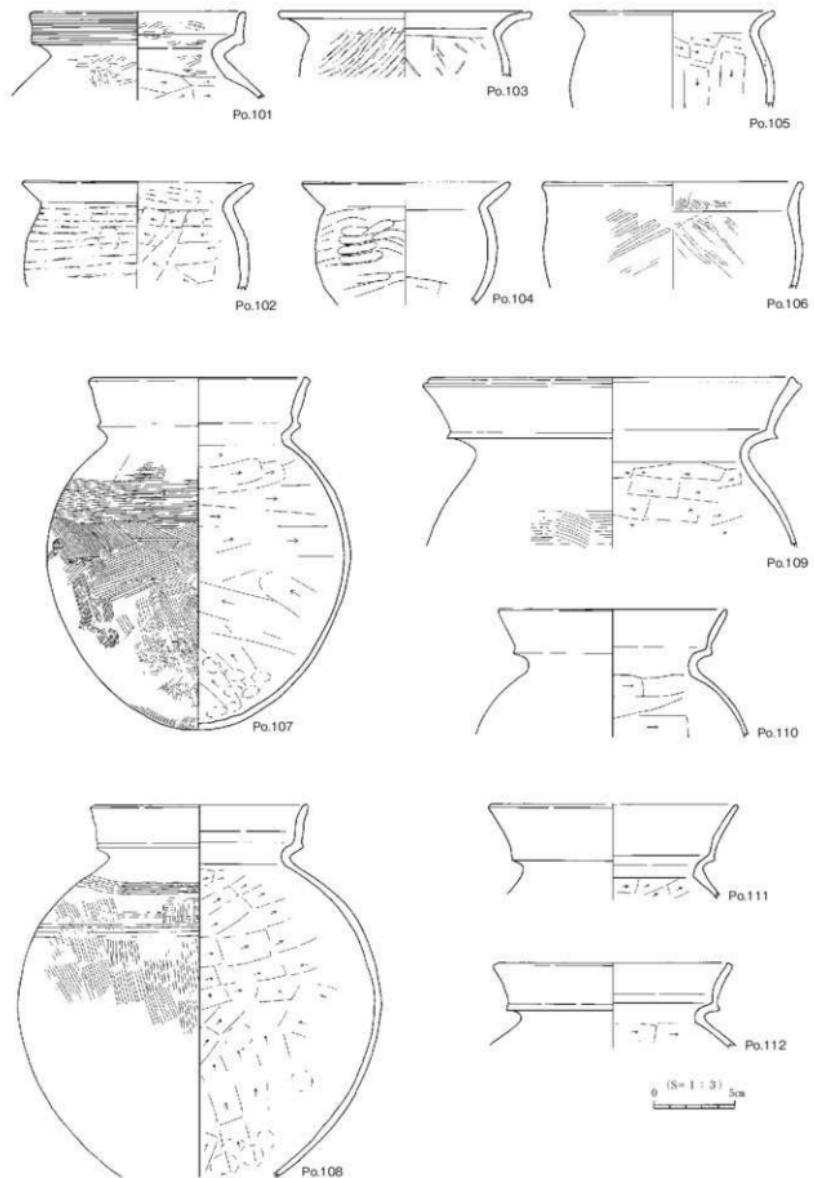
#### 第4遺構面で検出した遺物（第28～33図）

遺構に伴わない遺物は、包含層やトレンチの周囲に掘削した排水溝から出土したものである。弥生時代終末期から古墳時代前期の土器が中心だが、近世の遺物も多く含まれており、大半は第3遺構面で検出に失敗した遺構に含まれていた遺物と考えられる。

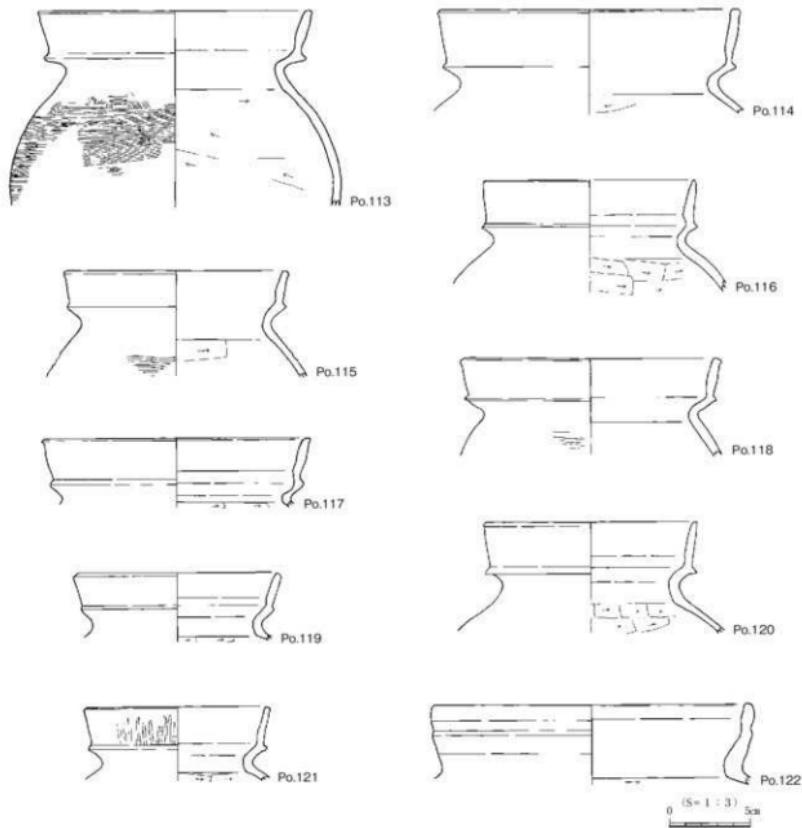
Po. 95は瀬戸・美濃系の陶器皿で、高台内の中央部を丸く釉剥ぎしている。Po. 96は、口縁部が逆「ハ」字形に広がる壺の口縁部片。Po. 97も同様の製品で、底部に糸切の痕跡を残す。Po. 98は白磁で、底部は露胎である。Po. 99は、薄手の青花鉢の届曲部片。Po. 100は、てづくね整形による土製品で、皿を模している。S. 4は、緑色凝灰岩製の砥石で、三面が磨滅している。W. 12は、三ヶ所を穿孔する長方形の木材で、行燈などの部材か。M. 2は、黒寧元宝の模鋳銭である。M. 3は、黒寧元宝の本銭である。R. 10とR. 11は、第4遺構面で見つけた近世の丸瓦で、どちらもコビキBの痕跡を残す。S. 5はデイサイト製の石臼で、全体的に煤が付着している。これらの瓦と石臼は、掘立柱建物の根石として転用されたものと考えられる。



第29図 1区第4構造面 遺物図②

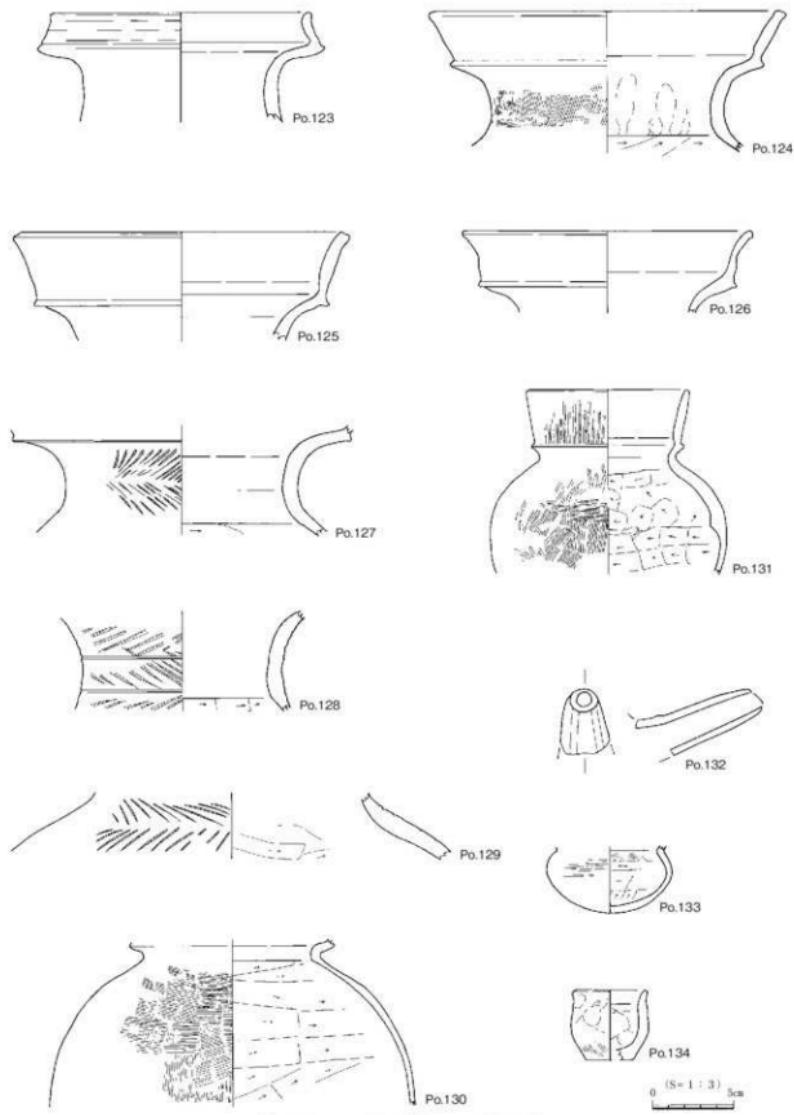


第30図 1区第4遺構面 遺物図③

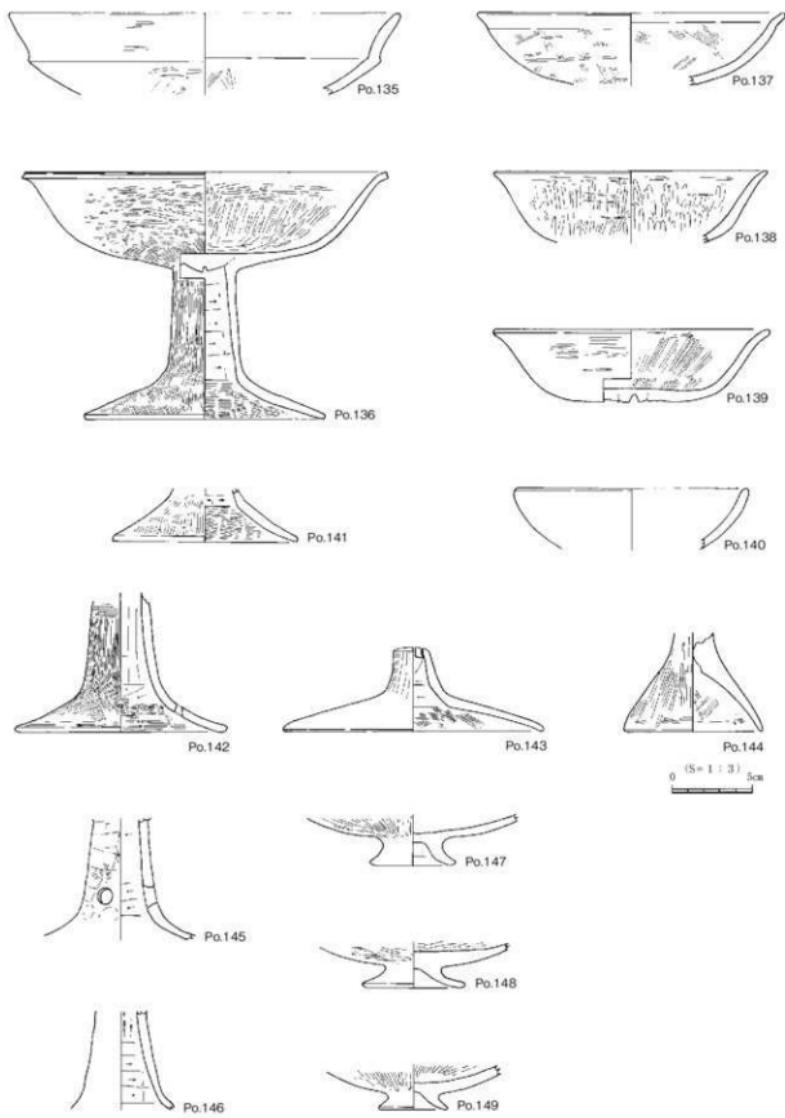


第31図 1区第4遺構面 遺物図④

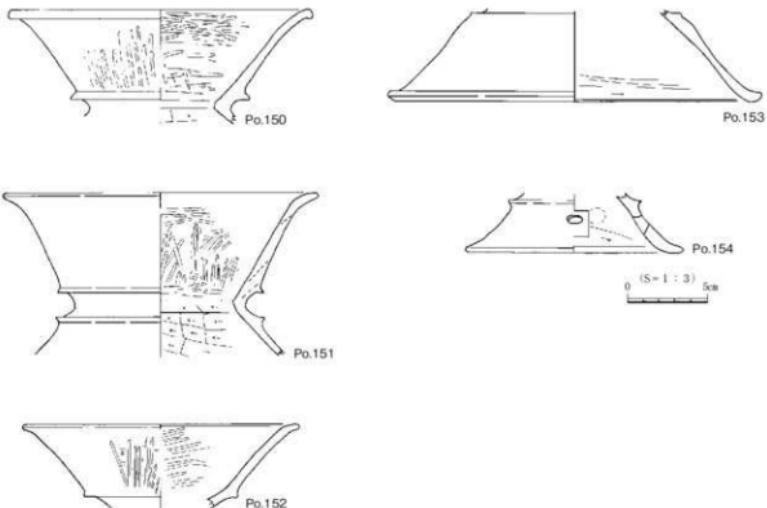
Po. 101は、口縁部に擬凹線を施す、弥生時代後期後半の甕である。Po. 102～106は、口縁部が「く」字形を呈する甕で、外面にはタタキ整形の痕跡が残り、内面はナデ調整されている。Po. 107～122は、在地の土師器甕である。底部まで完存するものは少ない。傾向としては口縁部が外反するものが多いが、Po. 122のような時期的に新しいものも含まれている。Po. 123～131は土師器の壺で、Po. 123は口縁部が大きく内彎する。Po. 127～129は、頸部に貝殻腹縁を刺突して羽状紋を施す壺である。Po. 131は、口縁部が真上に伸びる壺で、口縁部はヘラミガキ調整される。Po. 132は、注口土器の注ぎ口の破片である。Po. 133は、小型丸底壺の底部。Po. 134は、ミニチュアの土器。Po. 135～146は、土師器の高坏で、Po. 135は坏部が段を持つ。Po. 147～149は、低脚坏の底部か土器の蓋と見られる。Po. 150～154は器台である。



第32図 1区第4遺構面 遺物図⑤



第33図 1区第4遺構面 遺物図⑥



第34図 1区第4遺構面 遺物図⑦

## 第6節 T1の調査

T1は1区の北西に設定した、長さ10m、幅2mの調査区である。1区で検出した第1、第2遺構面は南側が大きく削平されており、保存状態が良くなかったため、面的な調査は省略した。

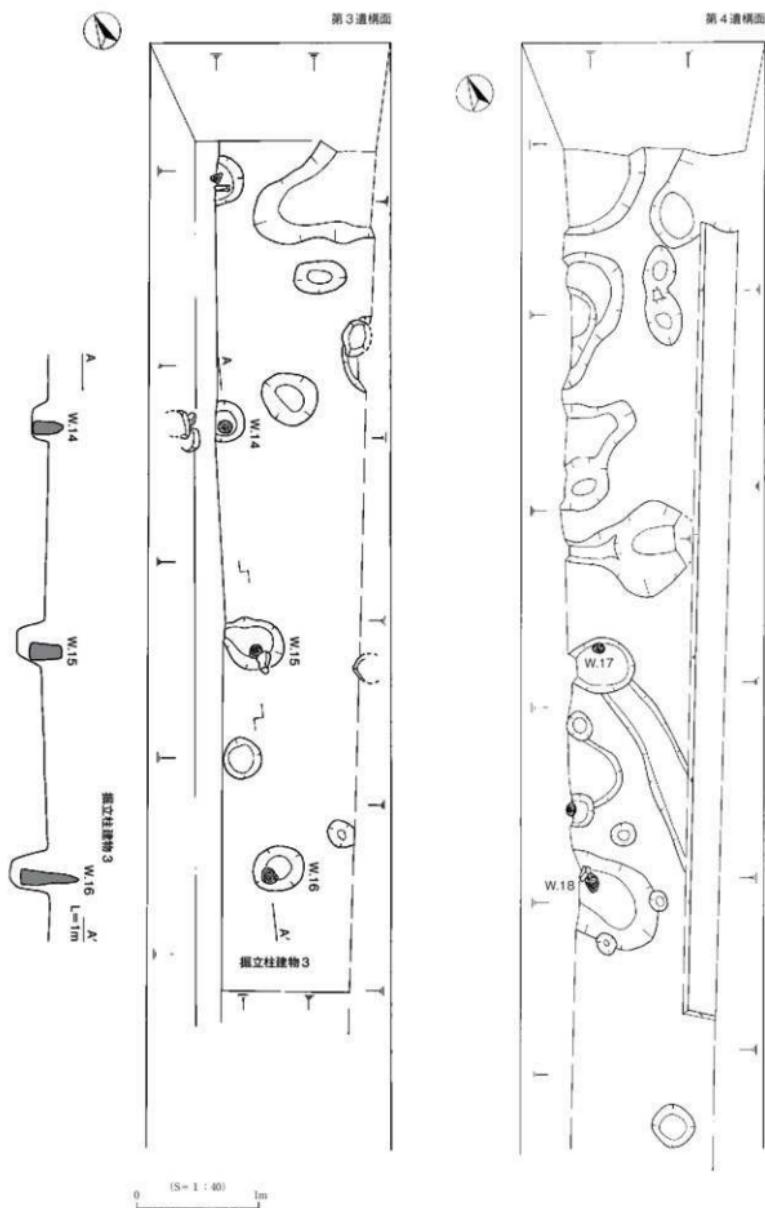
標高0.7m付近から第3遺構面の黒色土が水平堆積しており、この面において掘立柱建物3を検出し、第4遺構面においても柱材が残るピットを検出した。

この調査区から出土した遺物は、陶磁器、木製品、石製品、金属製品がある。

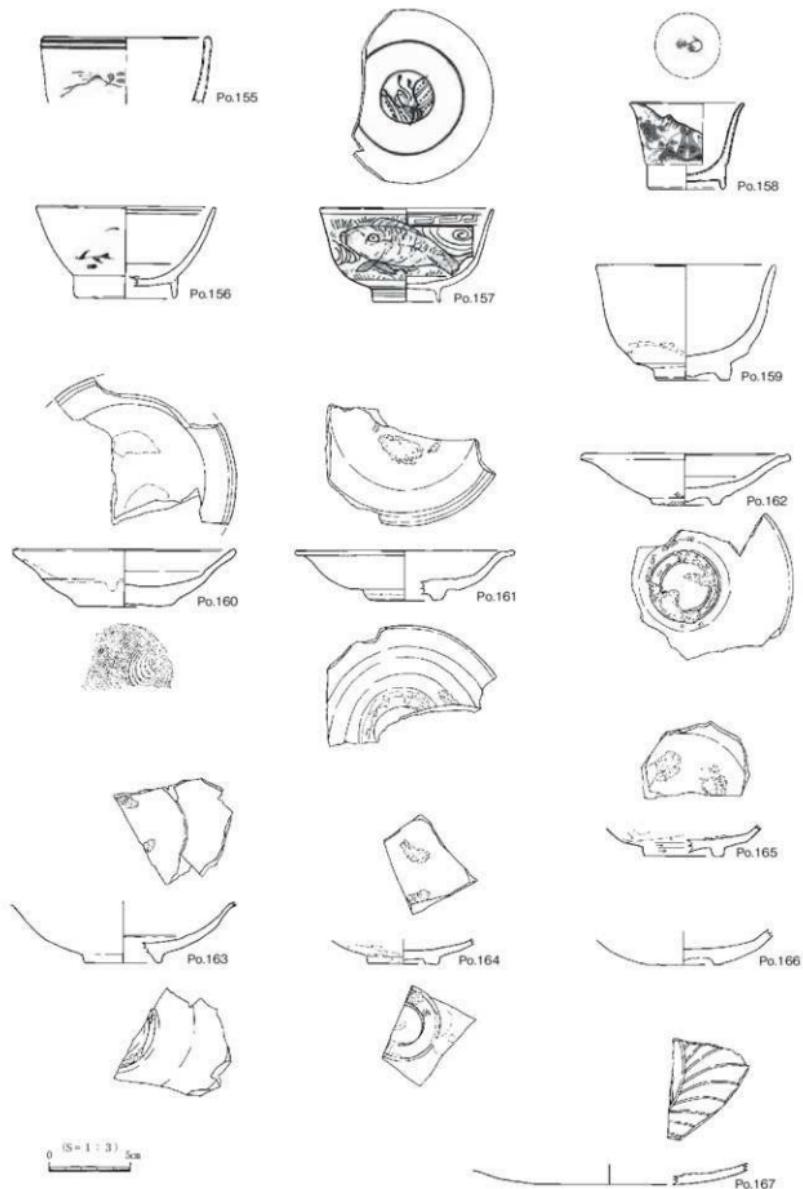
Po. 155は、陶胎染付の碗。Po. 156は、広東碗。Po. 157は、魚の紋様を描く端反碗。Po. 158は、口縁部が外反する小杯。Po. 159は、唐津焼の碗。Po. 160～165は砂目積の唐津焼の皿で、口縁端部は溝縁状となる。Po. 160は無高台で底部に糸切痕跡を残す。Po. 166は、底部が碁笥底状を呈する陶器の皿で、一部に白色釉が掛かる。Po. 167は型打の陶器皿で、京焼系の製品か。Po. 168は、備前焼の擂鉢である。Po. 169は、唐津焼の擂鉢。Po. 170は素焼きの土器で、ほうろくの口縁部と見られる。Po. 171は、口縁部が「く」字形を呈する土師器の鍋で、内面をハケ調整する。Po. 172は、てづくねの土師器皿。W. 13は、桶などの丸い容器の蓋で、スギを用いている。R. 12は一部が突出する、側面を取りした焼瓦の破片で、道具瓦の部材か。S. 6は、四面を研磨する珪岩製の砥石。M. 4は、重さ51.1gの分銅で、側面に刻印があるが、文字は不鮮明で読み取れない。第4遺構面で検出したW. 17、W. 18は、ともにクリを用いており、柱材の一部と考えられる。

## 掘立柱建物3（第35・38図）

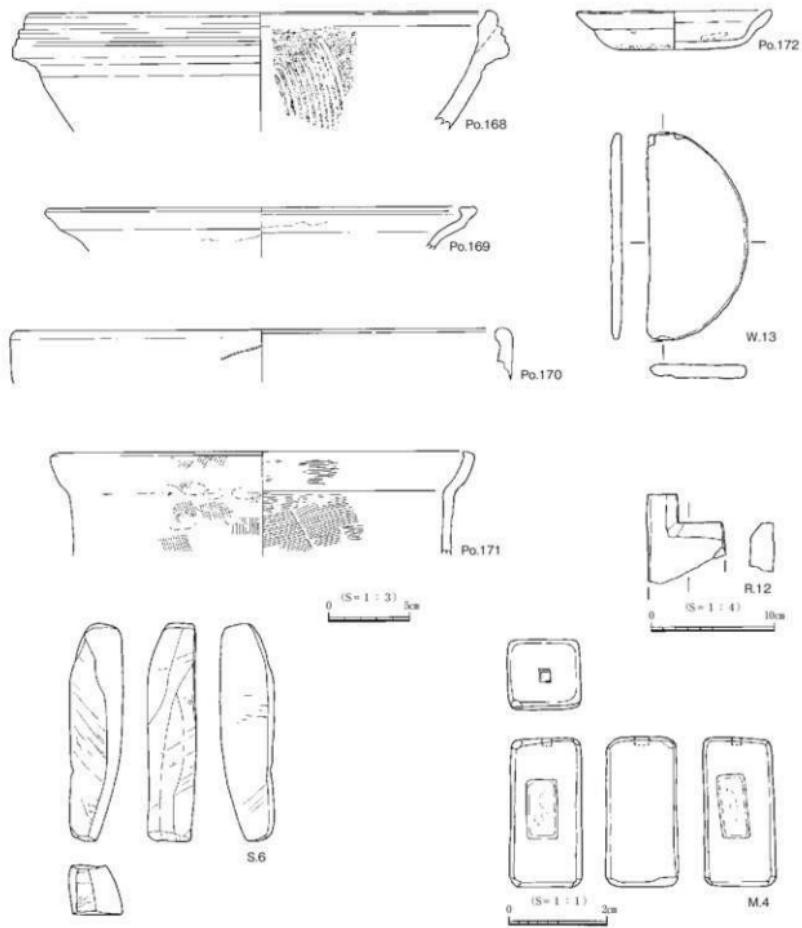
T1の第3遺構面で検出した二間分の柱列で、掘立柱建物の一部と考えられる。調査区の幅が狭い



第35図 T1 遺構図



第36図 T1 遺物図①

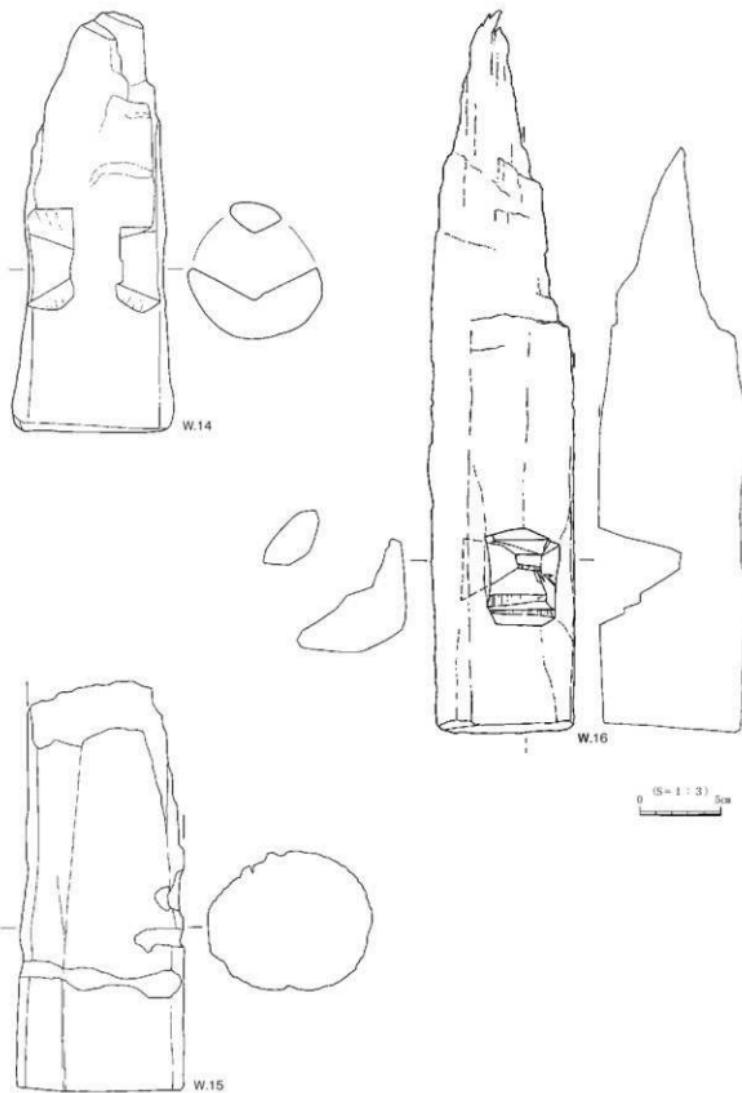


第37図 T1 遺物図②

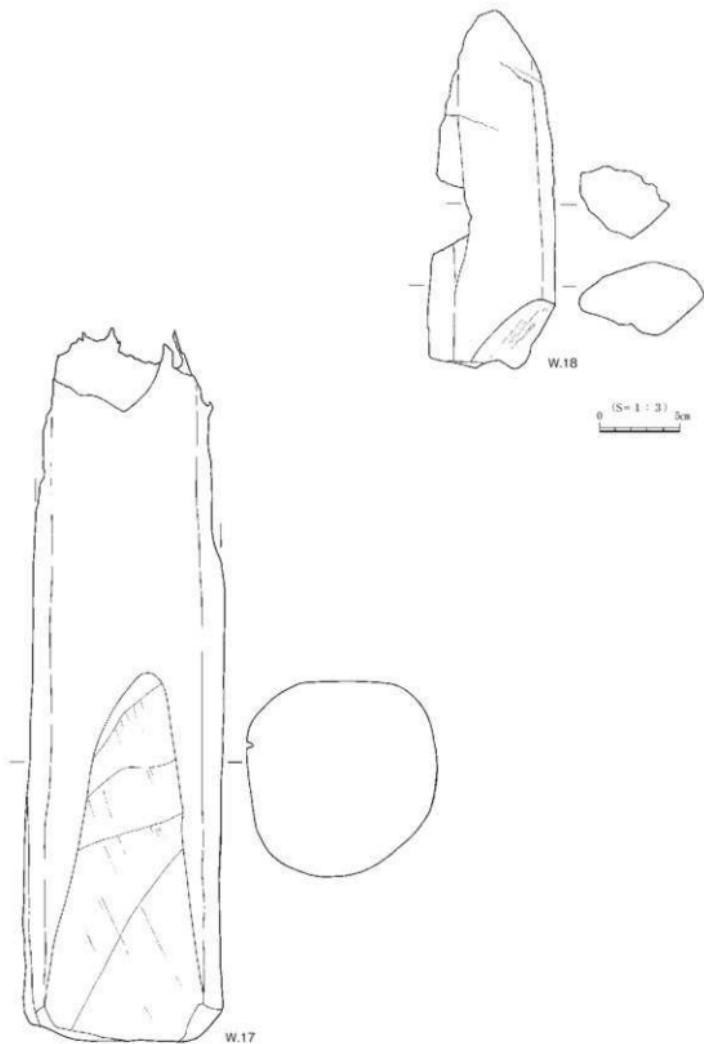
ため、全容が判明しなかったが、東西どちらかの方向に建物が広がるものと推測される。

柱間は1.8mあり、柱穴の掘形は直径40~50cm、深さ20~40cmである。柱穴内には、上部が腐朽した柱材が残っており、3本とも材質は全てクリである。また、第4遺構面でも柱材が2本見つかっており、同じような場所で建替が行われた可能性がある。柱材は、W.14とW.15は二方向から貫通する穴が開けられている。

この建物に伴う遺物は出土しなかつたため、時期は不明であるが、検出面から江戸時代前期以降のものと考えられる。



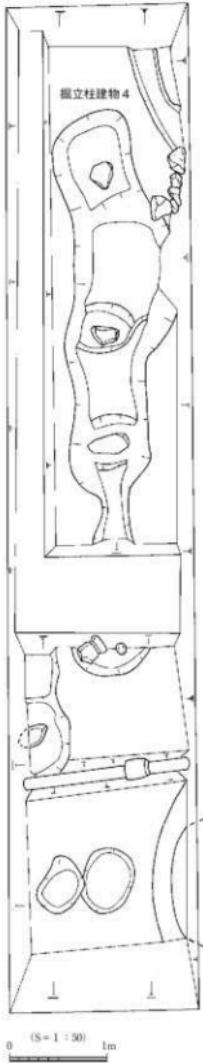
第38図 T1 遺物図③



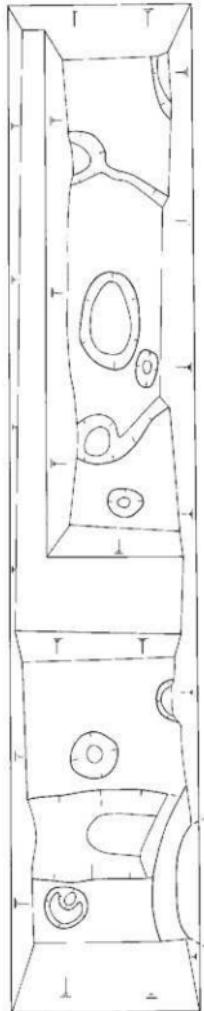
第39図 T1 遺物図④



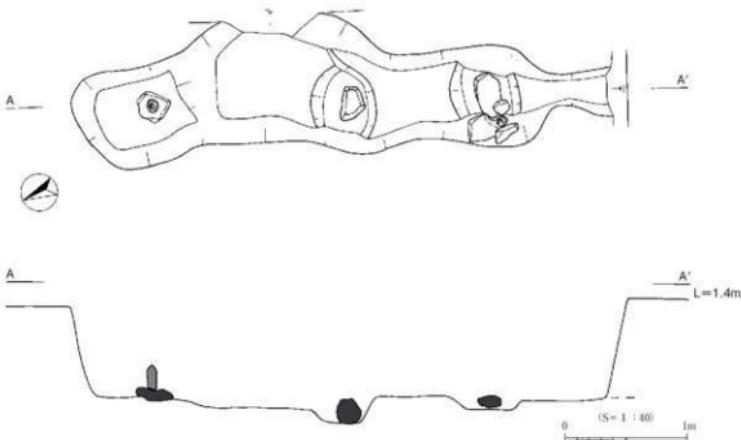
第3遺構面



第4遺構面



第40図 T2 遺構図



第41図 挖立柱建物4 遺構図

## 第7節 T2の調査

T2は、長さ10m、幅2mの調査区である。調査区内にコンクリート製の基礎が埋め込まれており、第1、第2遺構面は大きく削平されていたが、第3遺構面において掘立柱建物4を検出し、第4遺構面でもピットと溝状の遺構の広がりを確認した。

ここから出土した遺物は、陶磁器、須恵器、土師器である。

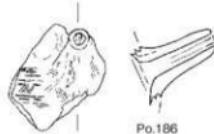
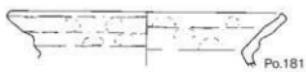
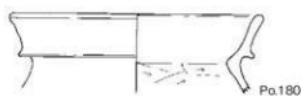
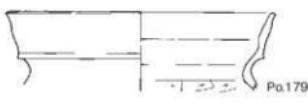
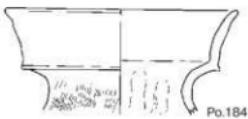
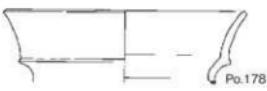
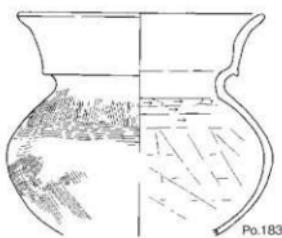
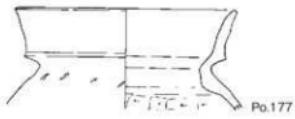
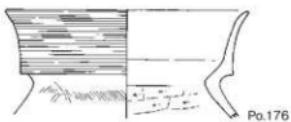
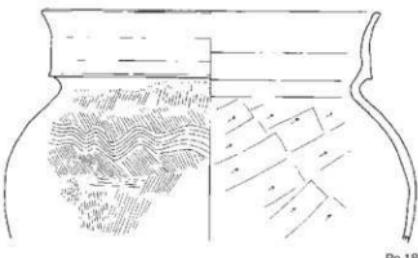
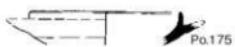
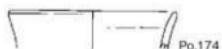
Po. 173は、同安窯系の青磁碗の底部片。Po. 174は、京焼系の碗。Po. 175は、須恵器の坏身。Po. 176は、口縁部に擬凹線が巡る壺の口縁部。Po. 177~181は、土師器の壺。Po. 182~191は土師器の壺で、Po. 186は注口土器の注口部である。Po. 187は、球形の胴部に同心円状のスタンプが連続して施紋される。Po. 192・193は、土師器の高坏。Po. 194は低脚坏。Po. 195~198は鼓形の器台で、Po. 195は円形のスタンプ紋を施す。Po. 196は、爪形の圧痕が残る。

## 掘立柱建物4（第41図）

掘立柱建物4は、溝状の掘形を持つ布掘りの建物跡と推測される。掘形の規模は、長さ4m程度、幅80~90cmの長楕円形を呈し、深さは80cm程で、底面はやや高低差がある。当初の柱は3本分あったと考えられ、柱の部分には根石が置かれている。北側の柱材は残っていたが、中央の柱は抜き取られており、南側の柱材は3個の石によって固められた状態であった。柱間の寸法は、中央の柱が現存していないため不明だが、1間が1.5m程度のものと推測される。

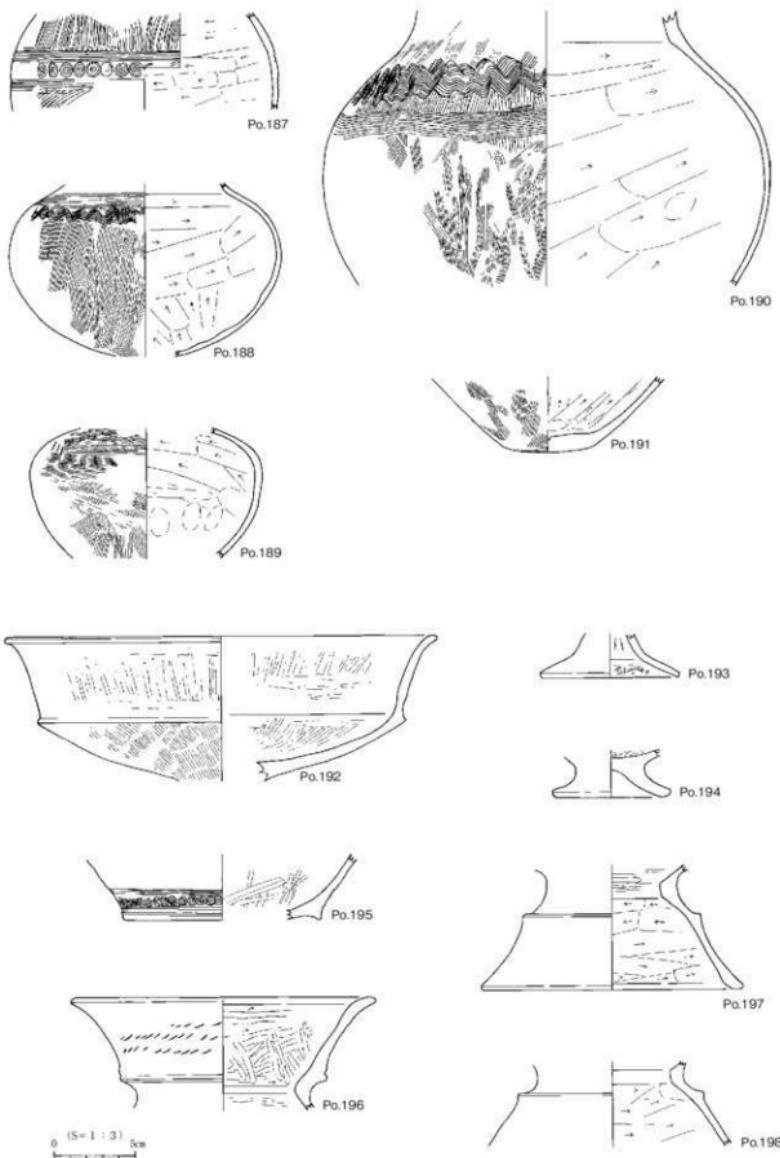
掘形がやや不整形であり、底面も高低差があるなど不自然な点も認められるが、建替による再掘削の可能性もあることから、掘立柱建物としておく。

この建物に伴う遺物は出土しなかつたため、時期は不明であるが、検出面から江戸時代前期以降のものと考えられる。

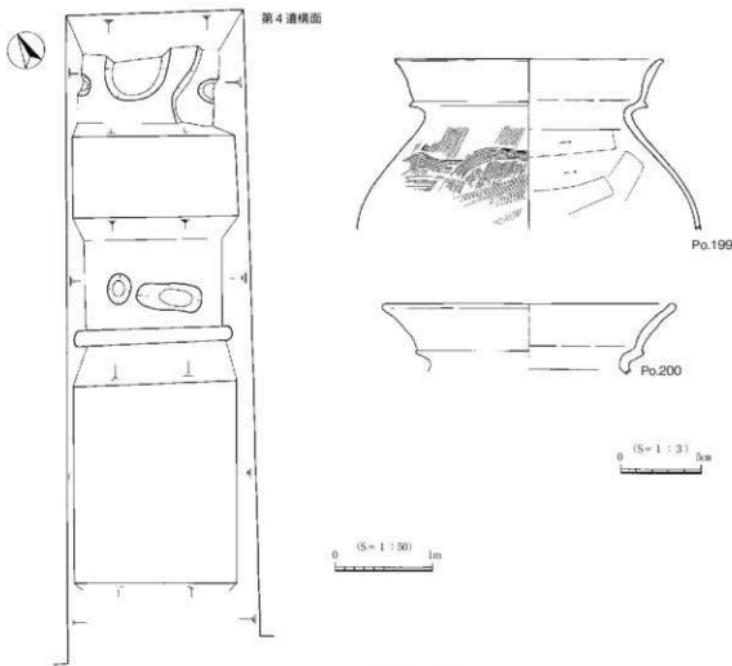


0 (S = 1 : 3) 5cm

第42図 T2 遺物図①



第43図 T2 遺物図②



第44図 T3 遺構・遺物図

### 第8節 T3の調査（第44図）

T3は、長さ6.5m、幅2mの調査区である。大半がコンクリート建物の基礎によって破壊されているが、幸うじて第4遺構面において土坑の存在を確認することが出来た。

図化することが出来た出土遺物は、土師器の甕と壺である。

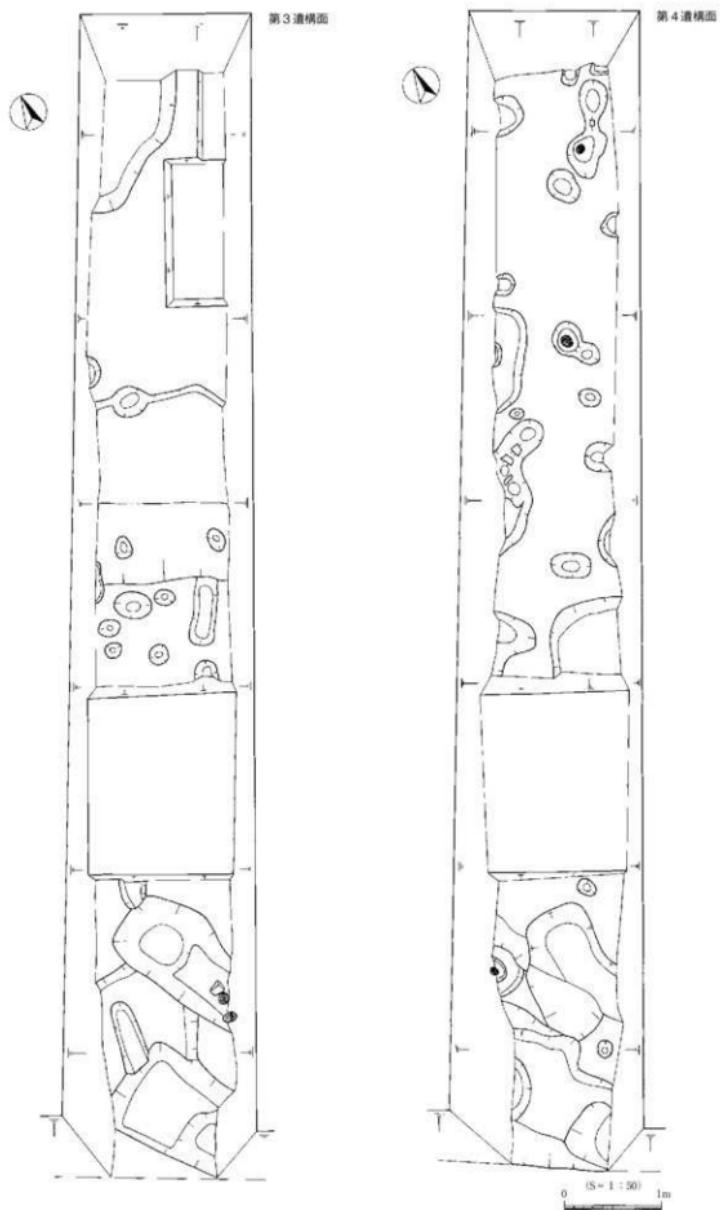
Po. 199は、口縁部が外反する土師器の甕。Po. 200は、口縁部が大きく外反する土師器の壺である。

### 第9節 T4の調査（第45・46図）

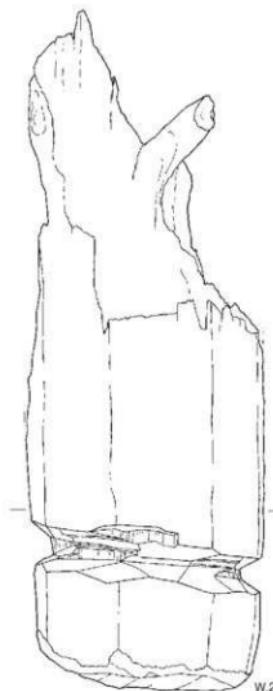
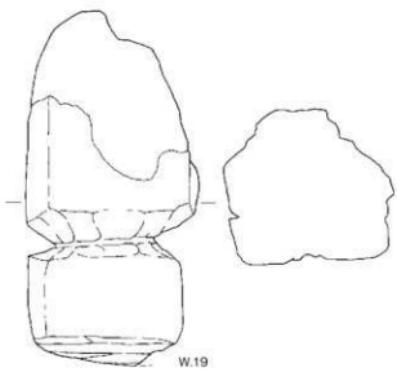
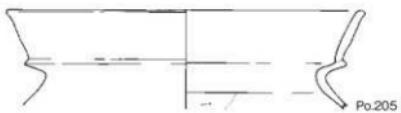
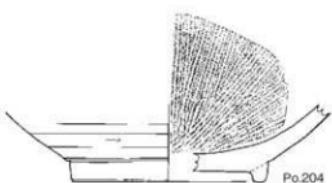
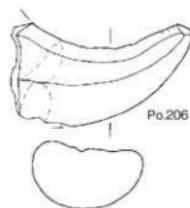
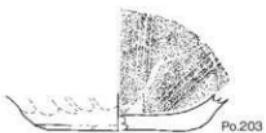
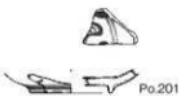
T4は、長さ11m、幅2mの調査区である。中央部がコンクリート製の土管によって攪乱されているが、第3、第4遺構面において多数のピットや土坑の存在を確認した。

ここから出土した遺物は、陶磁器や土師器、木製品である。

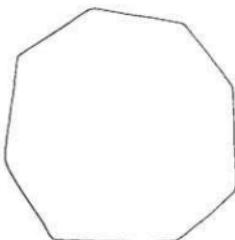
Po. 201は、青花の皿。Po. 202は、青磁碗の底部。Po. 203は、瓦質土器の擂鉢。Po. 204は、在地産の擂鉢の底部である。Po. 205は、土師器の甕。Po. 206は、土師器の把手部。W. 19とW. 20は、削り込みを施した柱材である。柱材の樹種は、W. 19がブナ科ブナ属、W. 20がマツ科マツ属（二葉松類）である。



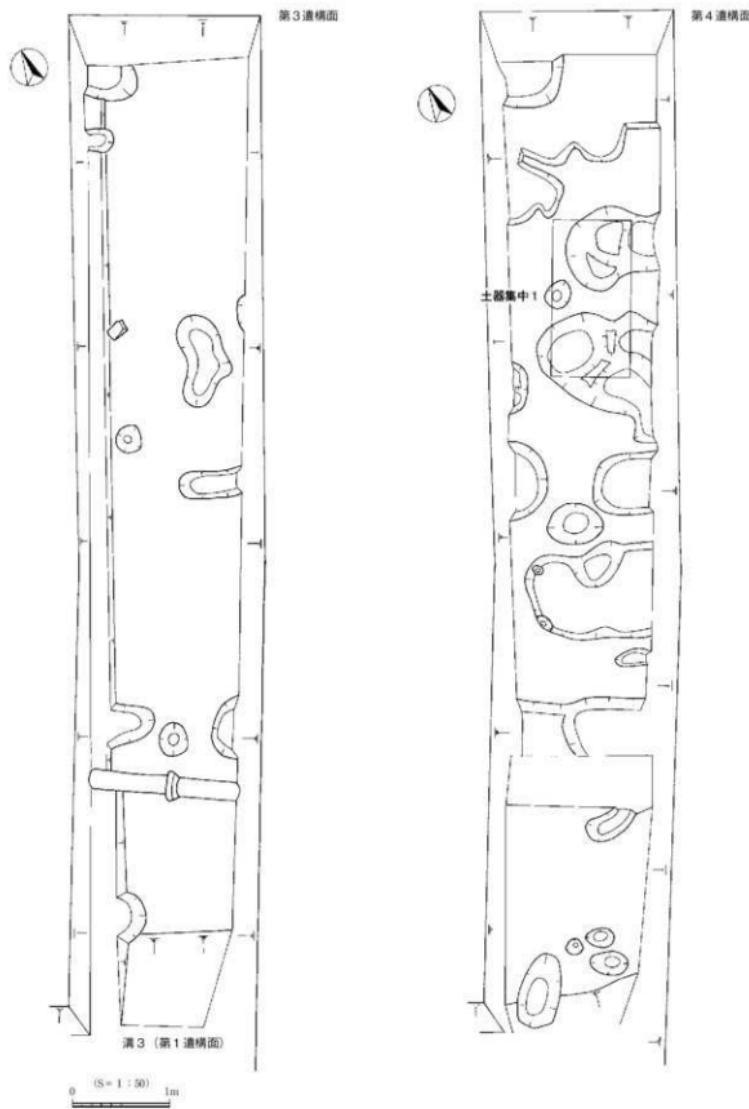
第45図 T4 遺構図



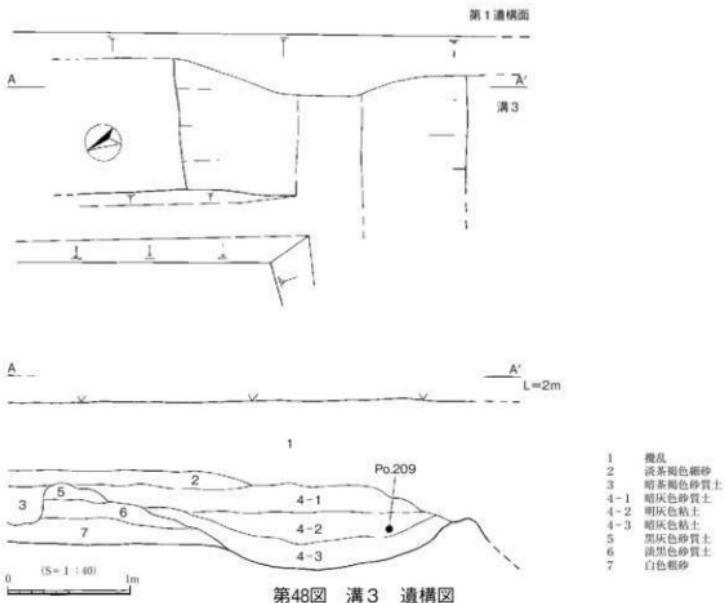
0 (S=1:3) 5cm



第46図 T4 遺物図



第47図 T5 遺構図



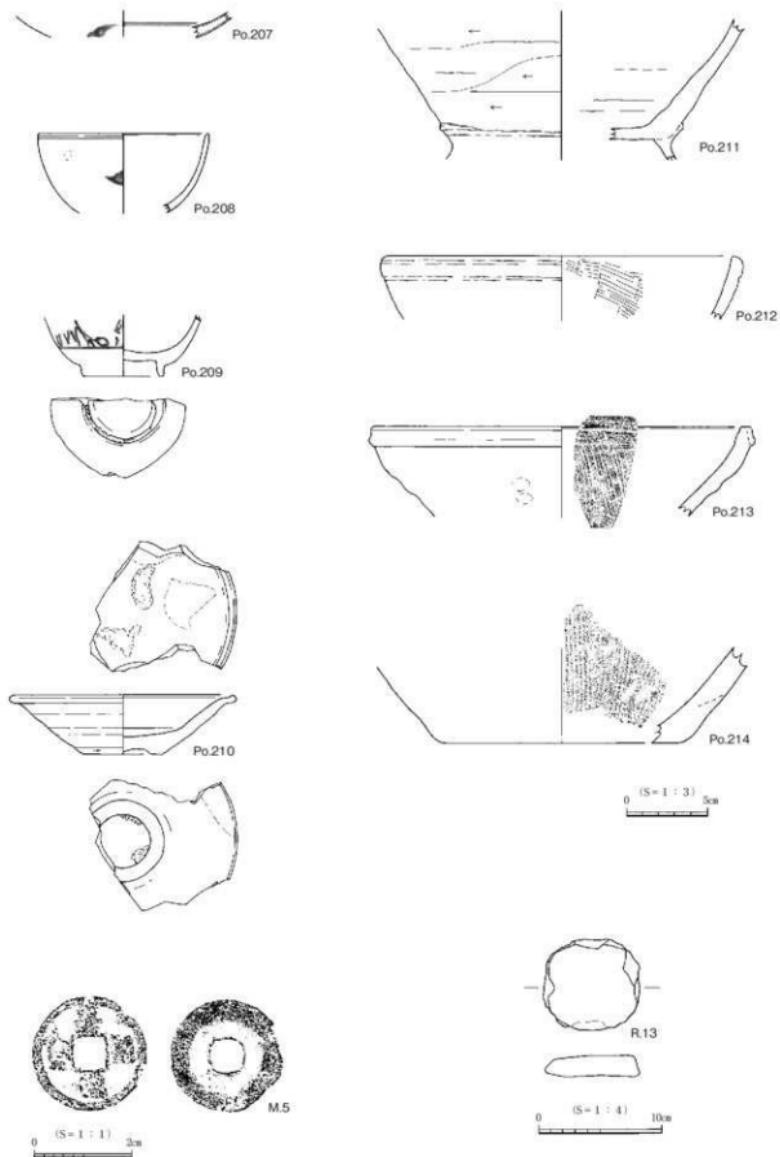
## 第10節 T5の調査

T5は、長さ10m、幅2mの調査区である。第1、第2遺構面では、南側において溝状の遺構を確認したが、それ以外の遺構は擾乱が激しく確認できなかった。第3遺構面では遺構密度が低く、建物があまり無い場所なのか、あるいは大型建物の真下を掘っているのか、狭い調査区では判断できなかつたが、下層の第4遺構面では土坑が密集しており、土師器の出土量も多いことから集落の中心部に近い場所と考えられる。ここでは、土師器の高壺と壺、ミニチュアの土器が置かれた土器集中1を確認した。

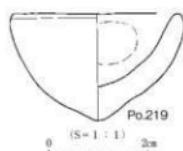
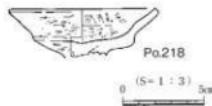
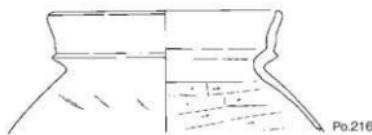
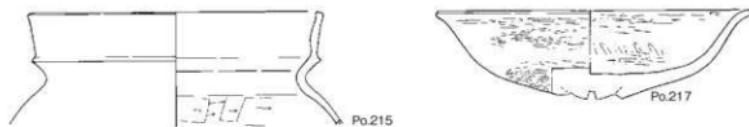
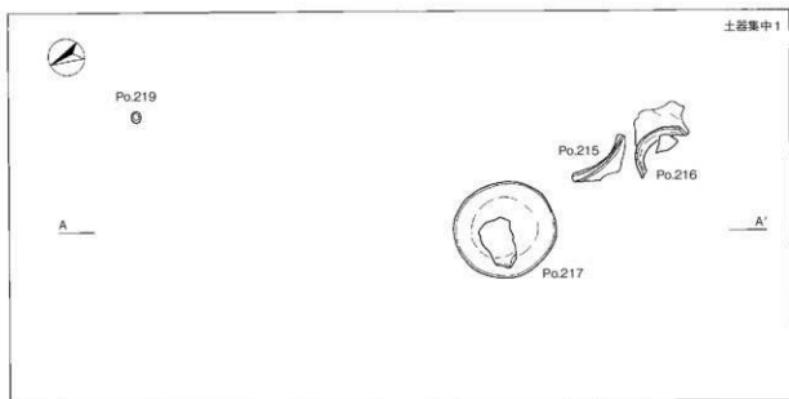
ここから出土した遺物は、陶磁器や土師器、銅鏡、瓦類である。

Po. 207は、粗製の青花皿である。Po. 208は、薄手の伊万里焼碗である。Po. 209は、伊万里焼の碗。Po. 210は、砂目積の唐津焼の皿。Po. 211は、越前焼の擂鉢である。Po. 212は、内面をハケ調整する土器の鉢。Po. 213・214は、瓦質土器の擂鉢。M. 5は、嘉祐通寶。R. 13は、撫瓦を丸く加工した瓦の転用品である。

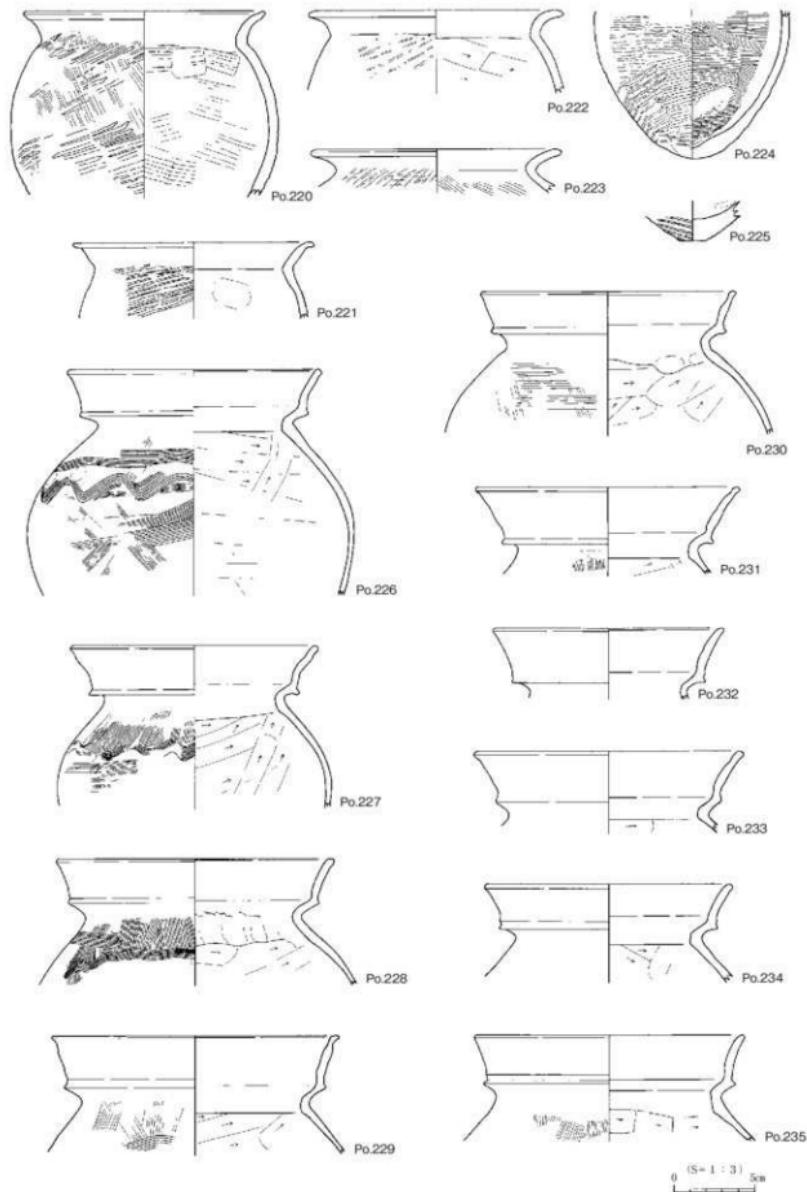
Po. 220～Po. 225は、外側をタタキ整形する壺で、Po. 220～222は内面をナデ調整する。Po. 223～224も、同様に外側をタタキ整形するが、内面はハケ調整である。Po. 226～Po. 238は、在地の土師器の壺で、口縁部が外反するものが多い。Po. 239～243は土師器の壺で、Po. 239は口縁部に波状紋を施し、円形浮紋を貼り付ける。Po. 240は、口縁がラッパ状に広がる壺で、外側をヘラミガキする。Po. 244・245は作りの粗い鉢形の容器で、Po. 245は底部に線刻を施す。Po. 246～253は、土師器の高壺。Po. 254は、土師器の器台である。



第49図 T5第3造構面 遺物図



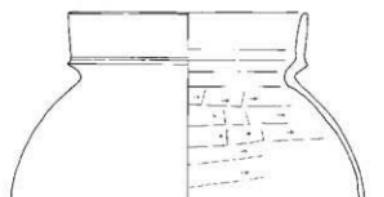
第50図 土器集中1 遺構・遺物図



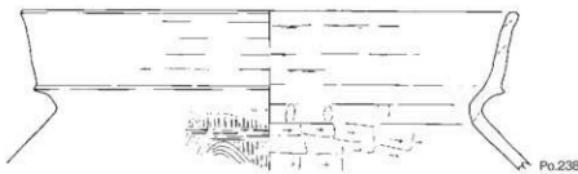
第51図 T5第4遺構面 遺物図①



Po.236



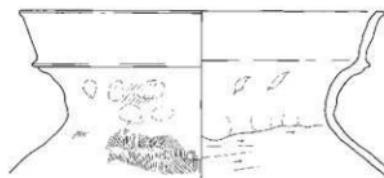
Po.237



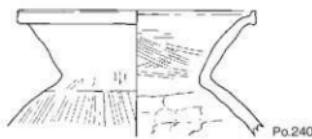
Po.238



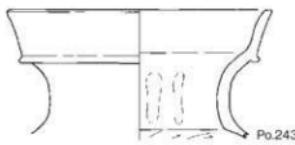
Po.239



Po.242



Po.240



Po.243



Po.241



Po.244

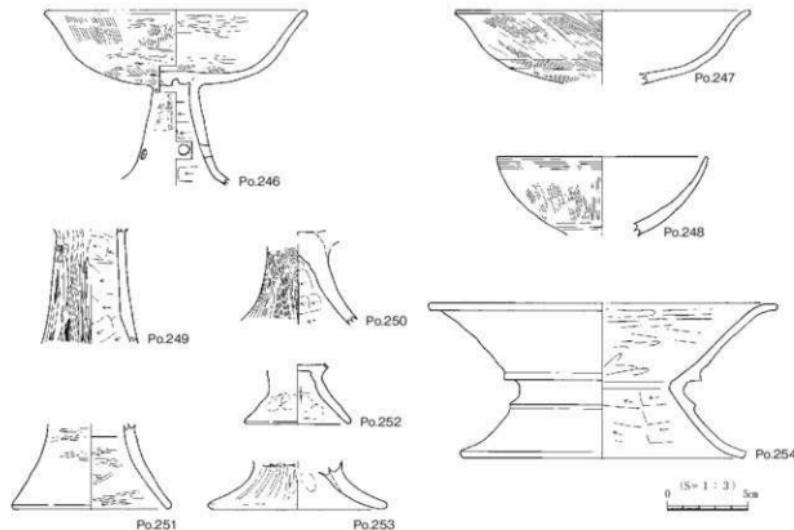


Po.245

0 (S=1:3) 5cm



第52図 T5第4遺構面 遺物図②



第53図 T5第4遺構面 遺物図③

### 溝3（第48図）

第1遺構面で検出した、溝状の遺構である。調査区の南端に位置しており、1区の北側とも接する場所である。上面が大きく擾乱されているが、幅1.4m、深さ50cm程の溝状遺構と考えられる。ただし、西側のT4ではこの続きが確認されなかったことから、ここよりも東側に伸びる溝であろう。

溝の堆積土は、底部が粘土であることから、止水環境にあったと考えられる。この遺構に伴う遺物は、Po. 209の伊万里焼の碗が中層から出土している。

この遺構の時期は、検出した面から江戸時代後期以降に掘削され、幕末までに埋没したものと考えられる。

### 土器集中1（第50図）

第4遺構面において検出した土器の集中区である。石を入れた高壺と壺、少し離れた場所からミニチュアの土器が出土した。高壺の脚部の破片が見られないことから、石を置かれた時点で脚部が欠損していたと考えられる。また、土器集中の下には土坑があるが、この土坑からは遺物が出土しなかつたことから、下層の土坑が埋もれた後に置かれたものと考えられる。

Po. 215・216は、土師器の壺。Po. 217は、高壺の壺部。Po. 218は、小型の高壺。Po. 219は、尖底のミニチュアの土器である。

## 第3章 自然科学分析

### 第1節 米子城跡第54次調査出土木製品の樹種調査結果 株吉田生物研究所

#### 1. 試 料

試料は米子城跡第54次調査から出土した建築部材17点、容器2点、装飾品1点の合計20点である。

#### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### 3. 結 果

樹種同定結果（針葉樹3種、広葉樹5種）の顕微鏡写真を写真図版23～29に示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

##### 1) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

(W. 2、W. 20)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のもとのと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

##### 2) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

(W. 13)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

##### 3) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(W. 12)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

4) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(W. 4~8、W. 11、W. 14~18)

環孔材である。木口では円形ないし稍円形で大体単独の大道管 ( $\sim 500\mu\text{m}$ ) が年輪にそって幅のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の單列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り開む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Sect. *Prinus* Loudon syn. *Diversipilosae*, *Dentatae*)

(W. 10)

環孔材である。木口では大道管 ( $\sim 380\mu\text{m}$ ) が年輪界にそって1~3列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2~3個複合して火炎状に配列している。放射組織は單列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の單列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

6) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(W. 1, W. 19)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 ( $\sim 110\mu\text{m}$ ) がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1~3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

7) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

(W. 9)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管 ( $\sim 270\mu\text{m}$ ) が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集團管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り開み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は單穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1~3列のものと大部分を占める6~7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

## 8) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.)

(W. 3)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110μm)が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は單穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700μmとなっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

### ◆参考文献◆

- 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学本質科学研究所 (1991)  
島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)  
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～V」 京都大学本質科学研究所 (1999)  
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社 (1979)  
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)  
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)

### ◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fil

## 第4章 総括

### 第1節 弥生時代終末期から古墳時代前期の成果

今回実施した調査では、弥生時代終末期から古墳時代前期の土器がコンテナにして27箱分以上出土した。隣接地の米子城跡第2次調査、第6次調査でも同時期の土器が大量に出土していることから、本調査地の周辺に当該期の集落が存在したことは明白である。米子城跡の周辺では、縄紋時代前期から土器が見つかっており、古代から中世まで途切れることなく各時代の遺物が出土している。

縄紋時代前期には、海進期に湊山の山麓に集落があったと推測されており、漁労を中心とした生業が行われていたと考えられる。縄紋時代中期から後期には土器の出土例が途絶えるが、縄紋時代晩期から弥生時代前期に再び湊山を中心とした地域に集落活動が活発化するようである。弥生時代中期には、加茂神社から鳥取大学医学部附属病院と鳥取地方裁判所米子支部周辺の地域に集落が展開するが、弥生時代後期に一旦途絶え、弥生時代終末期に至って再びこの地で集落活動が復活している。こうした動きは、周辺の目久美遺跡でも弥生時代中期後半から後期初頭頃に起こった洪水によって水田が放棄されて集落活動が途絶えるなど、加茂川流域の集落群が大きな自然災害に直面したことが判明している。

一方、米子城下の北に位置する錦町第1遺跡では、弥生時代前期から中期後半頃に日本海からの飛砂によって形成された砂丘上に集落が形成されており、加茂川の下流域において人々が移動しながら集落活動を継続していた様子が窺える。その後、錦町第1遺跡は古墳時代前期に東の砂丘上に位置する博労町遺跡へと集落が移動している。博労町遺跡は、大型の布掘建物を中心に堅穴建物が多数分布する拠点的な様相を呈している。一方、今回調査した範囲では建物の痕跡は見つかず、土坑が中心である点に違いが認められる。あるいは、城下町の造成などによって、土器の包含層と共に古代以前の造構面が攪乱された結果の可能性もあり、現状では遺跡の性格を比較するのは容易ではないが、博労町遺跡では希薄であった庄内式土器が本調査区ではまとまって出土している点は注目される。庄内式土器の出土をどのように評価するのかという難しい問題があるが、近接した集落でも庄内式土器がほとんど出土していないことから、本調査区の特異性が際立っている。

当時の調査区周辺の環境は、加茂川の洪水によって堆積した粗砂が広がる低湿地であり、有機物を多く含むクロスナに近い色調の粗砂が形成される点は、アシなどの水辺の植物がよく繁茂する環境にあったことを想像させる。このような低湿地は集落を営むには不便だが、水運などの面で有利な立地条件にあったのだろう。広大な米子城下町遺跡でも、弥生終末期の土器が出土する地点はごく限られており、狭い範囲に生活圏があったことは間違いない。今後、集落の中心部が確認されれば、この場所で庄内式土器がまとめて出土する理由も明らかになると考えられる。

### 第2節 近世の成果

近世の調査では、武家屋敷の内部構造と城下町の造成について、いくつかの新知見が得られた。

全体的に見て、近世の遺物の出土量は少なかったが、その中でもある程度まとまっているのが近世

初頭頃の遺物であり、城下町造成の初期に多くの人々が活発な活動を行った証拠と考えられる。また、近世中期以降には出土遺物の量が少なくなっているが、恐らく、廐棄土坑や井戸が見られないことから、武家屋敷の中心建物があった部分を調査した結果、遺物の出土量が少なくなったものと考えられる。

近世の堆積層は砂質傾向の強い土で構成されており、この土は湿潤な状態では掘りやすいが、一旦乾燥すると堅く締まる特徴を持っている。この土の中には大量の土錘が含まれていたことから、中海や加茂川に堆積した浚渫泥と砂を混ぜて整地土にしたと考えられる。これまで米子城下町跡では、遠く離れた山の土を削って運ぶような大規模な造成の跡は確認されておらず、急場しのぎ的な城下町造成の様子を思い浮かべていた。しかし、城下町のベースである粗砂に浚渫泥を混和材として混ぜると、乾燥状態では安定した地面となることから、当初から城下町造成に浚渫泥が用いられていたのではないか。周辺では、松江城下町でも宍道湖の湖泥を用いている事例が確認されており、こうした工法が広く用いられていた可能性もある。今後の調査において、検討すべき課題と考える。

近世の遺構は、大きく分けて第2遺構面と第3遺構面で検出した。前期の遺構は第3遺構面を中心であり、溝2と塀1の二つの区画と、塀1の東側に広がるピット群を確認した。溝2は城下町の地割と平行して掘削されており、城下町の都市計画に沿って掘削された溝であったと考えられる。溝2から出土した遺物は、砂目積の唐津焼を含まないことから、慶長の初期から慶長10年までの、吉川・中村氏時代の遺構と考えられる。また、この遺構とは時期差があるものの、塀1は溝2と直交して設定されており、武家屋敷の内部に設定された遮蔽施設と推測され、この塀1の東側には掘立柱建物の痕跡と見られるピット群が広がっている。一方、塀1の西側には顯著な遺構が認められなかつたが、單独で土坑に埋められた大石1があり、大型の礎石建物を構成する礎石の一部の可能性が考えられた。このことから、今回の調査では塀1を境に掘立柱建物と礎石建物が分離されている状況が窺え、武家屋敷の中でも塀や溝によって空間が細かく分けられていた状況が明らかとなった。恐らく、武家屋敷の中心部分に母屋である礎石建物が置かれ、その周囲に塀や溝を隔てて厩や作事小屋などの掘立柱建物が立ち並んでいたのである。このため、武家屋敷の中心部分は遺構の分布密度が低くなるが、母屋の周辺部は遺構密度が高くなるものと考えられる。

近世後期の遺構は、掘立柱建物と若干のピットがあるのみであったが、やはり上記の理由から、武家屋敷の中心部は遺構が少ないものと推測される。このため、調査で遺構が何も見つかなかった場合でも、空閑地であったとは断定できないことなる。特に、都市部の小規模調査の場合は、注意すべき点であろう。

### 第3節 近代の成果

今回の調査では、鳥取大学事務本館の建物基礎の下に埋もれていた井戸とその周辺から、昭和20年代以前の遺物が大量に出土した。井戸枠内から出土した遺物では、底部に統制番号を書いた茶碗が目を引くが、井戸周辺の建物基礎によって破壊された部分から出土した遺物も、ガラス容器の代用品と見られる陶製のクリーム瓶や青戸牧場銘の牛乳瓶、土製の七輪などが大正時代から昭和初期のものであり、年代的に時期を絞ることが出来る資料である。

また、井戸の掘形からは、裏面に「一年大谷シノ」と線書きされた硯が出土した。調査地の隣接地

には、明治6（1873）年に創立された義方小学校が所在していたことから、この学校の卒業生名簿を調べたところ、明治33（1900）年3月の卒業生に同じ名前があった。このため、この硯が掘形に埋め込まれていた井戸は、明治30年代以降に掘削され、昭和23年の鳥取大学事務本館の建物建設時に埋められたものと推測された。米子城下町は、明治維新後に武家屋敷の多くが取り壊され、屋敷の跡地は畠や水田に転換したと考えられるが、大正時代頃から再び都市化していくことが当時の地図などから読み取れる。今回の発掘調査では、明治時代後期から昭和20年代までの期間に、この土地がどのようにして利用されていたのか分からなかったが、民家か畠の一角であったことは、この井戸に廃棄された生活用品から推測することができる。

この井戸から出土した遺物は、旭日旗や戦車、漫画のらくろの絵が描かれた茶碗など、戦前の食卓にあった食器類である。表面に描かれた戦時色の濃い図柄を見ていると、日清戦争（1894～95年）、日露戦争（1904～05年）、第1次世界大戦（1914～18年）、満州事変（1931～33年）、アジア・太平洋戦争（1941～45年）と、日本が戦争へ突き進んで行った時代背景を感じることができる。硯の持ち主だった大谷シノさんが、その後どのような人生を送ったのか、戦後70年以上の時間が経過した今となっては知る由も無いが、タイムカプセルのように現れたこれらの品々が、戦前の暮らしを伝える資料として歴史教育の場で大いに活用されることを期待する。

#### 参考文献

- 1983年 義方教育百十周年記念誌編纂委員会『義方教育百十周年記念誌』米子市立義方小学校
- 1994年 杉谷愛象『米子城跡2』米子市教育委員会
- 1996年 湯村功『米子城跡第6遺跡』鳥取県教育文化財団
- 1996年 平木裕子『錦町第1遺跡』米子市教育文化事業団
- 1997年 堀内秀樹ほか『東京大学構内遺跡調査研究年報2』東京大学埋蔵文化財調査室
- 2011年 佐伯純也『日久美遺跡第16～18次調査』米子市教育文化事業団
- 2011年 平木裕子ほか『博労町遺跡』米子市教育文化事業団
- 2015年 小山泰生『松江城下町遺跡第3ブロック』松江市スポーツ振興財団

米子城跡第54次調査 土器・陶磁器一覧表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	出土地	種別	口径	底径	器高	色調	調整	備考
Po. 1	基礎遺構 1	磁器・皿	(13.4)		(2.3)	淡青灰色		青花
Po. 2	基礎遺構 1	陶器・碗			(1.1)	乳白色		軽質陶器
Po. 3	基礎遺構 1	陶器・碗	(11.2)	4.2	6.3	淡綠灰色	高台内無釉	唐津焼
Po. 4	基礎遺構 1	陶器・皿	(14.0)	5.4	3.2	灰白色	砂目積	唐津焼
Po. 5	基礎遺構 1	陶器・皿	(11.0)	4.2	3.3	暗緑色	砂目積	唐津焼
Po. 6	基礎遺構 1	陶器・皿	(7.4)	(2.4)	2.4	灰白色	高台内に深いケズリ痕あり	萩焼か
Po. 7	基礎遺構 1	陶器・碗		(5.2)	(3.5)	灰色	高台内施釉	唐津焼
Po. 8	基礎遺構 1	土器・皿	(9.8)	1.8	(5.2)	灰白色	てづくね整形	
Po. 9	基礎遺構 1	磁器・クリーム瓶	3.8	4.0	5.1	白色		花王のマーク
Po. 10	基礎遺構 1	磁器・クリーム瓶	4.0	5.2	4.5	白色		
Po. 11	基礎遺構 1	磁器・茶碗	9.0	3.0	4.3	白色	旭日旗と兵隊	統制番号
Po. 12	基礎遺構 1	磁器・茶碗	9.4	3.2	5.3	白色	日の丸の旗と戦車	統制番号
Po. 13	基礎遺構 1	磁器・角皿	11.2	4.6	3.2	白色	五輪マークと花弁紋	
Po. 14	基礎遺構 1	土器・皿	(10.9)	(5.0)	2.2	灰紫色	てづくね整形	
Po. 15	基礎遺構 1	瓦質土器・五徳	(29.6)	(29.0)	9.7	黒色		
Po. 16	基礎遺構 2	磁器・皿			(5.1)	(1.6)	暗白色	砂目積、底部露胎
Po. 17	基礎遺構 2	陶器・碗	(12.0)	(5.0)	4.4	灰褐色		唐津焼
Po. 18	基礎遺構 2	土器・皿	(8.5)	(4.5)	1.5	灰褐色	底部に条切痕	
Po. 19	基礎遺構 2	陶器・蓋付壺	10.5	7.2	9.6	乳白色	内面施釉	石見焼
Po. 20	土坑 1	陶器・擂鉢			(10.3)	淡赤褐色		備前焼
Po. 21	土坑 1	陶器・瓶	5.0	9.8	25.2	暗褐色	肩部にカキ目調整	在地産
Po. 22	井戸 1・掘形	陶器・大甕	(31.3)		(9.1)	赤褐色	肩部に自然釉	備前焼
Po. 23	井戸 1・井筒内	磁器・茶碗	9.2	2.4	4.7	白色	戦闘機と兵隊、玩具馬	統制番号
Po. 24	井戸 1・井筒内	磁器・茶碗	9.8	3.1	4.6	白色	のらくろと熊章	
Po. 25	井戸 1・井筒内	磁器・茶碗	9.5	3.2	5.0	白色	戦闘機と戦車	統制番号
Po. 26	井戸 1・井筒内	磁器・茶碗	(9.6)	3.0	5.2	白色	日の丸の旗と戦車	統制番号
Po. 27	埋甕遺構 1	陶器・壺	21.8	(16.8)	21.2	暗赤褐色	外面部施釉	在地産
Po. 28	1区・第1遺構面	磁器・皿			(6.8)	(1.9)	白色	青花
Po. 29	1区・第1遺構面	磁器・碗	(10.3)		(5.0)	淡青灰色		伊万里焼
Po. 30	1区・第1遺構面	磁器・碗	(12.0)	5.0	6.0	淡青灰色		伊万里焼
Po. 31	1区・第1遺構面	陶器・水差	(15.2)	(15.0)	10.0	赤褐色		備前焼か
Po. 32	1区・第1遺構面	陶器・壺			(11.2)	(16.7)	赤褐色	外面部カキ目調整
Po. 33	1区・第1遺構面	陶器・皿	(13.6)		(2.6)	灰褐色	てづくね整形	備前焼か
Po. 34	1区・第1遺構面	陶器・皿	9.3	6.4	2.2	灰褐色	底部に条切痕	
Po. 35	1区・第1遺構面	土器・堤炉	22.4	19.6	6.5	明褐色	外面部ハフミガキ調整	
Po. 36	1区・第1遺構面	土器・堤炉五徳	21.0		19.7	明褐色		
Po. 37	2区・第2遺構面	陶器・皿	(12.0)	5.8	4.0	緑灰色		唐津焼
Po. 38	1区・第3遺構面	土器・皿	(13.8)		2.5	灰白色	てづくね整形	
Po. 39	1区・第3遺構面	土器・皿	(11.6)		(2.2)	灰褐色	てづくね整形	
Po. 40	1区・第3遺構面	土器・皿	(11.2)	(5.4)	2.1	灰白色	てづくね整形	
Po. 41	1区・第3遺構面	陶器・碗	(9.6)		(2.9)	灰色		朝鮮か
Po. 42	壠 1	磁器・小壺	(8.6)		(3.3)	白色		伊万里焼
Po. 43	壠 1	磁器・小壺	(7.6)		(2.8)	淡青灰色		伊万里焼
Po. 44	壠 1	陶器・碗	(21.4)		(6.0)	乳白色		萩焼か
Po. 45	壠 1	陶器・碗	(14.1)		(3.4)	乳白色		萩焼か
Po. 46	壠 1	土器・皿	(9.0)		2.0	褐色	てづくね整形	
Po. 47	壠 1	土器・壺			(6.0)	2.8	灰白色	底部に条切痕
Po. 48	壠 1	土器・壺			(6.8)	(1.8)	灰白色	底部に条切痕 内面煤付着

Pa.49	塚1	磁器・皿	(21.6)		(3.5)	乳白色		伊万里焼
Pa.50	塚1	陶器・擂鉢	(32.0)		(4.6)	褐色		越前焼
Pa.51	塚1	陶器・擂鉢	(33.6)		(5.0)	褐色		開西系
Pa.52	塚1	瓦質土器・鉢	(31.8)		(4.7)	灰褐色	内面ハケ調整	火跡か
Pa.53	溝2	陶器・碗	(10.5)	4.5	6.2	淡灰茶色	外面に鉄絵	唐津焼
Pa.54	溝2	陶器・碗	(11.2)		(3.8)	暗灰色	口縁に鉄絵	唐津焼
Pa.55	溝2	陶器・碗			(5.0)	(2.1)	暗赤色	天目茶碗か
Pa.56	溝2	陶器・皿	(13.5)		(2.7)	淡灰茶色	鉄絵	唐津焼
Pa.57	溝2	陶器・皿	11.6	4.1	3.4	白色	底部露胎	唐津焼
Pa.58	溝2	陶器・皿	(12.3)		(2.5)	暗灰色		唐津焼
Pa.59	溝2	陶器・皿			(3.8)	(1.7)	灰茶色	底部露胎
Pa.60	溝2	陶器・鉢	(26.7)		(7.2)	暗灰色	鉄絵	唐津焼
Pa.61	溝2	陶器・皿	(36.0)		(3.8)	暗灰色		唐津焼
Pa.62	溝2	陶器・皿	23.1	8.7	9.0	暗灰色	鉄絵	唐津焼
Pa.63	溝2	陶器・皿	(12.3)	(7.7)	2.6	乳白色	貫入	志野焼
Pa.64	溝2	陶器・瓶			(14.0)	(10.9)	赤褐色	内面に当て具痕
Pa.65	溝2	土器・皿	(11.8)		(1.9)	灰茶色	てづくね整形	
Pa.66	1区・第3造横面	磁器・碗	(15.6)		(2.3)	乳白色		中国・白磁
Pa.67	1区・第3造横面	磁器・小碗	(6.5)	(2.8)	4.2	白色	外面ヘラ彫り、底部露胎	白組
Pa.68	1区・第3造横面	磁器・皿	(23.8)		(2.1)	灰青色	粗製	青花
Pa.69	1区・第3造横面	磁器・皿			(7.4)	(1.4)	白色	青花
Pa.70	1区・第3造横面	磁器・碗			5.4	(3.9)	乳白色	外面ヘラ彫り
Pa.71	1区・第3造横面	陶器・皿	(10.8)		(1.6)	淡緑灰色		瀬戸・美濃
Pa.72	1区・第3造横面	陶器・皿	(11.0)	(3.9)	2.8	淡灰色	胎土目積、鉄絵	唐津焼
Pa.73	1区・第3造横面	陶器・皿			4.8	(1.6)	淡緑灰色	胎土目積
Pa.74	1区・第3造横面	陶器・碗	(10.2)		4.8	5.7	淡緑灰色	底部露胎
Pa.75	1区・第3造横面	陶器・碗			4.2	(2.6)	淡緑灰色	底部露胎
Pa.76	1区・第3造横面	陶器・碗			(2.5)	4.4	淡茶灰色	底部露胎
Pa.77	1区・第3造横面	陶器・碗			(4.5)	(3.1)	青白色	上野・高取
Pa.78	1区・第3造横面	陶器・向付				(3.1)	乳白色	志野焼
Pa.79	1区・第3造横面	陶器・壺			(15.0)	(3.7)	淡灰茶色	产地不明
Pa.80	1区・第3造横面	陶器・擂鉢			14.0	(5.1)	淡灰色	内面磨滅
Pa.81	1区・第3造横面	土器・埴輪				(2.5)	淡橙褐色	タガ部
Pa.82	1区・第3造横面	土器・皿	(12.4)		(2.3)	灰白色	てづくね整形	
Pa.83	1区・第3造横面	土器・皿	(11.4)	(8.0)	(2.2)	灰白色	てづくね整形	
Pa.84	1区・第3造横面	土器・皿	(9.8)		(2.0)	淡褐色		
Pa.85	1区・第3造横面	土器・皿	(8.4)	(4.4)	1.6	淡褐色	底部に糸切痕	
Pa.86	1区・第3造横面	土器・皿	5.8	4.6	2.1	淡褐色	底部に糸切痕	
Pa.87	1区・第3造横面	土器・皿	8.5	4.4	2.3	淡褐色	底部に糸切痕	
Pa.88	1区・第3造横面	土器・壺	(11.6)	(6.0)	3.9	褐色	底部に糸切痕	
Pa.89	1区・第3造横面	須恵器・环身			(6.0)	(1.5)	黒灰色	底部に糸切痕
Pa.90	1区・第4造横面	磁器・碗	(11.8)		(3.0)	淡緑色		中国・青磁
Pa.91	1区・第4造横面	須恵器・壺			(12.5)	(5.2)	灰褐色	
Pa.92	1区・第4造横面	土器・鍋	(26.7)		(5.2)	灰褐色	内面ハケ調整	外面煤付着
Pa.93	1区・第4造横面	瓦質土器・鉢	(22.0)		(4.5)	暗灰白色		内面磨滅
Pa.94	挺立柱建物2	瓦質土器・擂鉢	(20.0)		(4.0)	淡灰色		内面磨滅
Pa.95	1区・第4造横面	陶器・皿			(5.6)	(1.3)	淡緑色	底部の釉掛け取り
Pa.96	1区・第4造横面	土器・壺	(11.8)		(2.9)	淡灰褐色		瀬戸・美濃
Pa.97	1区・第4造横面	土器・皿	(8.5)	(5.1)	2.3	淡灰褐色	底部に糸切痕	
Pa.98	1区・第4造横面	磁器・碗			(7.0)	(2.0)	乳白色	底部露胎

Pa. 99	1区・第4道横面	磁器・鉢		(2.5)	白色		青花
Pa. 100	1区・第4道横面	てづくね土器	(11.0)	(11.5)	2.3	淡褐色	てづくね整形
Pa. 101	1区・第4道横面	弥生土器・壺	(12.9)		(5.4)	灰茶色	内面ケズリ
Pa. 102	1区・第4道横面	土師器・壺	(13.7)		(6.4)	灰褐色	内面ナデ、外面タタキ
Pa. 103	1区・第4道横面	土師器・壺	(15.4)		(4.0)	灰褐色	内面ナデ、外面タタキ
Pa. 104	1区・第4道横面	土師器・壺	(12.6)		(7.5)	灰褐色	内面ナデ、外面タタキ
Pa. 105	1区・第4道横面	土師器・壺	(12.3)		(5.8)	灰褐色	内面ナデ、外面タタキ後ナデ
Pa. 106	1区・第4道横面	土師器・壺	(15.6)		(6.2)	灰褐色	内面ハケ、外面タタキ
Pa. 107	1区・第4道横面	土師器・壺	(13.0)		21.5	灰褐色	内面ケズリ、外面ハケ
Pa. 108	1区・第4道横面	土師器・壺	(13.0)		(22.7)	灰白色	内面ケズリ、外面ハケ
Pa. 109	1区・第4道横面	土師器・壺	(22.0)		(10.4)	灰白色	内面ケズリ、外面ハケ
Pa. 110	1区・第4道横面	土師器・壺	(13.8)		(7.8)	淡灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 111	1区・第4道横面	土師器・壺	(15.0)		(5.8)	淡灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 112	1区・第4道横面	土師器・壺	(14.0)		(5.0)	灰白色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 113	1区・第4道横面	土師器・壺	(16.0)		(11.9)	灰白色	内面ケズリ、外面ハケ
Pa. 114	1区・第4道横面	土師器・壺	(18.0)		(6.4)	淡灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 115	1区・第4道横面	土師器・壺	(13.4)		(6.5)	灰白色	内面ケズリ、外面ハケ
Pa. 116	1区・第4道横面	土師器・壺	(12.7)		(6.3)	淡灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 117	1区・第4道横面	土師器・壺	(16.0)		(4.2)	淡灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 118	1区・第4道横面	土師器・壺	(15.2)		(5.9)	淡灰褐色	内面ケズリ、外面ハケ
Pa. 119	1区・第4道横面	土師器・壺	(12.2)		(4.2)	淡褐色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 120	1区・第4道横面	土師器・壺	(12.5)		(6.8)	灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 121	1区・第4道横面	土師器・壺	(10.9)		(4.5)	灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ、ミガキ
Pa. 122	1区・第4道横面	土師器・壺	(19.6)		(4.9)	暗灰白色	内面ケズリ、外面ナデ
Pa. 123	1区・第4道横面	土師器・壺	(15.7)		(6.7)	灰褐色	内外面ともナデ
Pa. 124	1区・第4道横面	土師器・壺	(20.7)		(8.6)	淡灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ、ハケ
Pa. 125	1区・第4道横面	土師器・壺	(19.6)		(6.6)	淡白色	内外面ともナデ
Pa. 126	1区・第4道横面	土師器・壺	(17.4)		(5.0)	淡灰褐色	内外面ともナデ
Pa. 127	1区・第4道横面	土師器・壺			(6.7)	灰白色	ナデ、羽状紋
Pa. 128	1区・第4道横面	土師器・壺			(6.1)	灰白色	ナデ、羽状紋
Pa. 129	1区・第4道横面	土師器・壺			(4.1)	灰白色	ナデ、羽状紋
Pa. 130	1区・第4道横面	土師器・壺	(12.0)		(10.2)	灰褐色	内面ケズリ、外面ハケ
Pa. 131	1区・第4道横面	土師器・壺	(9.5)		(11.2)	灰褐色	内面ケズリ、外面ハケ、ミガキ
Pa. 132	1区・第4道横面	土師器・注口土器	(長さ)7.9	(幅)3.0		灰褐色	ナデ
Pa. 133	1区・第4道横面	土師器・壺			(4.1)	淡灰褐色	内面ケズリ後ナデ
Pa. 134	1区・第4道横面	てづくね土器	(4.2)	(2.7)	4.3	明白白色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ
Pa. 135	1区・第4道横面	土師器・高环	(23.8)		(5.0)	淡灰褐色	内外面ともミガキ
Pa. 136	1区・第4道横面	土師器・高环	(22.0)	(14.0)	15.1	灰白色	脚部ハケ、环部ミガキ
Pa. 137	1区・第4道横面	土師器・高环	(18.8)		(4.4)	灰白色	内外面ともハケ後ナデ
Pa. 138	1区・第4道横面	土師器・高环	(16.4)		(4.4)	灰白色	内外面ともミガキ
Pa. 139	1区・第4道横面	土師器・高环	(16.8)		(4.4)	淡灰褐色	内外面ともミガキ
Pa. 140	1区・第4道横面	土師器・高环	(14.0)		(3.7)	灰色	内外面ともナデ
Pa. 141	1区・第4道横面	土師器・高环			11.2	(3.3)	淡橙褐色
Pa. 142	1区・第4道横面	土師器・高环			(12.4)	(8.5)	灰白色
Pa. 143	1区・第4道横面	土師器・高环			(15.8)	(5.1)	灰白色
Pa. 144	1区・第4道横面	土師器・高环			(8.4)	(6.0)	淡褐色
Pa. 145	1区・第4道横面	土師器・高环			(7.4)	暗灰白色	外面ヨコナデ
Pa. 146	1区・第4道横面	土師器・高环			(6.0)	淡橙褐色	内面ケズリ、外面風化
Pa. 147	1区・第4道横面	土師器・低脚环			4.5	(3.1)	淡橙褐色
Pa. 148	1区・第4道横面	土師器・低脚环			(6.0)	(2.7)	灰白色
							内外面ともミガキ

Pa.149	1区・第4道横面	土師器・低脚环か		3.9	(2.7)	淡橙褐色	内外面ともミガキ	
Pa.150	1区・第4道横面	土師器・器台	(18.3)		(7.0)	灰白色	内外面ともミガキ	
Pa.151	1区・第4道横面	土師器・器台	(19.0)		(10.0)	灰白色	内外面ともミガキ。底部内面ケズリ	
Pa.152	1区・第4道横面	土師器・器台	(16.6)		(5.2)	灰褐色	内外面ともミガキ	
Pa.153	1区・第4道横面	土師器・器台		(22.0)	(5.6)	淡橙褐色	内外面ともナデ	
Pa.154	1区・第4道横面	土師器・器台		(13.0)	(3.6)	灰白色	内面ケズリ。外面ナデ	
Pa.155	T1	磁器・碗	(10.0)		(4.0)	灰白色	鉄繪	陶胎染付
Pa.156	T1	磁器・碗	(10.8)	(6.0)	5.6	淡青白色		広東焼
Pa.157	T1	磁器・碗	(10.4)	4.1	5.7	淡青白色	内面に雷紋、外面に魚	端反碗
Pa.158	T1	磁器・小杯	(6.8)	4.6	5.3	白色	花の紋様	伊万里焼
Pa.159	T1	陶器・碗	(10.8)	4.4	7.0	暗灰色	底部露胎	唐津焼
Pa.160	T1	陶器・皿	(13.6)	(6.0)	3.5	灰褐色	底部に糸切痕	唐津焼
Pa.161	T1	陶器・皿	(13.2)	(4.4)	3.1	淡緑灰色	跡目積	唐津焼
Pa.162	T1	陶器・皿	(12.4)	4.2	3.1	淡緑灰色	高台に跡目跡	唐津焼
Pa.163	T1	陶器・皿		(4.8)	(3.8)	白灰色	跡目積	唐津焼
Pa.164	T1	陶器・皿			(4.4)	(1.5)	白灰色	跡目積
Pa.165	T1	陶器・皿			(4.8)	(1.9)	白灰色	跡目積
Pa.166	T1	陶器・皿			(4.5)	(2.1)	淡茶灰色	一部に白色釉が掛かる
Pa.167	T1	陶器・型打皿			(8.6)	(1.2)	白灰色	型打変形
Pa.168	T1	陶器・搖鉢	(27.6)		(7.3)	赤褐色		備前焼
Pa.169	T1	陶器・搖鉢	(26.1)		(3.0)	暗茶褐色	口縁部のみ施釉	唐津焼
Pa.170	T1	土器・はうろく	(30.0)		(3.2)	灰褐色	内外面ともナデ	
Pa.171	T1	土器・鍋	(24.7)		(6.3)	白灰色	内外面ともハケ	外面煤付着
Pa.172	T1	土器・皿	11.8	8.0	2.4	淡灰褐色	てづくね整形	
Pa.173	T2	磁器・皿			(1.2)	淡緑灰色		青磁
Pa.174	T2	陶器・碗	(10.0)		(2.3)	淡灰色	貫入	京焼系
Pa.175	T2	須恵器・坏身	(9.2)		(2.0)	淡黒灰色	ナデ	
Pa.176	T2	土師器・甕	(14.7)		(6.5)	灰茶色	四線紋、内面ケズリ	
Pa.177	T2	土師器・甕	(13.2)		(6.1)	淡灰褐色	内面ケズリ。外面ナデ。刺突紋	
Pa.178	T2	土師器・甕	(14.5)		(4.4)	灰褐色	内面ケズリ	
Pa.179	T2	土師器・甕	(16.0)		(4.8)	灰白色	内面ケズリ。外面ナデ	
Pa.180	T2	土師器・甕	(15.2)		(4.8)	暗灰白色	内面ケズリ。外面ナデ	外面煤付着
Pa.181	T2	土師器・甕	(16.5)		(3.2)	灰褐色	内面ケズリ。外面ナデ	
Pa.182	T2	土師器・甕	(20.4)		(14.0)	灰白色	内面ケズリ。外面ハケ。波状紋	
Pa.183	T2	土師器・壺	(14.8)		(13.6)	淡赤褐色	内面ケズリ。外面ハケ	
Pa.184	T2	土師器・壺	(14.0)		(6.4)	灰白色	内外面ともナデ	
Pa.185	T2	土師器・壺	(19.8)		(8.9)	灰白色	内面ケズリ。外面ハケ	
Pa.186	T2	土師器・注口土器	0.8		(4.5)	灰白色	ナデ。羽状紋	
Pa.187	T2	土師器・壺			(5.9)	灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ。スタンプ紋	
Pa.188	T2	土師器・壺			(10.6)	灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ	
Pa.189	T2	土師器・壺			(8.0)	灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ	
Pa.190	T2	土師器・壺			(16.8)	灰白色	内面ケズリ。外面ハケ。波状紋	
Pa.191	T2	土師器・壺		5.4	(4.6)	灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ	
Pa.192	T2	土師器・高环	(26.0)		(8.9)	淡橙褐色	内面ともミガキ	
Pa.193	T2	土師器・高环			(8.3)	(8.2)	橙褐色	ハケ後ナデ
Pa.194	T2	土師器・低脚环か			(6.8)	(3.0)	灰褐色	内面ミガキ。外面ナデ
Pa.195	T2	土師器・器台			(4.0)	灰白色	内面ミガキ。外面スタンプ紋	
Pa.196	T2	土師器・器台	(18.0)		(6.9)	灰白色	ミガキ。刺突紋	
Pa.197	T2	土師器・器台			(15.8)	(7.6)	灰白色	内面ケズリ。外面ナデ
Pa.198	T2	土師器・器台			(5.2)	灰褐色	内面ケズリ。外面ナデ	

Pa.199	T3	土師器・甕	(16.2)	(10.4)	暗灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ		
Pa.200	T3	土師器・甕	(17.6)	(4.3)	灰白色	内外面ともナデ		
Pa.201	T4	鉢器・皿	(5.0)	(1.4)	淡青灰色		青花	
Pa.202	T4	鉢器・碗	(5.6)	(1.4)	淡綠色		青磁	
Pa.203	T4	瓦質土器・擂鉢	(8.6)	(2.3)	淡灰色		外面焼付着	
Pa.204	T4	陶器・擂鉢	(11.6)	(4.7)	褐色	薄い鉄錆を掛ける	内面磨滅	
Pa.205	T4	土師器・甕	(21.8)	(6.0)	灰白色	内面ケズリ。外面ナデ		
Pa.206	T4	土師器・把手部	(長さ)11.1 (幅)6.8		灰褐色	ナデ		
Pa.207	T5・第3造構面	磁器・皿		(1.5)	暗灰色	粗製品	青花	
Pa.208	T5・第3造構面	磁器・碗	(10.4)	(4.8)	白色		伊万里焼	
Pa.209	T5・溝3	磁器・碗		(4.2)	(3.8)	淡青灰色		
Pa.210	T5・第3造構面	陶器・皿	(13.5)	4.7	3.6	白色	移日積	
Pa.211	T5・第3造構面	陶器・擂鉢		(8.6)	灰褐色	外面ケズリ。内面磨滅	唐津焼	
Pa.212	T5・第3造構面	土器・鉢	(21.0)	(3.8)	淡灰褐色	内面ハケ。外面ナデ	越前焼	
Pa.213	T5・第3造構面	瓦質土器・擂鉢	(23.0)	(5.5)	明灰色	内面ハケ、外面ナデ		
Pa.214	T5・第3造構面	瓦質土器・擂鉢		(14.5)	(5.8)	暗灰色	全体に風化	
Pa.215	土器集中1	土師器・甕	(17.4)	(7.0)	淡褐色	内面ケズリ。外面ナデ		
Pa.216	土器集中1	土師器・甕	(13.7)	(7.4)	灰褐色	内面ケズリ。外面ナデ、剥突紋		
Pa.217	土器集中1	土師器・高坏	19.1	(5.4)	灰白色	内外面ともナデ、ミガキ		
Pa.218	土器集中1	土師器・高坏	8.9	(2.9)	灰褐色	内外面ともミガキ		
Pa.219	土器集中1	てづくりね土器	3.2	2.2	灰褐色	ナデ		
Pa.220	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.5)	(11.4)	淡灰褐色	内面ナデ、外面タタキ後ナデ	黒窯	
Pa.221	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.6)	(4.6)	淡褐色	内面ナデ、外面タタキ		
Pa.222	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.9)	(5.1)	淡灰褐色	内面ナデ、外面タタキ後ナデ	黒窯	
Pa.223	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.6)	(2.6)	灰褐色	内面ハケ、外面タタキ		
Pa.224	T5・第4造構面	土師器・甕		(9.0)	灰褐色	内面ハケ、外面タタキ	底部に焼付着	
Pa.225	T5・第4造構面	土師器・甕		1.8	(2.4)	灰褐色	内面ナデ、外面タタキ	
Pa.226	T5・第4造構面	土師器・甕	15.2	(13.8)	灰白色	内面ケズリ、外面ハケ。波状紋		
Pa.227	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.9)	(10.0)	灰白色	内面ケズリ。外面ハケ。波状紋		
Pa.228	T5・第4造構面	土師器・甕	16.8	(7.8)	灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ。波状紋		
Pa.229	T5・第4造構面	土師器・甕	(17.3)	(7.3)	灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ。波状紋		
Pa.230	T5・第4造構面	土師器・甕	(15.5)	(8.8)	橙褐色	内面ケズリ、外面ハケ		
Pa.231	T5・第4造構面	土師器・甕	(15.8)	(5.3)	淡灰褐色	内面ケズリ。外面ハケ		
Pa.232	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.0)	(4.4)	灰白色	内外面ともナデ		
Pa.233	T5・第4造構面	土師器・甕	(16.0)	(5.0)	灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ		
Pa.234	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.8)	(6.0)	灰白色	内面ケズリ、外面ナデ		
Pa.235	T5・第4造構面	土師器・甕	(16.3)	(6.4)	灰茶色	内面ケズリ、外面ハケ		
Pa.236	T5・第4造構面	土師器・甕	(13.8)	(11.0)	淡橙褐色	内面ケズリ。外面ハケ		
Pa.237	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.1)	(12.2)	淡橙褐色	内面ケズリ。外面ナデ		
Pa.238	T5・第4造構面	土師器・甕	(29.2)	(9.7)	灰白色	内面ケズリ、外面ハケ		
Pa.239	T5・第4造構面	土師器・甕	(19.8)	(2.8)	灰茶色	波状紋、円形浮紋		
Pa.240	T5・第4造構面	土師器・甕	(14.4)	(7.7)	淡橙褐色	内面ナデ、外面ミガキ		
Pa.241	T5・第4造構面	土師器・甕	(10.4)	(5.5)	灰褐色	内外面ともミガキ		
Pa.242	T5・第4造構面	土師器・甕	(22.2)	(10.2)	灰褐色	内外面ともミガキ		
Pa.243	T5・第4造構面	土師器・甕	(16.0)	(7.7)	灰褐色	内面ケズリ、外面ナデ		
Pa.244	T5・第4造構面	土器・底部		4.5	(4.3)	灰褐色	ナデ	黒窯
Pa.245	T5・第4造構面	土器・底部		4.0	(3.1)	灰茶色	内外面ともミガキ	底部擦剥
Pa.246	T5・第4造構面	土師器・高坏	(15.8)	(10.6)	灰褐色	内外面ともミガキ		
Pa.247	T5・第4造構面	土師器・高坏	(18.0)	(4.5)	暗灰褐色	ハケ後ナデ		
Pa.248	T5・第4造構面	土師器・高坏	(12.8)	(4.8)	淡灰褐色	ハケ後ナデ		

Po.249	T5・第4遺構面	土師器・高环		(7.0)	灰白色	内面ケズリ、外面ハケ後ミガキ	
Po.250	T5・第4遺構面	土師器・高环		(5.7)	灰褐色	内面ケズリ、外面ハケ後ミガキ	
Po.251	T5・第4遺構面	土師器・高环		(9.4)	(5.2)	淡灰褐色	内面ともミガキ
Po.252	T5・第4遺構面	土師器・高环		6.3	(3.7)	橙褐色	ナデ
Po.253	T5・第4遺構面	土師器・高环		(10.2)	(3.0)	灰白色	ナデ後ミガキ
Po.254	T5・第4遺構面	土師器・器台	(21.3)	(17.3)	9.4	灰白色	ミガキ、底部内面ケズリ

米子城跡第54次調査 ガラス製品一覧表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	出 土 地	種 別	口径	底 径	器 高	色 調	備 考
G.1	基礎遺構1	ガラス瓶		5.2×3.3	(9.0)	淡緑色	ヘチマコロン
G.2	基礎遺構1	ガラス瓶	1.8	4.5×3.0	9.1	透明	薬瓶
G.3	基礎遺構1	ガラス瓶	1.9	5.0	21.1	淡青色	白玉ソース
G.4	土坑1	ガラス瓶	2.3	7.6	28.1	暗緑色	ビール瓶か
G.5	土坑1	ガラス瓶	2.8	8.0	32.3	淡緑色	ワインボトル
G.6	井戸1・掘形	ガラス瓶	2.0	4.4×3.3	9.4	透明	薬瓶
G.7	井戸1・井筒内	ガラス鉢	12.6	5.6	5.1	透明	プレスガラスか
G.8	井戸1・井筒内	ガラス瓶	3.4	2.6	2.1	白色	クリーム瓶
G.9	1区・第1遺構面	ガラス瓶	2.9		(12.2)	透明	牛乳瓶

米子城跡第54次調査 石製品一覧表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	出 土 地	出土遺物	長 さ	幅	厚 さ	石 材
S.1	井戸1・掘形	硯	13.7	7.3	1.9	頁岩
S.2	1区・第4遺構面	軽石	6.6	3.8	3.7	軽石
S.3	掘立柱建物2	根石（煤付着）	22.3	14.9	7.5	珪岩
S.4	1区・第4遺構面	砥石	13.4	8.2	4.7	緑色凝灰岩
S.5	1区・第4遺構面	石臼（煤付着）	34.1	(18.4)	10.3	デイサイト
S.6	T1	砥石	13.3	3.0	3.0	珪岩

米子城跡第54次調査 木製品一覧表（残存・復元値は（ ）で表示）

遺物番号	出 土 地	出土遺物	長 さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹 種
W.1	掘立柱建物1	柱材	14.8	10.2	9.0	ブナ科ブナ属
W.2	掘立柱建物1	柱材	20.7	16.5	14.0	マツ科マツ属（二葉松類）
W.3	塀1	下駄の歯	9.4	12.0	1.8	モクレン科モクレン属
W.4	塀1	柱材	33.0	13.0	11.4	ブナ科クリ属クリ
W.5	塀1	柱材	45.7	11.2	8.9	ブナ科クリ属クリ
W.6	塀1	柱材	47.0	9.0	7.1	ブナ科クリ属クリ
W.7	塀1	柱材	59.9	10.0	7.5	ブナ科クリ属クリ
W.8	塀1	柱材	40.6	10.6	7.6	ブナ科クリ属クリ

W. 9	溝2	漆椀	残存径10.4		2.7	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
W. 10	掘立柱建物2	柱材	17.8	10.6	11.0	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節
W. 11	掘立柱建物2	柱材	33.0	12.0	10.5	ブナ科クリ属クリ
W. 12	1区・第4遺構面	板材	25.7	2.9	1.2	ヒノキ科アスナロ属
W. 13	T1	蓋	12.6	6.1	0.8	スギ科スギ属スギ
W. 14	掘立柱建物3	柱材	25.7	9.9	8.4	ブナ科クリ属クリ
W. 15	掘立柱建物3	柱材	25.1	10.2	8.5	ブナ科クリ属クリ
W. 16	掘立柱建物3	柱材	44.1	9.0	9.0	ブナ科クリ属クリ
W. 17	T1・第4遺構面	柱材	43.5	12.1	11.9	ブナ科クリ属クリ
W. 18	T1・第4遺構面	柱材	21.8	7.8	4.4	ブナ科クリ属クリ
W. 19	T4	柱材	21.5	10.6	9.6	ブナ科ブナ属
W. 20	T4	柱材	41.5	14.5	14.2	マツ科マツ属(二葉松類)

米子城跡第54次調査 金属製品一覧表(残存・復元値は( )で表示)

遺物番号	出土地	出土遺物	長さ	幅	厚さ	材質	備考
M. 1	1区・第1遺構面	キセル・雁首	5.2	1.3	1.7	真鍮か	
M. 2	1区・第4遺構面	銅錢・熙寧元宝	2.4	2.4	0.1	青銅	摸鋳錢
M. 3	1区・第4遺構面	銅錢・熙寧元宝	2.4	2.4	0.1	青銅	本錢
M. 4	T1	分銅	3.1	1.5	1.5	青銅か	重さ、51.1g
M. 5	T5・第3遺構面	銅錢・嘉祐通寶	2.4	2.4	0.1	青銅	

米子城跡第54次調査 骨角製品一覧表(残存・復元値は( )で表示)

遺物番号	出土地	出土遺物	長さ	幅	厚さ	備考
B. 1	1区・第1遺構面	ヘラ	(7.1)	2.3	0.4	一部に光沢あり

米子城跡第54次調査 瓦製品一覧表(残存・復元値は( )で表示)

遺物番号	出土地	出土遺物	長さ	幅	厚さ	備考
R. 1	基礎遺構1	棟瓦	(11.5)	(14.5)	2.1	燻瓦・刻印
R. 2	基礎遺構1	棟瓦	26.2	(12.8)	1.8	燻瓦
R. 3	井戸1・掘形	敷瓦	(16.7)	(15.0)	1.8	燻瓦
R. 4	井戸1・掘形	棟瓦	28.5	30.4	1.8	施釉瓦
R. 5	1区・第1遺構面	軒平瓦	(6.7)	(4.4)	2.3	燻瓦
R. 6	1区・第1遺構面	鬼瓦	14.5	(11.3)	4.8	燻瓦
R. 7	1区・第3遺構面	鳥衾瓦	(13.9)	(11.5)	5.1	燻瓦
R. 8	塀1	丸瓦	26.5	(12.0)	2.2	燻瓦
R. 9	1区・第3遺構面	瓦転用品	5.0	5.1	2.0	燻瓦
R. 10	1区・第4遺構面	丸瓦	(23.5)	14.5	1.9	燻瓦
R. 11	1区・第4遺構面	丸瓦	(25.1)	(12.2)	1.9	燻瓦
R. 12	T1	道具瓦	(7.3)	6.5	2.0	燻瓦
R. 13	T5・第3遺構面	瓦転用品	7.5	7.9	1.8	燻瓦

# 写 真 図 版

1. 調査区全景  
(南西より)



2. 1区調査風景  
(西より)



3. 1区第1遺構面完掘  
(西より)



写真図版 2



1. 磐石建物 1  
新段階検出(南西より)



2. 磐石建物 1  
磐石の重複 (西より)



3. 磐石建物 1  
古段階検出 (西より)



1. 磨石建物 1  
古段階完掘  
(南東より)



2. 溝 1 完掘  
(南東より)



3. 井戸 1 据形断面  
(南東より)

写真図版 4



1. 井戸 1 挖形完掘 (西より)



2. 1区第3遺構面検出  
(西より)



3. 1区第3遺構面完掘  
(北東より)



1. 1区第3遺構面完掘（東より）



2. 堀1完掘（北東より）

写真図版 6



1. 塚1 R.8出土状況  
(西より)



2. 溝2新段階完掘  
(北西より)



3. 溝2断面 (北西より)



1. 1区第4遺構面検出  
(南西より)



2. 1区第4遺構面  
調査風景 (南より)



3. 1区大石1完掘  
(南より)

写真図版 8



1. 掘立柱建物 1 W. 2棟出  
(北西より)



2. 掘立柱建物 2 完掘  
(南西より)



3. 掘立柱建物 2 W.10棟出  
(東より)



1. 挖立柱建物2  
W. 11検出（東より）



2. 1区第4遺構面  
Po. 107出土状況  
(南より)



3. 1区第4遺構面完掘  
(南東より)

写真図版10



1. T1掘立柱建物 3検出  
(西より)



2. T1掘立柱建物 3検出  
(南西より)



3. T1第4遺構面完掘  
(北東より)



1. T2据立柱建物 4 挖出  
(北東より)



2. T2据立柱建物 4 完掘  
(北東より)



3. T2第 4 遺構面完掘  
(北東より)



1. T2掘立柱建物4完掘（南西より）



1. T3第4遺構面完掘  
(東より)



2. T3第4遺構面南側  
(南東より)



3. T3第4遺構面北側  
(南東より)

写真図版14



1. T4調査風景（西より）



2. T4第3遺構面完掘  
(西より)



3. T4第4遺構面完掘  
(北東より)



1. T5溝3完掘（西より）



2. T5第3遺構面完掘  
(北東より)



3. T5第4遺構面完掘  
(北東より)



1. 土器集中1完掘（北東より）



2. 土器集中1完掘（北より）



Po.11



Po.12



Po.19



Po.13



Po.23



G.7



Po.24

(S = 1 : 2)

写真図版18



Po. 35・36

(S = 1 : 2)



Po.53



Po.57



Po.62

(S = 1 : 2)



W.9



W.3



W.4



W.5



W.6



W.7



W.8

(W.3とW.9はS=1:2、W.4~8はS=1:4)

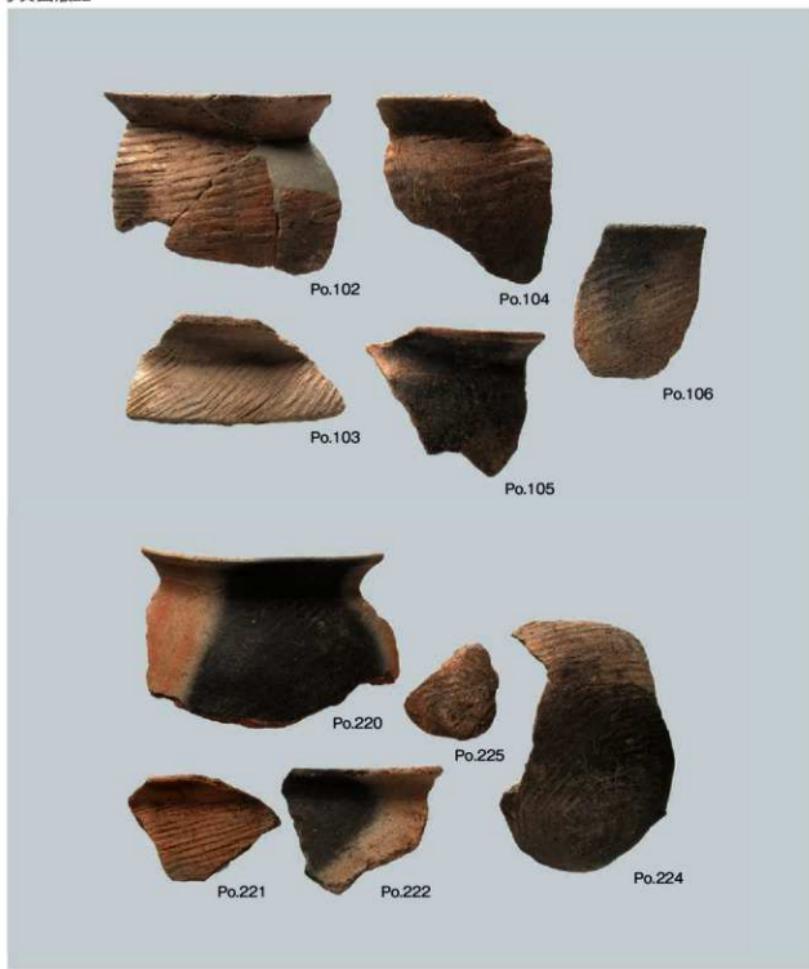


Po.219



Po.226

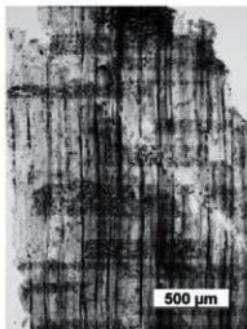
(Po. 219は S = 1 : 1、Po. 226は S = 1 : 2)



(S = 1 : 2)



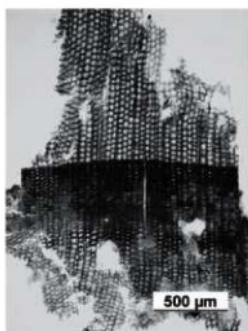
木口  
W.1 ブナ科ブナ属



柾目



板目



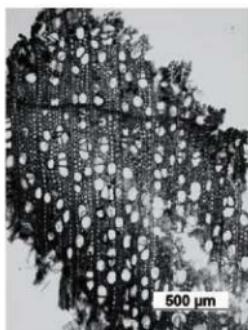
木口  
W.2 マツ科マツ属【二葉松類】



柾目



板目



木口  
W.3 モクレン科モクレン属

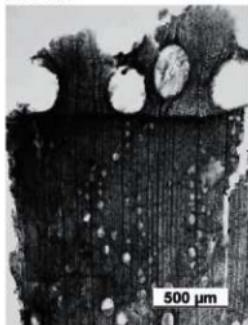


柾目

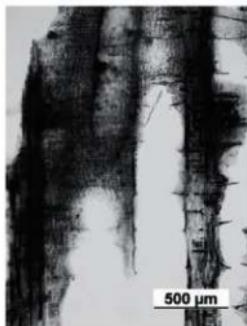


板目

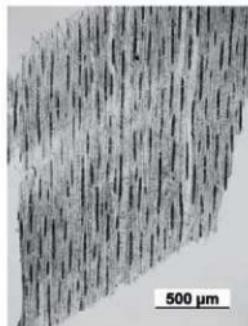
写真図版24



W.4 ブナ科クリ属クリ  
木口



柾目



板目



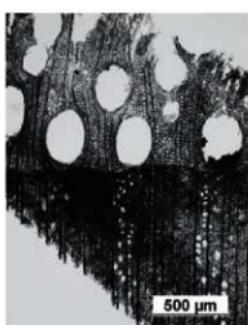
W.5 ブナ科クリ属クリ  
木口



柾目



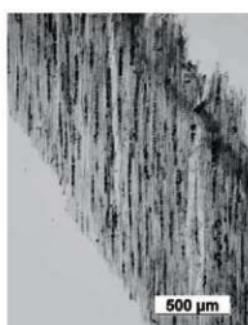
板目



W.6 ブナ科クリ属クリ  
木口



柾目



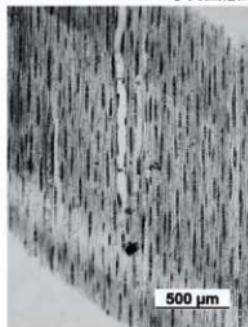
板目



W.7 ブナ科クリ属クリ  
木口



柾目



板目



W.8 ブナ科クリ属クリ  
木口



柾目



板目



W.9 ニレ科ケヤキ属ケヤキ  
木口



柾目



板目

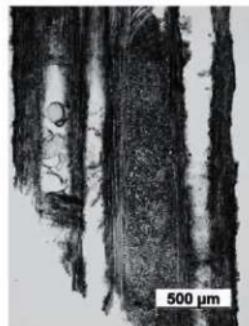
写真図版26



木口



柾目



板目

W.10 ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口



柾目



板目

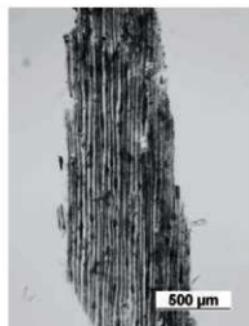
W.11 ブナ科クリ属クリ



木口



柾目



板目

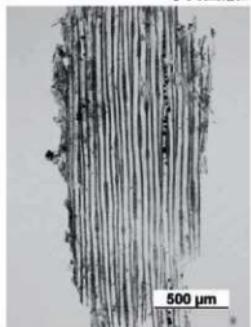
W.12 ヒノキ科アスナロ属



木口



柾目



板目

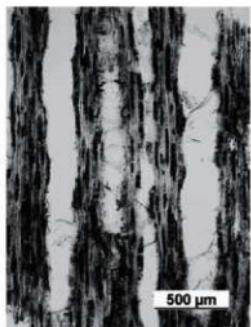
W.13 スギ科スギ属スギ



木口



柾目



板目

W.14 ブナ科クリ属クリ



木口



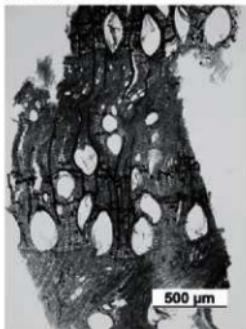
柾目



板目

W.15 ブナ科クリ属クリ

写真図版28



木口



柾目



板目

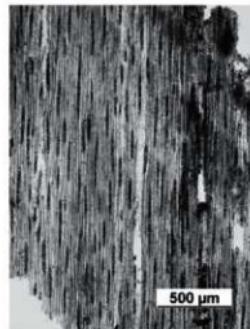
W.16 ブナ科クリ属クリ



木口



柾目



板目

W.17 ブナ科クリ属クリ



木口



柾目

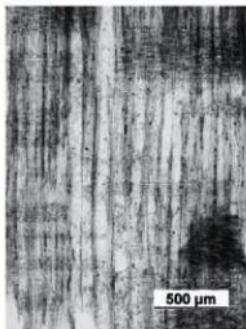


板目

W.18 ブナ科クリ属クリ



木口



桿目



板目

W.19 ブナ科ブナ属



木口



桿目



板目

W.20 マツ科マツ属 [二葉松類]

報告書抄録

一般財團法人米子市文化財團埋蔵文化財発掘調査報告書21

鳥取県米子市

## 米子城跡第54次調査

2020年3月

編集・発行 一般財團法人 米子市文化財團

〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地

TEL 0859-26-0455

印 刷 勝美印刷株式会社